

林孫藏家文書「松前町年寄詰所日記抜書」

神奈川県立日本常民文化研究所蔵

## 余市水産博物館研究報告別冊

---

2013年 3月

三浦泰之・田島佳也：林孫藏家文書「松前町年寄詰所日記抜書」

余市水産博物館

余市水産博物館  
研究報告別冊

2013年 3月

余市水産博物館

神奈川大学日本常民文化研究所蔵  
林孫藏家文書「松前町年寄詰所日記抜書」

三浦 泰之・田島 佳也

## 神奈川大学日本常民文化研究所蔵 林孫藏家文書「松前町年寄詰所日記抜書」 解題

三浦 泰之・田島 佳也

西蝦夷地ヨイチ場所の場所請負人であった三代目林長左衛門（一八二三～一八八二）は、安政七年（一八六〇）三月九日、松前藩から松前城下の町年寄を命じられた。元治元年（一八六四）に隠居して源左衛門と名乗るようになってからも、慶応三年（一八六七）一月二十九日に病氣を理由に「御免」となるまで、引き続き、その職務に当たった（三代目林長左衛門のことは、以下、源左衛門と呼称する<sup>①</sup>）。

町年寄は、特権的上層町人から選ばれ、松前城下のほか、江差・箱館にも置かれた。町年寄詰所（町役所）に詰め、町奉行の支配下で町方の諸政の事務にあたった町役人の筆頭であり、御目見得の格式が与えられ、苗字・帯刀を許されていた。源左衛門が職に就いた安政七年（一八六〇）当時、松前城下の町年寄は、源左衛門のほか、上田曾右衛門、村山伝兵衛、村山金八郎の四人体制であった。

松前城下の町年寄の具体的な機能については、鈴江英一氏により、以下の通り、まとめられている<sup>②</sup>。

町年寄の機能は、（一）市中の取締、法令の伝達、徴税・夫役、職業奨励、人別の把握などの市在住民に対する取収課役管理、（二）願伺届・証書への奥印等の証明、民事訴訟勧解、捨子・鰥寡孤独・老令・篤行者への賑恤、町入費の管理、祭礼などの住民保護、（三）名主・町代の黜

陟、帳簿の管理などの町政機構の内部管理のほか、（四）藩主などの動向に関すること、とくに参府往来、家臣・幕吏・諸藩士の往来、社寺関係事務、足軽関係の事務等々、藩庁が携わるがごとき事務の処理にあたっていたと、目下のところは概括できよう。さらに、その管轄は、町奉行のそれに照応して在方をも含む範囲であり、また、すくなくとも松前藩復領期にあつては、藩と町方、とくに特権的商人を頂点とした上層町人たちとの結節点、城下支配のかなめとしても機能していたのである。

以上のように広範な職務に携わった松前城下の町年寄であるが、その職務の内容を具体的に示す史料は、ほとんど残されていない。その中で、『松前町史』史料編第二巻（松前町、一九七七年）にて「松前町年寄詰所日記并番日記」として翻刻紹介された余市町所蔵の林家文書にある文書は、唯一まとまった形で残されている史料と言える。主として、幕末期に源左衛門が町年寄を命じられたことに由来して林家文書に含まれている文書で、その史料的な特徴は、①初めて町年寄に就任した源左衛門が、当時、町年寄詰所に保管されていた過去の日記から、職務の参考とするために記事を抜粋した「松前町年寄詰所日記抜書」（文政八年（一八二五）八月～天保五年（一八三四）七月）、②源左衛門が町年寄在任中、現在進行形的に作成された日記類（在任期間中に町年寄詰所で作成されていた日記を、毎日にわたって写した「松

前町年寄詰所日記写」(安政七年(万延元年・一八六〇)三月(四月)や、詰所への詰番であった日の出来事のみを記した「番日記」(万延元年(一八六〇)五月(慶応二年(一八六六)二月)など)に大別される<sup>(3)</sup>。いずれも、松前城下の町年寄が担った広範な機能を背景に、当該期の松前藩政の動向や松前城下の社会・経済・文化を理解する上での基礎的史料として高く評価されている。

この史料集で翻刻紹介した、神奈川大学日本常民文化研究所(以下、常民研と略記)所蔵の林孫蔵家文書「松前町年寄詰所日記抜書」も、ヨイチ場所請負人林長左衛門家ゆかりの文書群の一部である<sup>(4)</sup>。しかも、前掲『松前町史』所収の町年寄関係史料の特徴<sup>(1)</sup>として挙げた「松前町年寄詰所日記抜書」と、元々は一緒に作成された文書と考えられる。

表1として、余市町所蔵と常民研所蔵の「松前町年寄詰所日記抜書」を、年代順にまとめた。前掲『松前町史』所収の余市町所蔵分は文政八年(一八二五)八月十九日の項(部分)から天保五年(一八三四)七月二十三日(部分)の項までの約九カ年分であるが、常民研所蔵分を合わせると、その欠落部分も含めて前後の年代が補われ、文政六年(一八二三)一月二日の項から天保十二年(一八四一)三月二十六日の項まで、約十八カ年と三カ月分になることがわかる。

「抜書」が始まっている文政六年(一八二三)一月は、実質的に、幕府から松前和入地と蝦夷地一円が松前藩へ「復領」となって初めて迎えた正月に当たる<sup>(5)</sup>。これ以前の時期の「抜書」が存在する可能性は否定出来ないが、源左衛門が松前藩復領期以降の松前城下の主要な出来事や先例を参照すると

いう意図で抜き書きを行ったとすれば、「抜書」の開始時期としては妥当とも思われる。また、常民研所蔵分を合わせても、「抜書」は天保十二年(一八四一)三月二十六日の項までしか確認されず、それ以降の時期については、作成されたのか否か、よくわからない。ただ、北海道開拓記念館所蔵の林家文書にある「(鮭漁獲日誌)」<sup>(6)</sup>という近代文書に、「松前町年寄詰所日記抜書」の天保十二年(一八四一)六月十六日の項と思われる近世文書が再利用されている事例が確認されることから、表1のNo.30以降も「抜書」が存在した可能性が高いと考えられる。ひとまずは、前掲『松前町史』所収の「松前町年寄詰所日記并番日記」解題で推定されているように、源左衛門が町年寄に就任した直前の時期まで「抜書」が存在した、と考えておきたい。

「松前町年寄詰所日記抜書」は、あくまでも、筆写者である林源左衛門の何らかの意図が反映された抜き書きであり<sup>(7)</sup>、町年寄詰所で作成された日記の記事全体を網羅するものではない。ただ、松前城下の町年寄が担った広範な機能の実態を伝える史料に乏しいという現状にあつては、「松前町年寄詰所日記抜書」が持つ史料的价值は高いと考えている。本史料集が多くの方々に活用されるとすれば、幸いである<sup>(8)</sup>。

なお、本史料集では、紙幅の都合上、常民研所蔵の林孫蔵家文書「松前町年寄詰所日記抜書」の内、文政六年(一八二三)から文政八年(一八二五)松前までの分(No.1)、天保五年(一八三四)から天保七年(一八三六)までの分(No.13(No.19の一部))のみを対象とした。残りの分については、次年度以降、継続して翻刻紹介していく予定である。

(文責・三浦泰之)



表 1 林家文書に確認される「松前町年寄日記抜書」

| No. | 資料名         | 数量      | 所蔵 | 記載期間・備考   | 翻 |
|-----|-------------|---------|----|---|---|
| 1   | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 62<br>枚 | 常民 | 文政6年(1823)1月2日～12月30日<br>文政7年(1824)1月1日～12月30日<br>文政8年(1825)1月29日～8月19日(途中)<br>※綴外れ墨付62丁分。最後の丁に相当する一紙の奥に「八ノ一」と墨書あり        |   |
| 2   | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 1<br>綴  | 余市 | 文政8年(1825)8月19日(途中)～8月27日<br>文政9年(1826)3月4日～11月13日<br>文政10年(1827)4月4日～9月17日(途中)<br>※墨付34丁。最初の丁の端に「八ノ二」、最後の丁の奥に「文十ノ一」と墨書あり | ○ |
| 3   | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 1<br>綴  | 余市 | 文政10年(1827)9月17日(途中)～12月28日<br>文政11年(1828)1月3日～9月23日(途中)<br>※墨付31丁。最初の丁の端に「文十ノ二」、最後の丁の奥に「文十一 イノ一」と墨書あり                    | ○ |
| 4   | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 1<br>綴  | 余市 | 文政11年(1828)9月23日(途中)～24日<br>文政12年(1829)1月9日～5月8日(途中)<br>※墨付22丁。最初の丁の端に「文十一 イノ二」、最後の丁の奥に「文十一ノ三」と墨書あり                       | ○ |
| 5   | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 1<br>綴  | 余市 | 文政12年(1829)5月8日(途中)～12月1日<br>※墨付26丁。最初の丁の端に「文十一ノ四」と墨書あり   | ○ |
| 6   | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 1<br>綴  | 余市 | 文政13年(天保元年・1830)2月8日～12月30日<br>天保2年(1831)1月1日～2月27日(途中)<br>※墨付37丁。最後の丁の奥に「天保二ノ一」と墨書あり                                     | ○ |
| 7   | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 1<br>綴  | 余市 | 天保2年(1831)2月27日(途中)～12月27日<br>※墨付39丁。最初の丁の端に「天保二ノ二」、最後の丁の奥に「天保二ノ三」と墨書あり   | ○ |
| 8   | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 1<br>綴  | 余市 | 天保3年(1832)1月11日～9月22日(途中)<br>※墨付23丁。最初の丁の端に「天保二ノ次四」、最後の丁の奥に「天保三ノ五」と墨書あり   | ○ |
| 9   | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 1<br>綴  | 余市 | 天保3年(1832)9月22日(途中)～12月20日<br>天保4年(1833)1月7日～9月18日(途中)<br>※墨付37丁。最初の丁の端に「天保三ノ次六」、最後の丁の奥に「天保四ノ七」と墨書あり                      | ○ |
| 10  | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 1<br>綴  | 余市 | 天保4年(1833)9月18日(途中)～12月30日<br>※墨付35丁。最初の丁の端に「天保四ノ次八」、最後の丁の奥に「天保四終次ノ九」と墨書あり  | ○ |
| 11  | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 1<br>綴  | 余市 | 天保5年(1834)1月13日～3月20日(途中)<br>※墨付23丁。最初の丁の端に「天保五初次ノ十」、最後の丁の奥に「天保五次ノ十一」と墨書あり  | ○ |
| 12  | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 1<br>綴  | 余市 | 天保5年(1834)3月20日(途中)～7月23日(途中)<br>※墨付32丁。最初の丁の端に「天保五次ノ十二」、最後の丁の奥に「天保五次十三」と墨書あり   | ○ |
| 13  | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 32<br>枚 | 常民 | 天保5年(1834)7月23日(途中)～11月10日(途中)<br>※綴外れ墨付32丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保五次ノ十四」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保五午ノ十五」と墨書あり                         |   |
| 14  | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 23<br>枚 | 常民 | 天保5年(1834)11月10日(途中)～12月29日<br>※綴外れ墨付19丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保五午ノ次十六」と墨書あり   |   |
| 15  | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 39<br>枚 | 常民 | 天保6年(1835)1月6日～閏7月22日(途中)<br>※綴外れ墨付39丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保六乙未年方始り」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保六未一終」と墨書あり                             |   |
| 16  | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 29<br>枚 | 常民 | 天保6年(1835)閏7月22日(途中)～10月22日<br>※綴外れ墨付29丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保六未ノ二」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保六未年ノ三」と墨書あり                             |   |
| 17  | 〔松前町年寄日記抜書〕 | 36<br>枚 | 常民 | 天保6年(1835)10月23日～12月27日<br>※綴外れ墨付36丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保六未ノ四」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保六未ノ〔抹消〕「五」終五。」と墨書あり                         |   |

|    |               |         |        |  |
|----|---------------|---------|--------|--|
| 18 | 〔松前町年寄日記抜書〕   | 42<br>枚 | 常<br>民 | 天保7年(1836)1月3日～4月12日(途中)<br>※綴外れ墨付42丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保七丙申年始。六」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保七申年七」と墨書あり                                 |
| 19 | 〔松前町年寄日記抜書〕   | 36<br>枚 | 常<br>民 | 天保7年(1836)4月12日(途中)～6月28日<br>天保8年(1837)1月8日(途中)<br>※綴外れ墨付36丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保七申年八」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保七終八始九」と墨書あり            |
| 20 | 〔松前町年寄日記抜書〕   | 45<br>枚 | 常<br>民 | 天保8年(1837)1月8日(途中)～4月13日(途中)<br>※綴外れ墨付45丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保八年十」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保八ノ十一」と墨書あり                                 |
| 21 | 〔松前町年寄日記抜書〕   | 45<br>枚 | 常<br>民 | 天保8年(1837)4月13日(途中)～9月23日(途中)<br>※綴外れ墨付45丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保八ノ十二」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保八ノ十三」と墨書あり                               |
| 22 | 〔松前町年寄日記抜書〕   | 53<br>枚 | 常<br>民 | 天保8年(1837)9月23日(途中)～11月14日(途中)<br>天保9年(1838)1月4日～閏4月23日(途中)<br>※綴外れ墨付53丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保八ノ十四」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保九ノ十五」と墨書あり |
| 23 | 〔松前町年寄日記抜書断簡〕 | 1<br>綴  | 余<br>市 | 天保8年(1837)11月18日～12月29日<br>※墨付13丁。前後欠や、上記の期間内にも欠落箇所がある。1丁目には別の日記が混在。No.22との関係は不詳   |
| 24 | 〔松前町年寄日記抜書〕   | 43<br>枚 | 常<br>民 | 天保9年(1838)閏4月23日(途中)～8月15日(途中)<br>※綴外れ墨付43丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保九ノ十六」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保九ノ十七」と墨書あり                              |
| 25 | 〔松前町年寄日記抜書〕   | 33<br>枚 | 常<br>民 | 天保9年(1838)8月15日(途中)～12月26日<br>天保10年(1839)1月6日～4月13日(途中)<br>※綴外れ墨付33丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保九ノ十八」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保十ノ十九」と墨書あり     |
| 26 | 〔松前町年寄日記抜書〕   | 1<br>綴  | 常<br>民 | 天保10年(1839)4月13日(途中)～11月23日<br>天保11年(1840)1月25日～3月8日(途中)<br>※墨付41丁。最初の丁の端に「天保十ノ二十」、最後の丁の奥に「天保十ノ二十一」と墨書あり                     |
| 27 | 〔松前町年寄日記抜書〕   | 1<br>綴  | 常<br>民 | 天保11年(1840)3月8日(途中)～6月9日(途中)<br>※墨付23丁。最初の丁の端に「天保十一ノ二十二」、最後の丁の奥に「天保十一ノ二十三」と墨書あり  |
| 28 | 〔松前町年寄日記抜書〕   | 1<br>綴  | 常<br>民 | 天保11年(1840)6月9日(途中)～8月17日(途中)<br>※墨付31丁。最初の丁の端に「天保〔抹消〕「十二」〔朱書〕「十一」ノ二十四」、最後の丁の奥に「天保〔抹消〕「十二」〔朱書〕「十一」十一ノ二十五」と墨書あり               |
| 29 | 〔松前町年寄日記抜書〕   | 1<br>綴  | 常<br>民 | 天保11年(1840)8月17日(途中)～12月〔日不詳〕<br>天保12年(1841)1月13日～2月16日(途中)<br>※墨付48丁。最初の丁の端に「天保〔抹消〕「十二」ノ二十六〔朱書〕「十一」」、最後の丁の奥に「二十七」と墨書あり      |
| 30 | 〔松前町年寄日記抜書〕   | 1<br>綴  | 常<br>民 | 天保12年(1841)2月16日(途中)～3月26日<br>※墨付30丁。最初の丁の端に「天保十一ノ二十八」、最後の丁の奥に「天保十一 二十九」と墨書あり  |

注1) No.1～No.30は全て同じ筆跡で、筆写者は三代林長左衛門(源左衛門)である。

注2) 「所蔵」欄の「常民」は「神奈川大学日本常民文化研究所」、「余市」は「余市町」の略記である。

注3) 「記載期間・備考」欄では、まずゴシック体で当該資料の記載期間を示して、「※」以下にその他の情報を記した。

注4) 「活」欄の「○」は、当該資料が、松前町史編集室編『松前町史』史料編第2巻(松前町、1977年)で翻刻紹介されていることを意味している。

注

- (1) 林源左衛門の町年寄就任については、鈴江英一「松前町年寄詰所日記并番日記」解題（松前町史編集室編『松前町史』史料編第二巻、松前町、一九七七年、四三三～四四一頁）を参照のこと。また、ヨイチ場所請負人林家の歴史や、林家文書をめぐる研究史については、北海道開拓記念館一括資料目録第38集『林家資料目録』（北海道開拓記念館、二〇〇九年）を参照のこと。なお、現在、林長左衛門家ゆかりの文書は、余市町のほか、北海道開拓記念館、北海道立図書館、札幌市中央図書館、小樽市総合博物館、北海道大学附属図書館、官城学院女子大学学芸学部人間文化学科、神奈川大学日本常民文化研究所などに所蔵されている。
- (2) 鈴江英一「松前城下・町年寄の職掌と機能―松前藩における城下町支配解明のための一考察―」（『松前藩と松前―松前町史研究紀要―』十一号、一九七七年）三二頁。
- (3) 詳しくは、前掲注(1)。「松前町年寄詰所日記并番日記」解題を参照のこと。なお、四代目林長左衛門（朝恭）も、館藩（旧松前藩）から明治三年（一八七〇）七月二十六日に町年寄を命じられており、前掲注(1)。「松前町年寄詰所日記并番日記」では、その「勤中日記」も翻刻紹介されている。
- (4) 常民研所蔵の林孫蔵家文書には「松前町年寄詰所日記抜書」のほか、明治二年（一八六九）五月九日（途中）から十月二十七日までのヨイチにおける日記と考えられる文書（林源左衛門筆、綴外れ墨付一五〇丁分）などがある。
- (5) 幕府より松前藩へ復領が申し渡されたのは文政四年（一八二二）十二月七日で、実際に引き渡しが終了したのは翌文政五年（一八二三）四月のことである。
- (6) 収蔵番号一五三三八一（整理番号G―一三四）。前掲注(1)北海道開拓記念館二〇〇九年の九五頁を参照のこと。
- (7) 前掲注(2)鈴江一九七七年によれば、記事の傾向性として「殿様参府、若殿大病・葬礼のほか、火事、異国船警備、蝦夷人献上、砲術訓練、疫神祓という特別重要行事または事件、さらに寺院礼順（住職の藩主拝謁順序・位置）など先例規範となる事案」については詳細であるが、「番日記」に頻繁にあるような「一般の旅行者の記事、養子などの縁組の記事をほとんど含んでいない」という特徴がある（八頁）という。
- (8) 常民研所蔵の「松前町年寄詰所日記抜書」を活用した研究成果に、蘆慎一「近世後期における余市場所の請負について―林家による余市場所請負過程を中心に―」（『余市水産博物館研究紀要』第十四号、二〇一一年（総合地球環境学研究所「日本列島プロジェクト」フォーラム「海・森・人―林家文書と地域「資源」利用史を考える―」研究成果報告書））がある。

※史料紹介を、ご承諾くださいました神奈川大学日本常民文化研究所に感謝申し上げます。

### 【史料編の凡例】

- ① 本書の史料編では、神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵する「松前町年寄詰所日記抜書」の内、文政六年（一八二三）から文政八年（一八二五）までの分（表1のNo.1）、天保五年（一八三四）から天保七年（一八三六）までの分（No.13～No.19の一部）を対象とした。天保八年（一八三七）以降の分（No.19の続き～No.30）については、次年度以降、継続的に翻刻紹介していく予定である。
- ② 旧字体・異体字・略字は、原則として新字体・正字に改めた。
- ③ 変体仮名は、普通の平仮名に改め、合字も分解して普通の仮名とした。但し、方（より）、江（え）、之（の）、者（は）、茂（も）は、原則としてそのままとした。
- ④ 読点及び「・」は翻刻者が付し、翻刻者による注記は「」で示した。
- ⑤ 原文中で割注になっている箇所については、（ ）で示した。
- ⑥ 本文中の翻刻作業は、三浦泰之（北海道開拓記念館学芸員）が担当し、三浦と田島佳也（神奈川大学経済学部教授）で確認作業を行った。





【文政六年】

文政六癸未年

日記抜書

正月二日、御城内御謡初、夜四ツ半時濟、御奉行所御下り之上、町御役所上座敷おゐて御兩人方銘々下代方名主番役、詰合御足輕迄銘々御盃被下、御肴被下候上二而返盃申上候、御盃頂戴之節、老人ツ、御奉行所前江出ル、

燭台

御奉行 御肴 (八寸ツマミ)

詰合

御銚子御酌

御足輕中

御盃

御銚子御酌

御奉行

御肴 同断

謡人

名主

権右衛門

同 中嶋幸左衛門

同 三浦藤兵衛

名主中

村山伝兵衛

桜庭丈左衛門

右之御祝義相濟候而、御居間江下代罷出、一同難有趣キ御礼申上ル、謡三

人之もの江御奉行所方金百足御目録被下之、

一、箱館表 殿様 御発駕被為遊候二付、大番夜廻り行列番左之通、

志村直左衛門  
村山伝兵衛

名主

九兵衛

町高張

御足輕

御奉行衆

御奉行衆

高張

箱桃灯

町高張

御足輕

町弓張直持御足輕

御手人

御奉行衆

御供

草履取老人

町弓張

町弓張直持御足輕

町年寄

二度目東西江老組ツ、

鳶水籠老人

町弓張 名主

町高張 御足輕式人

鳶水籠老人

内老人

弓張直持

鳶口籠老人 御足輕・名主斗り

相廻り候節

但、壹夜二兩度

町高張 町弓張直持御足輕 御足輕

町弓張 名主

町高張 町弓張直持御足輕 御足輕

鳶水籠

鳶水籠

四月十七日、昨夜五ツ時過通り女かけ込候処、跡より追かけ男参り候而、右女江れんぼ仕掛ケ候間、町方罷出取押、内々相札候処、女者逃、男大酔、御役所とも不相弁、春駒女駒を追にひとしく一心気違之ことく乗込候よし、名主九兵衛中取扱相返し内濟、小松前辺之手代二而誰与申事者秘し候、若沙汰も有之候節ハ如何ニ存留置、

一、奥様 和佐五郎様 御行烈一行烈

左之通

御先払御足輕 若堂 赤看板御先払 名主

老女親 草履取

御先払御足輕 若堂 赤看板御先払 名主

御先箱 御徒士 同 同 御供頭高橋浅右衛門

長刀

御先箱 御徒士 同 同 御供頭佐藤集治

大野小次郎 石黒仁右衛門 御傘 御草履取

御輿

尾見直治 木村与右衛門 御傘 御草履取

御箱 押 御足輕

御茶弁当 長刀

御箱 押 御足輕

若堂 板倉栄吉 御草履取

御年寄親 陸尺四人

若堂 星野利兵衛 挟箱

御菓箱 若堂

医師桜井小膳 具足 柴田浦太

長刀 若堂

鎗 供頭 鎗 草履取 押 龜田吉平

草履取

挟箱 供頭 鎗 草履取 押 広瀬三右衛門

赤看板

御先私 名主 御徒士

御具足 小林官吉

御先私 名主 御徒士

高井弥内 侍中 御鍵

和佐五郎様御親

野村百平 侍中 御長柄

押 治郎吉 御日和見 橋屋長四郎

御料理人

押 中川平八 御日和見 吉田屋清六

御船頭金蔵 若堂

下国工馬 草履取 具足 蠣崎四郎左衛門

御船頭善太夫 若堂

若堂 押 御足輕

草履取 鍵 両掛五荷 合羽籠三向

若堂 押 御足輕

五月二日、奥様 和佐五郎様、九ツ半時御着、御上り場能登屋八九郎下夕

七月二日、御小書院方かれの子塩漬御入用ニ付、兼而竹屋長七方差上候様申

方御行烈浜表、御家老下国齋宮殿・町奉行鈴木記三郎殿・沖ノ口奉行氏家唯右衛門殿、右御三人者御船着之節橋舟ニ而御乗御出、夫方浜江御待受、御小書院方杉村伝五郎殿、鍵・挾箱ニて御出、町年寄、名主、御用達、江差・箱館御用達、名主、問屋、小宿、両浜請負人、江差・箱館者老人ツ、肝煎迄何れも御扇子不残御役所ニて請取置、町年寄御用部家江恐悦罷出候節持参名前書添、御奉行所へ差上、御用達一同御着恐悦、当御役所へ罷出候、

五月廿九日、柴田浦太殿、氏家唯右衛門殿出席、茶屋一同御触之趣并茶屋へ御申渡有之、請書取之候、請書閉込有之、市中之もの之内一人女并人寄セ候ものゝ方へも右之通相触候様、名主五人江も相渡候、請書印形仕候名前左三、

菱屋平左衛門、白浜屋代又兵衛、藤屋福太郎、松村屋重三郎、碓屋藤太左衛門代清兵衛、浜野や三郎兵衛、菱野屋熊二郎、桐屋平左衛門代太郎吉、伏見や利左衛門、村屋善五郎代子之松、娘子や喜兵衛代季助、木綿屋清治、松浪や喜惣兵衛、三崎や忠兵衛、盛屋作左衛門、対馬屋連治、川村屋清七、みのや栄蔵、白川屋飛之助代又七、長崎屋彦九郎、玉川屋惣太郎、湊屋治右衛門、  
ノ廿三軒、

桜庭丈左衛門  
町年寄勤中 張江甚兵衛  
村山伝兵衛  
張江兵九郎

聞居候分、取寄差上候、

七月十二日、寺社御寄附左之通於当御役所奉行衆鈴木記三郎殿、氏家唯右衛

門殿立会、桜庭丈左衛門、村山伝兵衛御取次、以御書附被仰渡候、

一、法幢寺 米四斗入二而四拾俵 金拾兩也、

一、阿吽寺 前同断 金拾貳兩也、

一、光善寺 米廿五俵 金七兩也、

右三ヶ寺者御使二而被下之、

一、法花寺 米七俵 金壹兩貳分

一、宗円寺 米三俵 金壹兩貳歩

一、法源寺 米五俵 一、寿養寺 米三俵

一、龍雲院 米三俵 一、妙蓮社 米四俵

一、経堂寺 米三俵 一、欣求院 米貳俵

一、無縁堂 錢五貫文

一、社人

白鳥伊与 しら鳥形部

米拾俵 金壹兩貳歩ツ、

佐々木大学 木村官司 藤枝伯耆

木村兵部 佐々木権太夫 米五俵ツ、被下之、

右之通御印紙を以被仰渡候、

八月三日、御旧例の形を以社人江赤飯被下候積り、弁天祭礼之節ハ阿吽寺江

も赤飯被下之、山船江者赤飯并御樽肴町御役所方被下候、沖ノ口方山船江

赤飯御樽肴被下之候積り、今日被仰渡候、

一、御家中地面坪割

坪数千貳百坪此間（三十間二十四間ニテ）

同六百坪（此間廿間三十三間ニテ）

坪数三百坪此間（十五間廿間ニテ）  
同 貳百坪此間（十間二十間ニテ）

同 百坪此間（十間二十間ニテ）

右之通被仰出、尤、当時大根畑ニ相成居候地所者畑もの取仕舞候上二而御  
割渡之積り被仰出、尚又、割渡之節者御家老中御老人ツ、御立会有之候趣  
被仰出候、

八月四日、大松前御馬出ス、唐津内橋祭礼棧敷地割、桜庭丈左衛門・村山伝  
兵衛、名主九兵衛・権右衛門、足軽兩人罷出、

左之通、

大松前橋南側

一、老番（西詰南江老間半、橋通り貳間）

一、老番南江貳間間数

一、同三番

一、同四番

一、監物殿方東江貳番間数同 松前内蔵殿

右続南貳番 近藤兔毛殿 同三番 鈴木記三郎殿

同四番 村山伝兵衛

寄合中

順寄合

中書院

中ノ間

御先手組

新古御徒士

新古足輕

松前監物殿

志村直左衛門殿

柴田浦太殿

桜庭丈左衛門

一、内蔵殿方東江憐間數同断 新井田右膳殿

一、同南式番 古田永七郎殿 同三番 藤野喜兵衛

同四番 塩越屋庄兵衛

外二

一、御制札前後 下国齋宮殿

三ノ丸下

一、沖ノ口御番所方西側続二間二九尺 松前帶刀殿

式番同 蠣崎次郎殿 同三番 蠣崎將監殿 沖ノ口入口方西江

四番 蠣崎采女殿 沖ノ口方東ノ方壹番  
新井田金右衛門殿  
杉村伝五郎殿

唐津内橋中方西江

一、壹番四間二四間 沖ノ口并張江甚兵衛

式番(式間二九尺) 酒井不順殿 同三番 下国工馬殿

一、南側式間九尺 明石兵左衛門殿 同式番 高橋淺右衛門殿

同三番 和田頼母殿

一、祭礼山船入用金三拾兩ツ、可相渡処、生府おゐて狂言不勤候分於神明格  
外相勤候入用も御座候付、当年限り金式兩相増、兩方共金三十式兩ツ、相  
渡申候、

八月十四日、神輿・両家台、明日繰出し之義者、暁六ツ時神輿繰出し、山家  
台・船家台者神輿休所方引拔置、先太鼓小松前町昼弁当之内、天神坂御棧

敷前ニテ両家台とも踊相始メ、畢而三ノ丸御上覽場迄御輿渡御為致候而、

両家台とも踊相始メ、其外御仮家例之通り、

一、八幡宮方神明宮江御旅八ツ半時繰出し、御奉行所其段申上、内御役所御

役人中御棧敷御詰被成候様相触へく旨、名主権右衛門を以申遣、御目附御

棧敷掛り蠣崎重兵衛殿江も申遣、

一、和佐三郎様御名代天神坂御棧敷江御下り、惣御役人中も同断、山船踊無

滞相濟、暮ニ及御帰城、

八月十五日、暁六ツ時雨降、五ツ時天氣、

御輿先供繰出ス、蔵町相廻り候付、御棧敷掛り蠣崎重兵衛殿、三ノ丸同小

林六左衛門殿江名主権右衛門を以御家老中始一同御役人御城中迄御詰可被

成旨、御勘定方へ可相越旨、鈴木記三郎殿御達ニ付申遣、

一、御用人町奉行所兩棧敷、

殿様 御部家様 御提重被遣候、御菓子御料理方村山伝兵衛、同人神輿附

添付甚兵衛申遣取扱、

御奉行所方御徒士辻新蔵を以

兩殿様一重宛、輿様同断、御部家様同断、外ニ御口味壹重ツ、

一、張江甚兵衛麻上下ニ而御棧敷江相詰、御奉行所方御用茶手付御足輕湯嶋

忠兵衛召連、祭礼方へ下知いたし、

一、桜庭丈左衛門・村山伝兵衛祭礼奉行被仰付、前後(+)絹羽織飯足輕警固い

たし、若堂式人、鎗持并狭箱(保箱)・草履取老入ツ、合羽籠同供刀ニ而

神輿押供奉、

一、塩越屋庄兵衛・大津屋武左衛門頭人被申付、先警固斗り合羽籠不持、町

年寄供勢同断、



一、種倉屋治左衛門・川内屋勇治御道具支配、若堂鎗草履取斗りニテ奉供、  
一、先供枝ヶ崎繰出し候半々、御案内之積り付、湯嶋忠兵衛ヲ見差遣、

一、殿様三ノ丸御棧敷御忍御出之積り、程能時分刻限見斗、甚兵衛案内可致  
旨、兼而杉村伝五郎殿方御達ニ付、当日御成度々御尋付、其時々御奉行鈴  
木記<sup>三</sup>三郎殿申上、御小書院江御答申上候、

一、山家台者吉田屋前へ引付置、船家台同引続置、

神輿先供馬形七ツ道具迄家台脇行烈通拔為致候よふ、兼而手続之処、御棧  
敷見請候処、船家台先ニ神輿恵比須屋前ニ小休候間、社頭へ相掛合、神輿  
少々脇寄、船家台相通候様可申聞旨、鈴木記三郎殿方被仰付、丈左衛門、  
伝兵衛江申談候処、御下知之通脇寄候段、御棧敷伝兵衛申上置、

一、三ノ丸御棧敷江

殿様御出ニ付、先供奉行烈繰出ス方、阿部や長三郎へ申聞置候処、右先供  
通り抜候跡暫間有之、御退屈ニも相成可申哉、大松前橋濟次第、山家台踊  
為相始候様被仰付、世話人申聞候処、否相始メ恙

御上様 御万悦被召置、甚兵衛御目通ニ付蒙

御意難有奉存候、直に船家台引付神輿御通行御祈禱有之、夫方船家台踊相  
始り、始終都合能

御上覽相濟候ニ付、右之段御奉行所へ申上置、

一、山家台・船家台生府遅成候ニ付、踊芸不仕、  
神輿御帰り、山家台元之場へ八ツ時頃ニ引付、船家台大松前橋夜明ケ方迄  
相懸り、及部村江

殿様御出ニ付、引付見合、十六日朝五ツ半時元之場へ引付、

八月十六日、山船両家台引付場所所在来之通り踊芸相勤申度旨、世話人彦九郎

申立、勝手次第可相勤、尚又、御用部屋へ名主此右衛門を以申立候処、仕  
来之通可相勤旨御違有之、

一、昨夜七ツ時過御道具相納候ニ付、甚兵衛立会、左之通受取、  
御旗廿流、鉄砲三十丁、胴乱付御弓十張（不残ウツホ付）、御長柄廿筋、  
陣笠四十三かい、法被四十枚、字之札、道具支配川内屋勇治相納、

八月十八日、当十五日生府町御仮家ニ而山船両家台踊の義御神輿前ニ而仕候  
義、存外夜ニ入候間、社頭中へ右之訳ケ相嘶候処、承知の趣、夜八ツ時神  
輿目出度社人中御供ニ而八幡宮江相納候故、右御申訳として神明大小家ニ  
而両家台踊いたし、博知石町・生府町・大沢村・上下及部村昇人数江家台  
世話方を使いたし相納、申訳相立度段、鈴木記三郎殿相伺見候処、尤の筋  
ニ而町年寄奉供致候事故、筋合も相立候間、御奉行衆限り御聞濟相成相納  
メ申候、尤、社人中へ者頭人共方使いたし、社人中へ桜庭・村山兩人方弁  
当差出ス馳走いたし候、町廻り足輕の義も兩人右場所へ差出候様被仰聞候  
間、見廻り可致旨申聞候、

一、昨夜四ツ時神明芝居小家ニ而生府町御仮家前ニ而可相勤山船踊り奉納無  
滞相濟候、

九月廿二日、御用部家方御用ニ付甚兵衛罷出候処、御紋付麻上下御渡ス、高  
田嘉市呼出置候様、外、藤野喜兵衛・竹屋長七・住吉屋准兵衛・山田屋文  
右衛門御役所へ呼出し置候様、鈴木記三郎殿御達ス、

一、藤野喜兵衛、万太郎潤平磯并海岸築立藏地面に仕度段、願書差出候、  
一、町年寄下代兼無刀ニ而是迄御礼申上候得共、来正月元日ヨリ以来御礼之  
節共帯劔可致旨被仰出候段、鈴木記三郎殿方御達有之候、

未ノ十二月大晦日

【文政七年】

文政七甲申年

日記之内抜書写

正月元日、御礼、正五ツ時御家中一同御礼、新組御徒士迄相濟、夫方御規式有之、終テ

御上様 御退座、猶又、御出座有之、夫方御寄合中御礼御規式有之、終テ杉戸開キ、町年寄下代兼御扇子

兩殿様江献上、帯劔ニテ御礼申上候、夫方御用達御礼申上候、引取、町年寄下代者当年方於小道具之間御節時被下置、夫方引取、

正月二日之御礼者、町名主方問屋・小宿・兩浜請負人・大工頭・木挽頭、右一同御扇子箱式箱ツ、献上、畢而詰之間方上及部村名主、下及部村名主、大沢村名主御扇子箱同様、座頭秀の一御礼申上候者

殿様 御表江御出席之節御即下御通之内、御家老様御通行御玄關方上り、御用之間入口少々手前之方ニ而通り御礼、尤、町年寄差添、

正月三日、東西村々名主一同江町年寄差添、詰之間方御礼申上候、上ノ国扇子箱献上、錫七わ宛礼鬚村・吉岡村・宮ノ哥村、同拾把白府村、鱗四本福嶋村、夫方海苔式包ツ、札前村・赤神村・雨垂石村・茂草村・清部村・江良町村・原口村・小砂子村・根部田村、尚、知り内村干鯨四尺、右献上何れも名披露有之候、

正月七日、両かい之義者六貫八百文居置申度旨御聞濟、同八日、兩替居置度旨、伺之通り被仰付候段、塩越屋庄兵衛・恵比須屋弥兵衛へ申渡候、

衛へ申渡候、

一、御上様方京都・江都麻疹専流行二付、三豆湯前広二服薬、為油余慶魚類者不用、町江麻疹不濟族へ名主方為申聞候様被仰付、薬味左の通、

黒豆 緑豆 赤小豆 右同分 甘草少々

右者水煎ニ而麻疹前二服したしよし、

一、殿様方御奉行所御用人衆屬一羽拝領被仰付、近藤兔毛殿御宅ニ而御開有之、町年寄三人御同伴継上下ニ而罷上り、但、三月朔日、

三月十七日、惣社明神本社場替願書絵図面相添、氏家唯右衛門殿へ差出ス、一、水野出羽守様御渡、

大目附

朝比奈河内守様御達ス、

式朱銀吹替被仰出候触書写御渡有之、市中在々、上ノ国江触達し、

三月廿七日、寅向町榎弥左衛門（親）権兵衛当申八十八才、同町徳兵衛当申

八十一才、右兩人 御召ニ付御小書院江罷出候処、当年の鯡漁の義御尋ニ御座候付、兩人之もの御答、殿様 御本国被為遊、昨年方鯡群来、一同

難有旨申上候、扱、右鯡者其方共若き時者如何ニ候哉御尋ニ付、同人共申上候者、当年之よふに群来候事無御座候、已前者けふ者荒谷、明日泊川、

惣社堂下所替り続候事有之候へとも、一体ニと申事珍敷儀奉存候、扱、此跡者今日杯者如何可有之哉与御尋之処、今日者鯡者居候へとも如何可有之哉、先ツ明ばん方明後日者群来可申与相待居申候、是ハ半土用当りニ付如

此、夫はつれ候へ者八十八夜迄三者何分今一度群来可申与申上候、夫方御尋、其方共長寿なる事ハ何かたべものニ何草たへるとか、又者肴をくはぬ

と可有之哉の旨、御答、草者何草ニてもたべ申候、肴者何肴ニてもたべ申

候、別ニ是者薬与申もの別ニたへ候覚無御座候、伝五郎殿御尋ニ者、鯁鯁

もたへ候哉与あれハ、此節鯁も老疋半、式疋とたへ候旨申上候、外ニ養生

与申事無御座候、風呂者三ヶ月に一度も入申候、一体兩人ともきらひ御座

候、海川者寒中ニ而も入申候、兩人とも是迄薬たへ候事一切覚無之、灸者

背中ニ跡も無之、老ツも居候事無之旨申上、扱々目出度事ニ候与被 仰成

候、唐更紗紙入老ツ宛被下、御暇被下候下ル、丈左衛門差添罷出候、

七月三日、アツケシ明年方七ヶ年竹屋長七江引統請負被仰付、尤、江戸小林

屋平四郎代宗助方も兼而明年頃季明場所も有之候半々被仰付度奉願候ニ付、

アツケシ長七共申談、兩人ニ而請負可致旨被仰出候間、町年寄方此段申渡

候処、兩人申合、追而書面を以可奉申上段申上、罷下ル、

七月廿六日、小林屋平四郎代宗助願書并長七願書、両通とも氏家唯右衛門殿

方文言不宜処書直し被仰付候、

八月三日、法幢寺玄教和尚晋山二付、御掛り御名代近藤兔毛、

一、〈惣門迄出迎、寺社町奉行〉 志村直左衛門

一、〈惣門迄出迎、御目附〉 新井田右膳

一、〈賄方御掛、御勘定方〉 工藤八郎右衛門

一、御目附 谷橋九十九

一、御吟味方 近藤吉左衛門

一、内下代 鹿能善藏

一、御料理人 西村喜市

一、町下代 桜庭丈左衛門

一、名主 田中九兵衛

右之外、御膳部掛り諸士御給士之御徒士御門張番所迄、夫々出勤の面々有

之候得共略ス、

御晋山二付配役

維那 泉龍方丈 侍者 良芳刀生

午磬 露山刀生 午磬 廓雄刀生

都官 秀明刀生 都官 得林上座

鐘司 全機上座 侍香 大堂上座

香爐 良定上座 香爐 一丈上座

供頭 一仙上座 同 觀峯上座

同 道雲上座

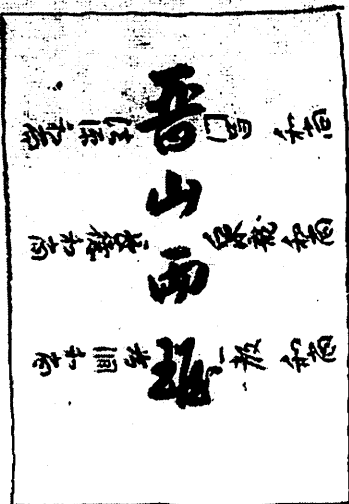
合 照亮

維那白

白槌師被位 白槌師養方丈

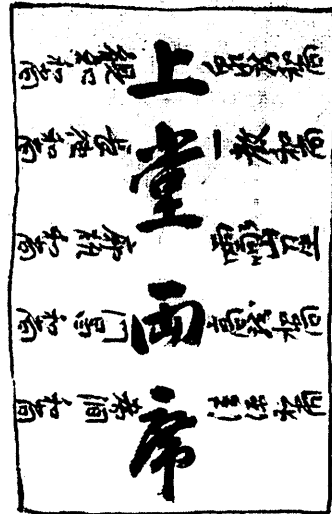
知殿観知刀生

〔左図有〕



右之通張り

[左図有]



法幢寺御拜之外二縁木二而紙張之、

掛ケ額左之通、

此度之晋山龍雲院方参り候積り之處、法幢寺名代并当隠居法源寺方参候例有之候二付、法源寺方晋山之節門前へ左之通り立札有之候、

[左図有]



多敷く晋山龍雲院方参り候積り之處、法幢寺名代并当隠居法源寺方参候例有之候二付、法源寺方晋山之節門前へ左之通り立札有之候、

隠居退院引取之式

茶の間江卓ニ香を焚、緋毛氈ニ拝敷、其上に隠居座ス罷在候処、本堂方一統僧中半鐘・太鼓ニ連れ、此処へ参、三拝有之、夫よりドロくノ太鼓ニ而一同二行ニならび、隠居を中ニ立、本堂付東座敷ニ而一同三拝有、夫方隠居江伴僧共方夫々文問有之、終テ三拝有、夫方半鐘・太鼓ニテチャンチキどん々々之打ませ拍子ニ而隠居本堂仏前江拝礼、夫方下山内黒門ニテ後住玄教和尚東ニ居、隠居西に居、双方三拝有之、二度目入替り、又三拝して双方弗子取かい、夫方隠居四方へ来拜して自身しやく文を突、老人ニ而出門ス、誠ニ愁陽の次第ニ候、直様隠居へ引とる、

晋山玄教

法源寺方案下行烈ニ而法幢寺入院之節、惣門之内江寺社町奉行志村直左衛門、御目附新井田右膳、夫方玄教和尚中門之所ニ而香爐飾り付有之、此処ニ而焼香有之、此所迄一同僧中出迎式有之、夫より本堂江入、和尚文ヲ唱、仏前并所々焼香拜礼し、終テ東ノ方之座鋪江通り、香爐其外飾り付あり、三拜式有之、其時龍雲院、是者役寺也、寺判物三方へ乗セ、方丈の前へ差出ス礼有之相渡、夫方香爐台飾り付引払候而床前の方へ方丈座ス、其時図之通之書物 **呈** 呈 三方江乗セ差出ス、此所ニ而御名代近藤兔毛殿麻半上下ニテ罷出、香を焚、和尚江挨拶様之式有之、夫方方丈始一同本堂御拜、夫方出表通二行之行烈ニテ中ノ口ヨリ茶の間江入、此所ニ而香爐飾り付あり、三拝して座ニ付候へ者、八寸ニ小皿江梅干江白砂糖かけて出ス、茶を汲、役寺龍雲院挨拶有之、又候小皿ニにしめ差出ス、前同断、又干菓子差出ス、前同断、眠藏江入、方丈休息、其内衆僧本堂ニ而式有之、半鐘・太鼓ニ連

れ、先々の通本堂御拜、夫方表通り中ノ口、夫方茶之間江方丈之迎ニ出、  
又此処ニ而方丈江一同三拜、行烈ニ而中ノ口方表通り本堂江入ル、方丈シ  
ユウメタン江座ス、法文其外式有之、夫方表通茶の間江引取、三拜有之、  
一統之寺々方方丈江祝儀品色々差出しならへ置、一統三拜して後口達ニ而  
夫々挨拶有之候、

一、法幢寺江御使者有之、小川提次郎殿御出被成候、其日之御賄方者御昼赤  
飯・煎染、

夕飯者 二汁五菜

一汁三菜 三段ニ有之候、

一汁一菜

右御賄被下、惣人数百三拾五人、

八月五日、法幢寺晋山之儀、市中寺社とも相触并老朱判通用相触候同断、

八月十一日、アツケシ小林平四郎代宗七、銀主上野屋又三郎答書奥書いたし、

鈴木記三郎殿江差出ス、同元請負人竹屋長七答書同断、

八月十五日、阿吽寺不動尊遷座三付、市中神輿ニ而通行なし、無滞濟、尤、

伺候而方繰出し、西ノ方八まん鳥居前江出、夫方御櫓下夕三ノ丸赤御門前

ニテ折禱有之、湯殿沢町へ下り、小松前町通り、大松前町、袋町、中町、

町御役所前通り、川原町古田氏脇方蔵町へ出、横町通、馬坂上り、同寺町

門前表通り方館行有之、行烈無滞相濟候二付、同寺方役僧罷出相届候間、

此段鈴木記三郎殿申上候、

一、今十五日夜方廿日夜迄日々夜廻り人足式人ツ、差遣し候様、鈴木氏方被

仰付候付、名主此右衛門へ申聞候、

一、阿吽寺御本尊遷座二付、寺内へ色々見せもの等も有之、且、水からくり

与申もの、伺之通り昨日被仰付候へとも、先達而宗円寺之御者手踊等も有  
之旨 御意被為在候間、此度ハ殿敷いたし、町方へも申聞置、見廻り方為  
致候様、記三郎殿方被仰付候間、町方七左衛門へ申付置候、

八月十六日、昨十五日法幢寺玄教和尚初テ御目見被仰付、御役人中御一同者  
麻上下ニ而御上り有之、毎度之通り色々御式無滞相濟申候、

一、阿吽寺不動尊并宝物開帳の義者昨夜も時化等有之候間、右者不残相止メ  
候様、御家老月番蠣崎治郎殿方鈴木記三郎殿江昨夜被仰付候間、同寺役僧  
呼出し、相止メ候様殿敷被仰付候、

八月十九日、アツケシ請負人小林屋平四郎代宗助、銀主上のや又三郎、宿近

江屋忠右衛門、元請負人竹屋長七、証人阿部や茂兵衛・塩越屋庄兵衛、上

納金納方等の義、請証印形申渡、

一、アツケシ御場所竹屋長七請負被仰付候砌、運上金千三百七十五両式歩之

処、引続不漁二付金五百七十五両式歩宛御引方有之、漁事出増有之時元運

上金之通り上納之積り、御料より引続有之ニ付、此度竹屋季明引続願の義

も右之趣ニ而相願、兩人江被仰付有之候間、昨請証文申付候砌申渡落ニ相

成候間、則、長七願書小林屋平四郎代宗助江披見為致申候、被仰付之通御

請相濟、

九月六日、恵比須屋弥兵衛方先年長者丸御預ケ之節之御金御渡方、

覚

一、金千五百五拾四兩ト 〈享和三酉年於大坂ニ合船の諸人用〉

◎老ノ四百九十文

右之内、

一、金四百兩 〈寛政十二年申十月廿五日於御役所ニ前金御渡ス有之〉

残金七百五拾四兩卜

卷ノ四百九十文

一、金三百五拾兩余 〈文化二年御參府御用相勤候後三ヶ年中陸囲二付、御

船頭・水主共給代手当其外とも〉

都合金千四百兩余 〈此所御引払之節、御船御下ケ被下置候〉

一、金百拾兩 〈是ハ右御船頂戴被仰付候二付、其節為御冥加差上候〉

右之通御座候、以上、

申閏八月六日

恵比須屋弥兵衛

町御役所

一、梁川表江冥加金献上いたし書附蠣崎将監殿御渡有之、帳面に若落無之哉

可取調旨、其外当方ニ而献上仕候もの名前突合可差出旨、御奉行所方御達

一、若殿様より御用人衆鴨式羽頂戴被成、近藤兔毛殿料理有之、町年寄御相

伴罷出、

閏八月十四日、上下ヨイチ御場所竹屋長七江請負藤野喜兵衛方相讓度旨願書

奥書いたし、志村直左衛門へ差出、

同十六日、於御小書院二町年寄三人江鷹一羽被下置候、引取後刻継上下二而

御札ニ罷出候、

閏八月廿八日、竹屋長七上下ヨイチ御請負来酉年六月方被仰付候献上差出候、

殿様 御肴（茂魚）一種

花色羅背板 一

同茶 一

御樽 一

若殿様 御肴 同断

黒羅背板 二

御樽 一

奥様 御菓子 式箱

御部家様 御菓子壹箱代金壹兩

一、（割印）金百兩 〈小林屋宗助代勘左衛門相納、請取書相渡ス〉

一、右金百兩 竹屋長七江相渡へく二付、左之通印形、

閏八月廿六日

竹屋長七印

一、（割印）金百兩あつけし残もの代竹屋長七江可相渡分、小林屋平四郎  
代勘左衛門上納、

一、古金銀来酉二月迄通用御停止被仰付、引替金遠路之もの持送り入用茂相

懸り二付、道法五里余相隔金五百兩銀座江持出ス候もの江者金百兩二付銀

五分ツ、銀老貫匁二付三分ツ、割合を以里數銀高応じ諸入用被下候積り、

御触書向々江相触候、

九月廿九日、去午年於梁川ニ御冥加金上納仕候もの并小前之貳百文、百文位

迄上納仕候もの共迄奇特ニ被思召、寺社并金五兩以上差上候もの共於御役

所御酒御吸もの被下候、外町々之人數多く候へ者其最寄町年寄宅おゐて御

酒被下候積り、村々の義ハ其村おゐて御足輕被遣御酒被下候積り被仰出候、



十月三日、一昨午年御本国二付、梁川表へ御冥加金銭差上候もの一同御酒御

吸もの被下候二付、今日於御役所寺ハ阿吽寺・光善寺・法花寺三ヶ寺、是

ハ御座敷床之間前之処おゐて御吸もの御肴三種被下之、社人当所七社并福

嶋社人御奉行所於詰所御吸もの御肴五種被下之、其外間屋・両浜町人共金

五兩以上差上候もの、町医師三十六人、次ノ間ニ而御吸もの并御肴被下之、

今日都合人数五十三人、尤、賄方者老人ニ付銭式百五十文目当を以料理方

申付、赤坂屋又兵衛掛り申付候、無滞相済

十月五日、今日於御役所御酒被下之町々、百三十四人川原町、百拾六人神明

町、十九人横町、六十六人蔵町・中川原町、人数式百八十五人、是ハ老

人付銭百五十文之目当テを以賄方致候処、御酒御吸物そい取肴数ノ子欠ミ

するめ生し御吸もの膳向イ鮭老切ツ、紙敷為引候、一同難有拜戴仕候、

十月十日、今日御酒御吸もの被下候四十老人袋町・中町、三十三人枝ヶ崎町、

六十二人泊川町、四十六人伝治沢町、六十人トラメキ、式百四十九人、

十月十一日、龍雲院大鐘鑄候場所申立候様被仰付候、

十月十三日、前同断鑄直ス并場所之儀も願之通り御聞濟ニ有之候間、法幢寺

役僧江可申渡旨、志村直左衛門殿方御達ニ付申渡、

一、博知石町・愛宕町・西館町・唐津内沢町人数百八十五人、御酒御肴被下

之、無滞相済

十月十六日、今日御振舞仕舞二付、馬形東三町并五十集共一同相済候、且、

川原町土佐屋喜兵衛方金老両御冥加差上候趣ニ候得共、右届方間違の由、

御帳二者無之候へとも同人呼上ケ御酒御吸もの被下之、追而金子之行衛相

調候事、

十月十七日、市中一同御冥加差上候もの共へ御酒御吸もの被下之、御礼被仰

上候旨、御達御座候、

同十八日、東西村々一昨年御冥加差上候二付、御酒御吸もの被下之候二付、

名主九兵衛東在、此右衛門西在、右掛取扱方被仰付候、尤御足軽老人ツ、

被遣候積り被仰出候、

十月廿日、東西村々御酒被下候二付罷越御足軽式人手当之伺申処、老人二付

三百文ツ、遣、追而右入用の節者書出請取積り、

一、去ル午年川崎舟の義嚴敷申渡、御印形相済候得共、去年年中前浜鮒

漁業も有之候二付村々為念可申聞旨御達二付、村々此度罷越名主九兵衛・

此右衛門方村役人可申聞旨、御用達・請負人者町年寄申渡積り、

十月廿六日、坪田左平治、引合竹屋長七、宿阿部や茂兵衛、証人中嶋屋庄右

衛門、借金出入二付召出利解申聞置、

十一月十日、昨日長七方差出ス候答書外式通とも氏家唯右衛門殿江御覽入候

処、御一同御揃御覽有之候上ニて此旨佐平太江申聞、一通り承り可申様被

仰聞候間、其積り仕、其上ニて不相分候ハ、御糺被成見可申様被仰聞候、

十一月廿八日、上下ヨイチ請負人竹屋長七方献上、

両殿様 羅背板式切壺包宛御熨斗添、

右之通、尤、御目録等ハ先達而差上候二付、此品昨夜罷下り候間、献上い

たし候、御用部家江此右衛門差添上ル、

十二月四日、坪田屋佐平太、竹屋長七江相懸り出入内済、取扱手放書面名主

長三郎差出候、

十二月十八日、町代一同年頭御礼御目見願書奥書いたし差出ス、

一、町代年頭御目見の義、尤、已前名主役相当り、乍去当時名主已前小使台

所支配兼名主動ニ而有之、右二付御用之間ニ而評儀あり、殊ニ寄、

御上様方可被仰付候様ニも相成可申哉、先夫迄御奉行所右願書御預り之積り、

十二月大晦日、当申年御收納取立高未年増減見合御奉行所江差出、左之通り、

金老万四千九百拾貳兩老歩ト〇三百十二文

右者当申年御收納高

下札 未年御收納取高

金老万四千七百四十七兩二分、錢六百六十文

差引

金百六十四兩貳分二朱、錢五百廿文当申年増

外米書上ニテ

金三十兩二分、錢三百五十文（在々仲間役定式取立之分、当

年方御免

金拾貳兩（長崎俵物年賦御收納方相渡ス）

金六十四兩 鱒休年ニ付取立無之、

金百廿三兩貳歩 馬代御払無之、

小役 金貳百四十九兩貳歩朱ト三百五十文

右者未年御收納高之分御座候処、当年除、

合金四百拾四兩壹分ト錢三百五十文

一、廿九日・大晦日取立高替納書附御奉行所へ左之通、

覚

一、金千九百八拾三兩三歩朱ト錢百二文

但、十二月廿九日取立運上金村々役物

一、金百四拾九兩貳歩、錢六百八十文

但、晦日取立運上金

一、金貳百六十老兩老歩朱ト錢百四十文

但、同取立市中小役錢

金貳千三百九拾四兩三歩ト錢九百廿二文

【文政八年】

文政八乙酉年

日記之内抜書写

正月廿九日、塩越屋庄兵衛罷出、ヨイチ御場所請証文之儀願出申ニ付、当年御運上金納方相糺申処、藤野喜兵衛方者金四百兩、残り者長七方可相納納、乍去請取渡者藤野者七月ニ相心得、長七者六月ニ相心得、行違之趣申立ニ付得与双方承り、運上金共納方書面可差出旨申聞遣ス、

二月四日、ヲタルナイ。ヲシヨロ。タカシマ上下ヨイチ三ヶ所請負人直々呼出し、江差ニ而風聞二者川崎舟与存なから入為込、鯨漁為致候様嘸合も承り候間、亭主直々呼出し様子之義者有之間敷候へとも、尚又嚴重書状ニ而申遣候様可致旨、前同断御内々御嘸ニ而此段申聞為心得申候、

二月五日、藤野喜兵衛・竹屋長七、上下ヨイチ運上金当酉年納割合上納方書面ニ而御届之書面前同断差出候処、御聞届ニ相成候、

二月十四日、龍雲院大鐘鑄立、当十五日方仕度願書預置

二月十六日、同寺方大鐘昨鑄直し御届申上候得共、手都合不宜候ニ付、今日鑄直し仕度段相届候間、

志村直左衛門殿へ申上、町方足輕差遣候様ニ申付候、

二月廿三日、同寺大鐘、明日天氣次第鑄立取掛り候段相届候間、此段前同断  
申上置候、

二月廿四日、御米入札落札

未年米 四百三十三俵 直段四匁式分五り

寅年米 五百四十五俵 直段四匁分五り

代錢五月納

米屋孫兵衛

羽州米

午年 五百八十七俵 (直段三匁七分老り)

万屋増藏

三月十三日、今朝於御用之間ニ惣御役人中蠶の御吸もの被下候由、

一、此度東在亀田村并文月村ニ而霍捉候御鷹名目録於御小書院御用人中江左  
之通、

亀田附七重山出 (巢子) 神臂弓

一、文政 (乙酉) 八年二月廿九日、於亀田石川野谷地ニ拾間程ニ而捉獲之、

居立 村田龜之丞

一、江差附三ツ谷村出

若黄鷹 山寛

一、文政酉八年三月七日、於文月村九羽連れ之貞蠶七十間程ニ而獲之、

居立 秋山庄八

三月十四日、田畑屋五郎兵衛ニ階江飛込候鳥差出候付、御奉行所へ上ル、但、

大キサうちらち大ふり也、

一、今朝田畑屋五郎兵衛差上候鳥者ばんと申鳥の由、珍敷被思召、南簾一片

御目録被下、

四月朔日、阿吽寺江惣社明神普請願、昨年差出ス候分、御下ケ相成差返ス、  
同日、惣社明神遷座の義願之通御聞濟之旨、直左衛門殿方御達、阿吽寺役  
僧へ申渡候、

四月六日、疱瘡退散御札、七社之分御用部家方名主此右衛門受取、尤、壹社  
方五十五枚ツ、

イシカリ三枚ツ、七社の分三通也、ユウフツ (式枚ツ、七社分) 式通  
也、北蝦夷地 (式枚ツ、七社分) 二通、其余者東西蝦夷地一ヶ所江七  
枚壹通ツ、

右之通御足輕東地行者前田茂左衛門、西地行村松三郎兵衛御用ニ付罷下り  
候ニ付訛へ差遣候間、一ヶ所ツ、相配り候様申付候事、

四月五日、阿吽寺惣社明神遷座願差出候、

四月十三日、竹屋長七、小林屋宗助取扱方明朝取扱落着可仕様、勘左衛門江  
申聞候、同十四日、小林屋宗助呼寄、竹屋長七出入場所引渡もの千式百兩  
ニて是迄引渡候外ニ建家老軒・藏老軒・其外綱船大きツニツ・莖百束・居

風呂老・早切千本・桁五十本其外品共替打込、右金高可致段申聞遣候、  
五月朔日、枝ヶ崎町竹屋長七家内伝吉下もヨイチ用事ニ付参り候旨願出、沖  
ノ口江申遣、

五月二日、上下ヨイチ竹屋長七、証人宿塩越屋喜三郎・大津屋武左衛門、名  
主此右衛門御請印志村直左衛門殿被仰渡候、

五月七日、於立石野鉄砲并大筒三百匁・五百匁・八百匁打払、

兩殿様本供ニ而御出有之、御見分御座候、御飯家御覽所統御家老中・御用  
人中・諸家中・御医師迄、其統飯家町年寄・御用達・名主とも、何れも御

赤飯・にしめ添被下置候、的場北ノ方江立武得流方打始、夫方赤松流相濟、

何れも当り宜候、氏家流陳幡ニて行烈繰出し備有之、三十人程之内、廻り  
く四、五人宛入替りく紙玉ニ而打、是ハ其形チ斗り御座候、後方三十  
目・五十目、三、四人ツ、本玉ニ而打申候、右終テ大筒シユリ台山半腹に  
的有之、五はつ放候、其後惣社堂町打越、大松前沖江向ケ四はつ相放、御  
帰り相成候、

五月十三日、今日町方小林弥兵衛窄家見廻り之節、窄守由五郎方へ清蔵母方  
着物相送り参り候内ニ、左之通清蔵江参り一紙有之由届出、写取、御当番  
氏家唯右衛門殿へ差出、

君父重忍令忘却忠孝  
猥事残念千万此事二候

松叟

○たれをかも浮世のことも

うらむまじ

前の心そあぐまなりけり

○天よりのかゝるくもりははるゝとも

我よりつくるつみわのかれじ

○玉の緒のたいて此世にきゆるとも

たゝわするなよ君のめくみを

ばゝ方

清蔵へ

五月十三日、金三拾兩<sup>↑</sup>、金廿四兩藤野、右両家より丈左衛門名前二而  
借用仕、竹屋長七江小林屋宗助出金替濟五十四兩渡遣候、尤、宗助方方八  
月中五十四兩受取候ハ、両家へ返濟之積り候得共、夫迄之所之利足者長七

差出旨申候二付、工面金いたし遣候、相成へく者<sup>ネ</sup>ハくり合宜八月前  
ニ返金いたし度候、

五月廿日、龍雲院大鐘兩度迄鑄損じ出来兼候二付、此度津軽弘前ニ而出来申  
度趣相願、御添書被下度段御開濟二付、其筋へ町年寄共願状差出候様被  
仰聞候付、土岐唯一郎殿へ願書写添、私共連名ニ而願遣し候積り、龍雲院  
方参り、僧禪喜僧并檀中吉右衛門兩人参り、弘前鑄物師榎庭善左衛門与申  
候由、

五月廿一日、同寺大鐘於弘前鑄直ス仕度二付、伴僧禪喜僧地金八拾貫匁程持  
参出帆二付、弘前江土岐渡人殿方へ町年寄連名ニ而添書相渡、尚又十三湊  
入の義同所湊方役人中江添書も遣ス、

六月朔日、竹屋長七方上下ヨイチ請取方に仲彦左衛門外老人差遣度、右二付  
御用状被仰付願書差出候二付、御奉行所御覽ニ入候処、アツケシ振合を以  
書状為認可申旨、氏家唯右衛門殿、湯嶋忠兵衛江申渡ス、

六月廿六日、龍雲院釣鐘弘前ニ而出来致ス、昨日到着、夫方寺へ引取候段相  
届候間、前同断、

七月朔日、伊達林右衛門并竹屋長七両方方ヨイチ蝦夷人五拾人マシケ江秋味  
漁の節出稼ニ遣度旨願書差上ル、

七月四日、ヨイチ夷人男女五十人マシケ相廻ス秋味漁遣ス度旨、林右衛門・  
長七方願出候処、御開濟相成候二付、此段申付候、

七月十三日、龍雲院方鐘供養願出、明日之積り、翌十四日、同寺方供養の義  
来ル廿六日方廿八日迄仕度届書差出ス、今日氏家唯右衛門殿江差出候、

一、殿様 弁財天御祭礼年二付、先旗是迄相用候分損じ候間、白縮緬式巾ニ  
テ長サ壹丈五尺仕、御用達四人并阿部屋伝次郎五人ニ而奉納仕候間、御染

筆柴田浦太殿を以奉願上候処、御開濟ニ而今日御下ケ被仰付候間、御小書院江御礼ニ罷上り候様ニ浦太殿を被仰聞候間、丈左衛門・伝兵衛、名主惣代長三郎御同所へ罷上り、松前万三郎殿江難有趣御礼申上罷帰り、左之通、大弁財天御祭礼

但、白地ニテ文字ハ相色、御印ハ朱ニテ川原町染屋清治江染上ケ方申付遣候、奉納方仕上り迄長三郎掛り也、

一、中町花山家台大痛ニ付新規作替仕度旨、世話人平八・文右衛門申出候間、無余儀筋ニも候間、金貳両差遣候、其余者町内成り世話方なり宜様取斗へ出来候様申付候、

八月朔日、阿吽寺方勝軍地蔵尊山王堂下遷座之所一兩日吹荒レ候ニ付不淨の義も可有之哉被思召、阿吽寺本堂江下遷座仕候様被仰出候間、人足四人差遣ス、無滞相済候、

八月七日、阿吽寺方勝軍地蔵堂出来候ニ付九日遷座仕候ニ付祭礼券々取込候間、賄焚出し申付呉候様并八日夜者三丁中御燈明上ケ候様、川原町へ者盛砂致候様被仰聞候、尚又、御前建再建施主有之候ニ付相残度旨申立候得共、先御遷座いたし、其上願上ケ御下ケ被成候方可然と申談遣候、

八月八日、明九日勝軍地蔵山御神体阿吽寺より御山へ御遷座ニ付、先払御足輕兩人申参り候ニ付、氏家唯右衛門殿へ申上候処、外御一同御談の上、御足輕も不足候間、町方差出、看板ハ、御印付為着候様被仰聞候間、町御役所有合之分為着候積り、名主長三郎へ申付候、

一、阿吽寺方地蔵山御普請出来被成下候ニ付、明九日御遷座ニ付御代参御座候例書面を以差出候処、此度者不遺渡シて本式ニ而有之候砌可差遣旨被仰出候間、役僧へ此段申遣候、

一、明日地蔵山之義ハ三丁御通行被成候而も可然旨、氏家唯右衛門殿を被仰聞候間、其積り名主九兵衛へ申付候、



一、山家台内見桜庭丈左衛門・村山伝兵衛、名主九兵衛・長三郎・専右衛門平服ニ而經堂寺江参り、無滞相済申候、

八月九日、弁天御旗染上ケ惣出来ニ付、柴田浦太殿を以御前様江御覽入候処、誠感心致出来見事之旨御意被為在候段被仰聞難有旨御礼申上候、

〔左図有〕  
大弁財天御祭礼

右唐紙江認メ、今朝柴田浦太殿御持参被成候間、染やへ相渡遣候、八月十三日、新規御足輕並拾五人御祭礼固方ニ被遣候、御棧敷前五人、二ノ御丸御馬出ス四人、山船四人、式人者阿吽寺・八まん・大松前・唐津内橋とも勤、御馬出ス者生府へ参勤、其外追々生府へ相廻り候事、

八月十四日、明日之御代参御祭礼ニ付、今日九ツ時御参詣の積り法幢寺・光善寺両寺へ相達ス、

一、御提重入用  印方真田八尺五寸取杉よふず拾二せん、八木方取酒二升、栖原へ無心申候御菓子玉子あまんちうまんとふす  印へ申付御重詰ハ御料の間江重箱遣候、御上様・若殿様・奥様御提重御部家様江者釣ル付之三ツ組木地蟻、氏家之重箱御座候、是も尅重者御取

肴詰、御提重ハ鈴木之分、御小書院志村之分、西御小書院柴田之分、

殿様江差上候積り、

一、八幡・生府二而十四日方十五日迄 **配**之願御聞濟、

一、山船両家台狂言本式冊御当番柴田浦太殿差上ル、

一、祭礼日送り阿吽寺方申立候、

一、当年方弁財天祭礼卜言先簾老本白唐縮めん二而長崎出役桑権太郎寄進、

殿様御筆二而染上ケ別段増、

一、長崎桑権太郎方奉納簾老流昨日出来二付、

殿様江 今日柴田浦太殿を以御覽入申候、

八月十五日、阿吽寺・八幡宮於 両所雨止御祈祷上ケ候、尤、町年寄丈左衛

門・伝兵衛ハ金百疋、名主祭礼掛り九兵衛・長三郎方二朱ツ、頭人布右

衛門・忠兵衛式朱ツ、御道具支配方二朱ツ、付、祭り家台方百疋ツ、

右之通御初穂差上申候、阿吽寺ハ御神酒斗り、八幡ニテ者一同江御神酒相

濟候後、酒肴吸物二而馳走有之、夕方罷帰り申候、尤、御上方別ニ御嘶も

無之候へとも、右向々談事之上仕候事候、

二番

八月十六日、仙台家小野寺雄治殿江丈左衛門使二而前段之通御目録被下候処、

誠ニ難有奉存候旨宜被仰上被下度段口上并召連れ候もの共へ一同御目録被

下難有旨申候、丈左衛門内々申聞候者、並川親類共方弥守義幸三郎江か

とく相続方相願、御聞濟之上此方へ相越候趣、殊に同人家の義者此方二而

者当式百回忌 京都大江之御帝ヨリ被參候花遊院殿之御附添二而參り候家

故、右年忌ニ心寄相越候事故、再勤願も差出候処、不存寄此度時宜二付迷

惑仕候、此上者何卒同人以御憐愍輕く被仰付候様願仕度旨親るい方御憐愍

願差上候而如何可有之哉の段内々參り候処、弥守国元江召連れ候上、同人

申立候上之儀候へ者難相分り候、左候へ者願如何ニ存申候間、至極御尤御

座候、乍去御沙汰も有之候ハ、前段御嘶申候花遊院附下り之家年回卜申、

殊に古きを泰候訳から、且那二も不便ニ被召置候様承り候間、貴君様限り

御合御沙汰も有之候ハ、宜御取斗被成下度段申候処、私連も承り取成候与

申儀も難相成候、左候へ者又右返書茂不遣候而も不濟候間難成候様申候二

付、全く強而申上候儀に無之候間、何分同人旧家無余儀年回之趣等御合被

下候様申候処、端紙江雄治殿被記候間、相合參り候事存候、

老番

一、仙台家小野寺雄治殿金五百疋昆布式わ、御足輕六人・同心六人江金式百

疋ツ、桜庭丈左衛門御使二而被下之候、外二小野寺江丈左衛門・伝兵衛

方 將監様御筆唐紙江梅二鳥面老杖、扇子江猿面老本、餞別として差送り

申候、

八月十七日、八幡宮方弁財天神輿操出ス、行烈先私方順の弁財天御祭礼ノ大

旗、此度出来元在り来仕直ス、白縮緬江 殿様之御染筆也、此旗の次江御

上ヨリ牽馬式疋、尤、御飾り馬ナリ、是ハ末へ附候例の処、 若殿様方一

番先江差出ス不申候而者飾り馬者不相成候段被仰出候二付、此所へ入候、

畢竟阿吽寺申立者馬巾馬二而宜趣申立候処、又候飾り馬之処間違二而申上

候而今朝相成飾り馬御下ケ二付、然者一番先江出セと被仰付候、夫方段々

例の通り行烈相濟、枝ヶ崎方 殿様四ツ時御棧敷御下り之積り之所、扣居

候得共御下り無之故候候へ者御下知有之、先供行烈大松前御棧敷前橋操り

出ス、船々船印迄先江差操、此間山家台・船家台引込置、財木屋の方へ引

置、馬形七ツ道具ヨリ枝ヶ崎角二扣居候を大松前昼宿迄振込、一同昼飯二



相成、山船狂言相濟候上、附祭り栖原之北村半兵衛差出ス富士家台踊始り相濟、町年寄通る、小松前者山船共中飯になる居候内神輿不殘通る、夫方山船家台并富士家台とも相勤候、附祭り家台者行道々ハ所々ニ而勝手次第ニ相勤候、生府江及暮ニ着、夫方山船家台并富士家台御仮家前相濟、館御ニ相成、山船夜九ツ時過八ツ時ニ及引込納の狂言難相成る、明日の積り御奉行中へ相届、御開濟、

一、山船世話人共へ鈴木様方例ニ無之候へとも今日手配方行届候而金貳百疋ツ、両家台被下候ニ付相渡ス、

一、山船江御上ヨリ御樽一荷一種赤飯大櫃ニて老ツ宛被下候、然処、右櫃の内二三ノ一も赤飯無之旨、内々彼是沙汰有之、殊ニ老櫃之処老櫃ニ而船山江入もの無之間遣候与申来候、表向被下候事故、彼是不申候得共、不相濟儀故内々申来、御番鈴木様御含申上置候、沖ノ口方被下候分も櫃ニ而船山江被下候由承り、

八月十八日、一昨日御祭礼無滞相濟、殊夜中迄に引取候儀、当御月番松前内蔵殿一同骨折之趣御沙汰の趣鈴木記三郎殿御達ニ付、名主并町方へ申聞候、一、今日祭礼相濟候届として阿吽寺両社頭馬形江届ニ出、

一、桜庭丈左衛門・村山伝兵衛兩人、兵九郎、阿吽寺・八まん江届出ル、

八月十九日、並川弥守今日引渡ニ相成候、藤原正蔵殿罷出候、

一、並川弥守江内々仙台家方使の仁小野寺雄治殿存寄為嘶之罷越候、

一、跡祭り場所神明芝居於小家ニ御開濟、廿一日之積り申立、

一、船山江被下候御赤飯当御役所・沖ノ口御役所共大櫃老ツ宛遣可申処、入物無之ニ付老櫃を山船与いたし遣候事間違候間跡祭り之節双方へ〔後欠〕

〔奥端書〕「八ノ一」

〔天保五年〕

〔前欠〕

〔端書〕「天保五次ノ十四」

一、当四月中西在々ニテ鯡大漁有之候処、折悪敷雨天統ニテ掛ケ候鯡も多分くさり候故、海江捨損毛有之候間、年柄ニ寄右様之漁事之節者粕油ニ候方可然哉付、御用之間方御談有之候間、

近藤吉左衛門殿方此旨在方掛り并名主一同江内談いたし、其上ニ而様子可申立様被仰聞候間申談置候、

一、窄家之鍵、是迄町年寄詰所預り置候へとも已来町方頭取江預ケ置候様、改而吟味役勝馬殿御達有之、同役江も為知置候、

一、宿広嶋屋布右衛門、大坂之吉五郎船白神崎おゐて破舟致候付願出候間、高張式ツ相渡遣候、

七月廿八日、御用達六人方御用立金三千廿五兩老歩ト錢四十八文、御預り米

五千四百拾壹俵、請負人一同方御用立金貳千四百拾壹兩老分一朱ト七貫九

百五文、御預り米六百五拾俵内（四ト一升入 貳百拾俵、四斗七合入 四

百四十俵）、

右者追々御用立金、御預り米共当節迄之分書面之通式通いたし、新井田岡

治殿差出候、

一、去廿日御会相濟候御積金

金四百九十兩

金百拾七兩三分ト

連中持寄集金高

利金寄高

永十八文三分

金六百七兩三步永十八文三分

内高金百廿兩之内、

金七拾三兩

惠比須屋半兵衛

柏屋庄兵衛

金四十七兩

入雑金殘連中五十八人割渡

但、老口分錢六貫九百五十八文

金百廿兩

金四百八十七兩三分ト

拝借ニ相成候分

永十八文三分

内訳

金百兩 阿部屋太次兵衛

金百兩ツ、

関東屋清治兵衛

藤屋弥七

金四十兩ツ、古畑屋伝十郎・金子屋平七・川内屋清兵衛・畑屋七左衛門

金廿七兩老分ト 笹野屋甚兵衛

永十八文三分

七月廿五日、大坂新大黒町 橋屋手船吉五郎乗積下り米願高之内五百石来未

ノ二月迄延金ニ而御買上ケ被仰付候付、同船吉岡村方昨日廻舟の節大下り

風ニ被吹込、白神崎繁居候处、今朝破舟仕候趣、宿布右衛門方届出、則其

旨近藤吉左衛門殿申上置候、

一、御船幸神丸元買入之御直段金四百老兩老分ト錢百拾老文之趣、犬上郡兵

衛殿御達付、則新井田周治殿江申上候、

一、

越後新潟御宿

石崎弥右衛門

代長五郎

宿種倉屋

治左衛門

代阿部屋

太次兵衛

右兩人御呼出之上、弥右衛門手船十二社丸、旧冬村上領荒川湊方松前江御

廻米之節雪中之事故如何之程之御運賃被下置候而も御雇舟無之、右付弥右

衛門義、旧来御国元通船渡世仕来候為御国恩、前書十二社丸無運賃ニテ廻

米御用相勤申度奉願上、十月廿日新潟出帆、荒川江入津仕候处、同廿六日

地震之後津浪ニ相成、前代未聞之變事ニ而繫留兼替無破舟仕、御用差支相

成奉恐入候、依之去冬於寺泊御買船幸神丸元御直段五ヶ年賦ニ御払被仰付

候様御執成被下置度趣、御米出役桜庭左右吉殿宛之願書差上、御沙汰之上

願之通御船幸神丸御払被仰付候、御代金之儀者五ヶ年難被仰付候間、三ヶ

年割合上納可仕旨被仰出候段、周治殿方被仰渡、依之御請書差上候積り、

右之趣御船元宿阿部屋利兵衛江も被仰聞候、右御船代上納方宿請人種倉屋

之外今老人次左衛門親類なり、同職之内願今一応熟談之上可申出様申付候

处、京屋平八被相願請人仕候段、平八直々罷出申立候、

一、阿部屋利兵衛願上候加賀米拾老匁五分代金来未ノ五月延御沙汰の上御入

用無之趣被仰出候段、周治殿御達ニ付、利兵衛手代へ申達候、

一、高橋孫兵衛・新井田珍平兩人津輕地おゐて囚人式人召捕罷帰り、又捕方

として向地被遣候付、用意金老人江金五兩ツ、都合金拾兩内御役所方兩人

直々請取候、

外二、小泊り行閑道ニ好越 宮嶋官藏、八間田綱右衛門、

宮本仁八郎、山本孝治、

青森行 吉田半治、中山久吉、(仮足懸) 八木伝右衛門、

右者先達而向地へ罷越候得共、若旅用不足之義有之可申哉付、此度老人分四両都合金廿八両、孫兵衛・珍平兩人二而内御役所方受取参り候内金拾兩ツ、兩人江相渡候、是迄途中にて捕方人数之内逢候へ者相渡候積り、殘金八両者野辺地御宿飯田主典・同良作方へ相送り候、捕方人数之内旅用等差支願有之者右金子御渡被下度旨、町年寄連名之願状相添、今度江戸行平沼新五郎殿相願受取書取之遣候、右者逸々御奉行衆御番新井田周治殿方御談有之、諸事伺之上取斗候、右八両而已若不足之節ハ御操合之上御取替被下候様主典へ願遣候様、勝馬殿方被仰聞候、其旨書状書入遣し候、

一、馬形町半兵衛義、囚人見知り付、此度向地江被遣候間、為用意不常金之内金四両相渡候様、勝馬殿方被仰聞候間、頭取古田八平へ相渡、

一、高橋孫兵衛・新井田珍平・馬形町半兵衛、右三人乗船の義宜御取斗被下度、新井田周治殿方之御口上郡兵衛殿、梅太郎申上候処、御承知、

八月二日、三國本保米(四斗六升入) 老俵付平年通例直段凡廿四匁替兩かい六十四匁ト見テ四斗入老俵付代式ノ式百七文、

一、羽州新庄米平年通例直段金拾兩付(四斗入) 老俵付凡三十五匁かい老俵付代式ノ九百四十三文、

右者午年中考直段如此ニ御座候、以上、

午ノ八月

西川准兵衛

栖原六郎兵衛

町一

八月六日、宮川増藏・岩田金藏、今般御用達被仰付候付、先規之通献上左之

通、御小書院 御目録・鏗節老連・白羽二重二足代金五両、宮川増藏、西

御小書院 御目録・鏗節老連・白羽二重老足代二両二分、岩田金藏方も同断献上、

一、祭祀付茶屋仲間方十歳以下之女子供三人、花山家台差出為踊申度旨願出候間、伺書左之通り、

伺書

此度弁財天祭祀付茶屋一同申合十歳已下之女子供三人、花山家台ニテ為踊申度段願出候間、御差支之儀も無御座候半々願之通り被仰付被下置度、此段奉伺候、以上、

午八月六日

村山伝兵衛

桜庭梅太郎

張江又八

右半切紙認メ半紙へ折掛、

八月七日、知り内村施米之書付老通差上候、

一、岩田金藏、此度祖父年回相当り候付、市中小前難渋之御百姓中へ米拾石来十日施米として差出度願書、周治殿差上候、

一、茶屋一同方花家台差出十歳已下之女子三人江為踊候義願書差上候処、伺之通被仰付候旨周治殿方御達ニ付、名主九八江申達、外ニ子供角力家台老ツ差出候義者口達ニテ申上、御奉行衆御聞濟候、

一、弁天祭祀ニ付小宿一同組ニテ相撲家台練もの差出ス、三丁方花山家台差出候付、是迄之通り大松前橋御馬出ス、唐津内橋、生府右四ヶ所ニ而船山

家台稽古所ニテ相勤為申候よふ、新井田周治殿方被仰付、尤、張江又八伺上候処、則被仰付候、

- 一、十四日祭礼之儀、是迄之通山船両家台狂言致候節同様当年者相撲家台・子供家台共為踊不苦旨御潤濟、向々江相達、同日行列阿吽寺操出ス、御役所前通り御馬出ス、三ノ丸上り、夫方八幡宮へ御旅いたし度相伺候処、御用地之節方無之義者決して不相成候間、先規仕来之通可取斗と被仰付候、
- 八月十二日、福嶋屋新右衛門持地小松前町南手板藏方昨夜九半時出火、西隣〈大津屋〉武左衛門飯小家共式ヶ所焼失、
- 一、昨十三日、雨降付、御祭礼御旅如何と存、談の上、阿吽寺八幡江御祈禱差上、一同参詣、町年寄一同方百疋御初穂差上候、
- 八月十六日、今朝五ツ時弁財天御輿八幡社御仮家操出ス、大松前橋おみて阿吽寺七社共旧例の通り御祈禱有之、夫方御馬出スニ而同断、生府御仮家江昼八ツ時過に御旅、夜五ツ時還行ニ相成候、角力家台・手踊家台大松前橋ニテ行列、昼飯の内両家台踊相済行列通り候後、所々て踊候得共、唐津内ニて大雨相成、生府へ参り、御仮家前踊いたし、帰りの節も見物之もの望ミ勝手次第為踊候、還行無滞相済候段、祭礼奉行村山伝兵衛・張江又八兩人御役所江罷出、御泊り番奥平勝馬殿御届申上候、
- 一、天神坂下夕御奉行衆棧敷江昨日町吟味奥平勝馬殿、桜庭梅太郎羽織袴ニ而罷越候、今日者御奉行衆始一同継肩衣ニ而罷越候事、名主権右衛門・九兵衛兩人とも赤看板着用、昨今日共下夕棧敷相詰候、
- 一、弁天御神輿昨日阿吽寺操出ス、八幡へ御旅之上案内有之、御代拜新井田周治殿御勤被成候、右御出之節御初穂南簾一片内御役所方請取御持参被成候、
- 一、当日御神輿大松前橋ニ御祈禱の節当御役所方十二銅十二匁御棧敷方名主ニ為持、散米箱江入候事、尤、内御役所方御達有之請取候、
- 一、今日大松前ニ而昼の節、阿吽寺へ昆布一折・御樽一荷、社家中江干数ノ子老台・御樽一荷、御役所方被下、旧例之通頭人手附へ名主方相渡候、
- 八月廿一日、工藤庄兵衛方御買上ケ米被下置度旨願出、則御奉行近藤吉左衛門殿へ申上置候書上、左之通り、
- 一、加賀米六百七拾俵（升四八入）直段八匁、
- 一、越前米三百八拾俵（升四六入）直段八匁、
- 一、上方米千五百俵（升三五入）直段八匁五分、
- 来未五月代金御下ケ御座候半々直段拾匁、
- 九月四日、弁財天御祭礼ニ相用候小旗、昨年出火之砌、世話人方ニ而取失、相見得不申、注文仕居候へとも、去月十五日御祭礼之節間似合不申、仮ニ布旗三拾本、押毛鎗式本大松前橋相建候、大旗式本、此度相下り候間、川原町方阿吽寺迄先日御祭礼之奴子供ニ為持相納、於同寺御祈禱之上支舞置度趣、名主を以伺出候間、近藤吉左衛門殿御内意申上候処、御祭礼無滞相済候後、右様先例ニ無之事いたし候而者不宜候間、御祈禱而已ニ而可然旨被仰出候間、其段名主九八江達ス、
- 一、当年御収納金高之内、是迄納高、唯今方極月迄納高共惣調被仰付書上、左之通、
- 午年御収納金凡調書
- 一、金貳百拾六兩三分ト 長崎運上代り金、去巳年方
- 永百拾三文四分 当春上納
- 一、金壹万三千九百六十五兩 当年御運上金
- 永百文
- 一、金六百八拾壹兩壹歩壹朱ト 東西蝦夷地ニ分積金

永百拾九文 差荷物料上乘金

一、金四百兩 市中在々諸役積り高

金壹万五千貳百六拾三兩一分下

錢貳百九十五文

九月五日、此間中、関東屋喜四郎於江指表金千五百兩借用出来候様御添慮被下度、尤、返済之義者当秋味困荷物明年積取於箱館売捌代金を以返金可致、若困荷物不足之節者鱒漁新荷物積取勘定可仕趣、同役江願書差出、内実承り候处、蠣崎将監様御内意御添慮被下置、江差御奉行三崎八之丞殿并町年寄向人江も御内状被下候段承り候間、当役方伝兵衛罷出、御内々伺候处、何分宜世話いたし候様被仰聞候由、依之同役談事之上、吉村彦兵衛・村上忠兵衛へ書状相認め、喜四郎へ相渡、同人義難去用事有之、為代万屋弥兵衛相願、江差へ遣候、書状不写略ス、

九月七日、愛菜鷹画御掛もの巻幅、金貳千疋、青白小玉貳連、右者加州橋立角屋与次郎義、昨年中越後表出役先椽庭左右吉御取組米之儀付金子等操出し骨折いたし二付、御挨拶として右之三品被下之、尤、与次郎此節居合不申、代として西川准兵衛手代次左衛門、宿上田忠右衛門呼出ス、近藤吉左衛門殿方被仰渡候、

九月十日、津軽様御城米積、昨夜小松前潤おみて難舟仕候付、人足差出し候様、御奉行中、御達有之、右付浜表へ中林九兵衛并町方差出、

一、御用達、請負人、両在之もの御呼出、御書取ヲ以御賞詞之趣、御番近藤吉左衛門殿方被仰渡候、左之通り、

近年打統米価高直之上、去巳年者諸国違作之由ニ而米積舟入津も少く、

藤野喜兵衛

別而奥羽式ヶ国之義者近頃稀なる凶作故、御城下ハ不及申、箱館、江指、其外村々至迄買入米行届不申、御困米を以夫々被成救候節、其方儀、市中困窮之百姓共へ直安ニ俵枘売等いたし、猶又○去卯年十一月中四斗入五十八俵ト式斗八升、当年ノ正月中同断四十俵壹斗式升、都合百俵○致合力候条、達 御聽、寄特之儀思召、御賞詞被成下候間、此後共右心懸ニ而可罷有候、此段申渡候様との御沙汰候、

○印猶又安文前同断、

去卯年十一月中(四斗入) 七十九俵ト

式斗四升、当年年正月中式拾俵ト壹升

六合、都合百俵

去卯年十一月中四斗入百俵

去卯年十二月中、当年正月迄四斗入百俵

去巳年十月中、当年二月迄

下及部村方福嶋村迄十一ヶ村へ四斗入

百六十九俵余

去々辰年玄米三十九升入五十俵

去巳年身欠鯪式千七百六把致配当遣し

去巳年玄米(四斗壹升入) 五十俵

去巳年玄米(四斗二升入) 五十俵

去巳年玄米(四斗一升五合入) 百五拾俵

去巳年九月中、当年ノ正月迄

越後米四斗入方四斗式升三合入迄

式百五十二俵直安ニ売渡

伊達林右衛門

栖原六郎兵衛

西川准兵衛

宮川増藏

岩田金藏

恵美須屋半兵衛

米屋孫兵衛

山田屋文右衛門

請負人一同

吉岡村百姓

与三郎

去巳年十月方午ノ三月迄四斗二升八合入  
ヨリ三斗八升八合入迄四百九十七俵  
直安ニ貸付

福嶋村百姓  
助五郎

九月十三日、買上ケ米代金之内金三百五十兩之内四月中拜借仕、返納方追々  
被仰付候間、右訳から名主一同并私共方書面ニいたし、且又米麦代差引書  
相添、近藤吉左衛門殿差出候、

去巳年十一月中四斗二升入廿俵  
直安ニ売渡

荒谷村百姓  
孫右衛門

九月十四日、阿畔寺、弁財天祭礼旗当年注文致候処、此度相下り候付、明十  
五日開清浄之御祈禱修行仕候趣、同寺方届書差出候間、近藤吉左衛門殿江  
差上候、尤、御祈禱而已、別段手踊之義者無御座、右旗寺内へ立候由申上  
置候、

去巳年十一月中方午ノ正月迄  
四斗式升入五十五俵直安ニ売渡

吉岡村百姓  
松右衛門

一、寺社并市中人別錢六十八貫八百廿九文阿部屋熊治郎預ケ置、今日人別錢  
四拾貫貳百八十七文右同断、

午ノ正月中方米四俵（合力いたし候付）  
去巳年九月方午ノ三月迄三斗二升入方

知り内同 梅五郎  
札前村同

一、御船幸徳丸破舟付、此度入札市中へ被仰付候処、金廿壹兩之内金三兩橋  
舟代差引金拾八兩二万屋専左衛門落札橋樁ニテ、

去巳年方午二月迄四斗二升入  
三十俵ト壹斗六升四合格別直安ニ売渡  
外八斗二升施米

茂草村同  
松兵衛

一、通行人馬牽舍諸廉賄米、当六月減米残として御下ケ相成候趣被仰出候処、  
此節入米沢山有之候ニ付、諸廉賄米是迄之通不殘米ニ而御下ケ相成候様、  
御番新井田周治殿方被仰渡候、

去巳年八月方午ノ五月迄越後米  
三斗九升五合入廿九俵五斗余り格別  
直安ニ売渡

江原町村百姓  
伝治郎

一筆啓上仕候、冷氣弥増御座候得共各様愈御勇健被成御勤役珍重之御  
儀奉存候、然者其御地（関東屋）喜四郎殿御請負御場所当年不漁付、  
金子御手操不宜、依之於当地金千五百兩御借用被成度段、各様へ相願  
候由付、万屋弥兵衛殿態々当地御出之節御念書被成下難有拜見仕候、  
尊書之趣、尚又弥兵衛殿御演述旁承知仕候間、当方近付之人々江一応  
談掛候処、昨年類焼出逢、今年者過分高直之米買入等付金銀不手廻り  
之由ニテ達テ断二者候得共無余義御頼ミ申稀之御儀、殊弥兵衛殿遠方  
御出之処無所論御帰郷之義如何ニも笑止之至り奉存候間、種々相願候  
処、御願の通千五百金者出来不申候へとも、先千両者相談出来寄々罷

当午ノ中越後米（四斗三升入）六俵  
去巳年十二月方午ノ二月迄越後米  
四斗四升五合入十四俵直安ニ貸付并

原口村同 熊五郎  
同村名主

談掛候処、昨年類焼出逢、今年者過分高直之米買入等付金銀不手廻り  
之由ニテ達テ断二者候得共無余義御頼ミ申稀之御儀、殊弥兵衛殿遠方  
御出之処無所論御帰郷之義如何ニも笑止之至り奉存候間、種々相願候  
処、御願の通千五百金者出来不申候へとも、先千両者相談出来寄々罷

隣村江原町村・小砂子村へ同様直安貸付  
去巳年十一月方午ノ二月迄  
越後米四斗三升入六俵当五月迄  
之積りニ而貸付

原口村名主  
関兵衛

談掛候処、昨年類焼出逢、今年者過分高直之米買入等付金銀不手廻り  
之由ニテ達テ断二者候得共無余義御頼ミ申稀之御儀、殊弥兵衛殿遠方  
御出之処無所論御帰郷之義如何ニも笑止之至り奉存候間、種々相願候  
処、御願の通千五百金者出来不申候へとも、先千両者相談出来寄々罷

去巳年十一月方午ノ二月迄  
越後米四斗三升入六俵当五月迄  
之積りニ而貸付

原口村名主  
関兵衛

談掛候処、昨年類焼出逢、今年者過分高直之米買入等付金銀不手廻り  
之由ニテ達テ断二者候得共無余義御頼ミ申稀之御儀、殊弥兵衛殿遠方  
御出之処無所論御帰郷之義如何ニも笑止之至り奉存候間、種々相願候  
処、御願の通千五百金者出来不申候へとも、先千両者相談出来寄々罷

去巳年十一月方午ノ二月迄  
越後米四斗三升入六俵当五月迄  
之積りニ而貸付

原口村名主  
関兵衛

談掛候処、昨年類焼出逢、今年者過分高直之米買入等付金銀不手廻り  
之由ニテ達テ断二者候得共無余義御頼ミ申稀之御儀、殊弥兵衛殿遠方  
御出之処無所論御帰郷之義如何ニも笑止之至り奉存候間、種々相願候  
処、御願の通千五百金者出来不申候へとも、先千両者相談出来寄々罷

去巳年十一月方午ノ二月迄  
越後米四斗三升入六俵当五月迄  
之積りニ而貸付

原口村名主  
関兵衛

談掛候処、昨年類焼出逢、今年者過分高直之米買入等付金銀不手廻り  
之由ニテ達テ断二者候得共無余義御頼ミ申稀之御儀、殊弥兵衛殿遠方  
御出之処無所論御帰郷之義如何ニも笑止之至り奉存候間、種々相願候  
処、御願の通千五百金者出来不申候へとも、先千両者相談出来寄々罷



成候、乍去、借主名前各様御証印ニ而金子承知之積リニ御座候へ者、今般弥兵衛殿御帰郷之序ニ御渡可申上管ニ御座候へとも、右金主者御地之様子不存候付、私共へ取替、猶又後日間違等も為無之、兩人持地御印紙引受申度趣申二付、此段一応弥兵衛殿御掛合申上候処、御一存ニ難被任、御帰登之上各様へ申上被仰聞次第御取斗被成度段御申付、則委細者御同人江御咄申上候間、御帰登之上、御承知被下度奉願上候、尤、右様ニ而各様御承知ニ御座候半々又々可被申遣候間、下書差出候様、弥兵衛殿方被仰聞候付、差上申候、一体右金子之義者私共借用いたし各様へ御取替申上候節ハ証文江差テ六ヶ敷認メ候迄も無之様奉存候へとも、達テ御申付書認メ御同人江御渡申上候、御覽可被下候、私共馬鹿念申上候義者兩人持地面質入候儀付、右之一件一通御掛合申置度而已御座候、宜御勘考御承知之程奉願候、右御報并前文之趣得貴意申度、如此御座候、恐々謹言、

村山伝兵衛様  
桜庭梅太郎様  
張江又八様

村上弥惣兵衛  
吉村彦兵衛

右者弥兵衛持参致帰着、拙者共同役江用立候趣付、何分聞届、証文江指表へ差出呉候様、喜四郎義も願出候間、無抛事故、談之上江指行証文迄通并返書迄通、清次兵衛へ相渡、左之通、

九月十七日付之御紙面、弥兵衛帰着の上致拝見候、如来命冷氣の節御座候へとも各様弥御堅勝被成御勤仕奉賀寿候、然者当所関東屋喜四郎

右願出候金子之儀、御繁用之御中、御心配之御世話被成下御手数相成、別而弥兵衛義御添慮被下、偏御骨折を以借用金出来仕、忝仕合奉存候、随而御申越通り証札私共連印いたし、此度清次兵衛へ相渡、差立申候間、同人着の上、尚又御添慮被成下度奉願上候、右御報旁得御意度、如斯御座候、恐々謹言、

九月廿三日

前三人

前兩人宛

右証文左之通

借用金子之事

一、金千両也 通用文字小判

但、利足一ヶ月金拾五両付金壹分宛

右者此度無抛入用付、各御兩人江御願申、書面之通金子請取借用申候、実正御座候、然者来未ノ七月中定之利足相添無相違返済可仕候、為後証借用証文、仍如件、

天保五年九月

張江又八印

吉村彦兵衛殿

桜庭梅太郎印  
村山伝兵衛印

村山弥惣兵衛殿

九月廿五日、殿様御儀、長々御不例被為入候処、今卯ノ下刻御逝去被遊候付、御役人御一同今早朝麻上下ニ而御詰有之候、右付、鳴物五十日今日方十一月十五日迄、普請ハ昨年両度出火ニ付格別之思召を以今日方十月五日迄十日、但、先年者廿日ニ有之候、寺社、御用達、名主、問屋、小宿、

両浜請負人、市中一同、上ノ国江相触申候、

一、若殿様江為伺 御機嫌、寺院一同、社人一同八麻上下着用ニ而明廿六日四時当御役所迄可罷出旨相触候、

一、前同断付、御用達、請負人、名主、問屋、小宿、両浜一同麻上下着用可罷出旨相触申候、

一、町年寄、名主一同来月五日迄日数十日長髪可為致旨被仰出候間、此段相達、

一、鳴物停止中者風呂屋、髪結床、其外人寄せ之場所者随分物静ニ可致旨被仰出候間、名主へ相達候、尚又、市中一統火之用心、都而町々申合取締可致旨、名主一同方町代共へ申談事置候、

一、御内葬ヨリ御本葬、夫方御四十九日迄御掛り、

御寺詰  
下国齋宮殿

御用人  
工藤八郎左衛門殿  
新井田周治殿

御勘定奉行  
蠣崎四郎左衛門殿  
三村周太殿

御目付  
谷橋九十九殿  
青山壮司殿

御吟味役  
桜庭左右吉殿  
鹿能善蔵殿

町下代  
村山伝兵衛  
桜庭梅太郎

内下代  
中嶋幸左衛門  
村田伴作  
奥山源之丞

名主  
宮川半右衛門  
中林九兵衛

右之通被仰付候、

一、御用部家おゐて御番近藤吉左衛門殿方伝兵衛、名主迄被仰付候事、

一、桜庭梅太郎儀者八ツ時頃方御寺へ名主半右衛門兩人相詰候、

一、八幡宮おゐて上方登船々日和越御神樂修行仕候儀如何可有之哉、集人方

伺出候付、此旨相伺候処、神事之義者御構無之候段被仰出候間、此旨申聞

遣候、

一、御役人中一同者長髪五十日、諸士一同者廿日、御徒士者十日被仰出候趣承り候間、認め置へ御役人中一同髭の義ハ十五日ト承り候、

一、御内葬当廿九日、御本葬来月九日被仰出候、御内葬ハ土門方御出棺の積り、御本葬ハ大手御門方赤御門、夫方御通筋御櫓下夕御通ニ而、三度廻り候義者妙連社前・八まん脇・御城後ロニ而盛砂之上掃除可致旨被仰出候、

一、酒井伊左衛門殿義、御人揃付寺社町奉行江出役御免被仰出候間、寺社御用達其外向々へ相達、

一、町年寄、町方頭取、名主、町方兩人、人足五人、今夜方大番廻り可致旨被仰出候間、通用御門日夜明ケ通スニテ暮方朝まで高張卷本相立候事、但、町下代、頭取卷人ツ、申合、代りく相廻可申事、人足五人、扶持米・ミそ椀の類・ろうそく并薪炭・大根漬ノるい、内御役所方受取可申事、

行列高張二本、町高三ツ、鷲口式本、水籠三ツ為持可申事、

九月廿六日、若殿様御機嫌伺として麻上下着用町年寄御用之間罷出、無滞相濟候、尚又、寺院社人一同、御用達、名主、問屋、小宿、請負人、当御役所罷出、御番鈴木紀三郎殿へ申上候、

一、町年寄、御用達、御目得町人御香典の義者御初七日、御四十九日両度差上可申様被仰付候、尤、当御役所江差上、

松吟院様之御振合多分法幢寺江相納候間、何れ之廉へ差上可申哉、相伺置候間、追而御沙汰有之候積り、鈴木紀三郎殿御達有之候、

一、町年寄始、請負人迄へ御初七日十月二日、御本葬十月九日、御四十九日十一月十四日

右三日於法幢寺拜礼被仰付候、御用達方請負人迄罷出へく旨被仰出候、

一、来月二日御初七日付被下物有之候間、御目見町人書上候様、内御役所方御談有之、左二、町年寄老人、御用達六人、名主五人、問屋十二軒、小宿三人、請負人十二人、上ノ国名主・年寄式人、兩在村々名主十八人、<sup>ノ</sup>五十七人、

一、十月九日、御本葬後、社人一同江御焼香被仰付候間、白鳥集人代采女江申達、尤、七社限り、外社人御達無之、

一、十月朔日、昨夕方御内葬土門方御靈所江被為入、無滞相濟候由、同勤御寺詰方致承知、委細者同勤御寺詰相心得罷在候、

一、靈照院様御初七日付拜礼として江指・箱館兩所方出登いたし候名前左二候得共略ス、尤、町年寄方兩浜請負人迄老人ソ、出登致候、

十月朔日、津輕様御家中昨夜着、宿工藤忠兵衛方書上左之通、

御勘定奉行 御目付

久慈愛二様 对馬茂治郎様

上下三人 上下二人

御勘定下役 附添

飛島宗二郎様 岡本五郎兵衛

鱒ヶ沢問屋 小泊り問屋

山本屋庄五郎 大坂屋半治郎

外手代老人 外手代長四郎

十月三日、津輕越中守様内勘定奉行久慈愛二殿奉行中ニ御目懸り度旨宿忠兵衛を以申出候間、其段申上候処、此節服中之事故御役所ニ而御目懸り候廉哉、旅宿へ罷越候而御挨拶承り候廉哉、一応重役江申達候上ニ而此方方御

案内申上候趣、忠兵衛を以申述候処、至極御尤存候間、明日御目ニかゝり度旨、尚又忠兵衛を以申越候間、鈴木紀三郎殿へ申上置候、然処、御下城之節近藤吉左衛門殿被仰候二者、此節服中付長髪甚見苦敷体ニ有之候得共御用先付御目ニかゝり度義申越付、為外陳奉行下役桜庭梅太郎宅おゐて明日御目懸り可申旨、忠兵衛を以申述置候、

十月四日、今日桜庭梅太郎宅おゐて津輕御家中久慈愛二奉行中ニ御目ニかゝり候積り、昨日申述置、今日奉行中同家出役いたし、忠兵衛を以案内申入候処、差掛り愛二殿腹痛ニ而申出、御逢無之候、勘定下役飛島宗治郎目錄持參致候趣付、張江又八相残り居、奉行中御引取被成候後、飛島宗二郎御出、津輕越中守内久慈愛二申候二者先達而手船元久丸破舟の節者段々御手数ニ相成置存候、右付聊ニ候得共目錄進上いたし候旨、飛島宗治郎を以申出候間、目錄預り置、奉行へ達可申越挨拶いたし、為引取候上ニ而張江又八も桜庭梅太郎宅方引取、近藤吉左衛門殿右之趣申上、尚又、目錄差上候処、預り置可申様被仰付候間、檀弓入置候、尤、目錄之義者金五百疋、

十月七日、靈照院様御本葬付、茶屋一同方御香典献備仕度旨、口上ニテ名主迄伺出候間、鈴木紀三郎殿へ申上候処、御用之間江申上候上不苦候間献備いたし可申様、紀三郎殿方被仰付候間、名主加藤専右衛門へ申付候、

十月七日、竹屋彦左衛門弟長七、庄内酒田迄用儀付罷越申度、右付道中通状并津輕地御印鑑願出候間申上候処、此度秋田久保田迄御用状差遣候付、右御用状相渡、久保田へ着の上町役迄差出請取書持參可致様被仰付候間、其旨長七へ申聞候処、御請申上、御用状通状とも、尤御印鑑等相渡、尤久保田着之日、飛脚看板着用可致申与被仰付候間、右之訳柄故内御役所方看板受取、

〔左図有〕

寄附文書



十月八日、靈照院様御本葬付、茶屋一同方金式百疋御香料として献備仕候旨、名主専左衛門申出候間、聞届置、

一、靈照院様御本葬、今九半時無御滞相濟候、尤、時雨二而御三迎之節大雨と成、本堂おゐて読経并御焼香相濟候、御徒士以下在名主迄者居ながら拜礼被仰付相濟候、一同寿養寺おゐて御蒸物頂戴仕、暮方引取申候、

○九月九日、夜津輕様御手船元久丸破舟致候節、焚出し申付、人足賄方いたし候処、今日書上、左之通り、

栖原六郎兵衛分 白米壹斗貳升 御人足三十壹人

西川准兵衛分 白米壹斗三升 御人足三十人

阿部屋太次兵衛分白米三斗八升 御人足九十二人

右三軒分、近藤吉左衛門殿江差上候、

一、津輕様被下候目録金五百疋配当被仰付候、

金式百疋 名主中林九兵衛 金百疋 町方頭取古田八平

金式百疋 町方金子平三郎・宮本仁太郎・山本富五郎・

吉田伴治・高井紀兵衛・中山久吉

一、津輕越中守様方被下候御目録金五百疋、元久丸破舟之節夫々出役致候もの江頂戴為仕候付、右之御礼久慈愛ニまで張江又八罷越、旅宿おゐて御礼

申述候、追而御忌明之上、呈書を以津輕家江御礼申上候積り、暇乞旁年席張江又八相勤候

一、以来御目見町人通状願出候節者御印鑑江松前家中と申認メ候様被仰付、

諸士之分ハ御名内ト相認メ可申様被仰付候間、其旨書役部家一同ハ違置候、十月十八日、津輕家中へ畑久三郎挨拶遣候節、昆布四把、尤、直段百五十文

ツ、相調、久三郎宅へ為持遣候、尤、御上方被遣候訳無之、久三郎限り挨拶進物之積り心得遣候様、奥平勝馬殿御達付、其段久三郎江申遣候、

一、先日津輕御家中久慈愛ニと申仁、同国御城米積（小松前町）沖三而破舟致候付、態々被参、沖ノ口吟味役中御談有之候砌、兩度桜庭梅太郎宅借上ケ、同人方ニテ取賄酒肴等手配致候付、於内御役所銀二枚被下之候間、為念認置候、

十月廿九日、明晦日朝御三十五日付、今御心時方御退夜、夫方御当朝迄御役人中御寺へ、諸士方御通辞迄者御退夜方御当朝迄御寺へ罷越申候積り、

一、靈照院様御三十五日付、一同御寺へ相詰候様、尤、町年寄已下者無之候、十一月朔日、去年中米穀并諸色高直付、まんちう餅其外豆腐都而喰物在来方

小振りニ拵致商売罷在候処、追々米諸品とも下落ニいたし候へとも、今以昨年之仕来候形ニ而喰物致売買候間、平年之節仕来姿ニ為相直様、紀三郎殿方被仰付候、

一、南嶺并彦朱銀者勿論、都而金銀見所不弁者も見苦敷杯と容易ニ不請取、

至而融通不宜候間、格別目輕と欺、又者無相違惡金者兼而触置候処、何れ之もの所持有之共御役所へ可相納、左も無之金銀者疑念不致無差支通用致候様相触候様、是又鈴木紀三郎殿方被仰付候、

一、靈照院様御四十九日来十五日御相当ニ付拜礼被仰付候間、名主・年寄罷

出候様、上ノ国江も申遣候、

十一月九日、若殿様 御儀、今日ヨリ

殿様与 可奉 称旨被 仰出候間、寺社・市中・御用達・問屋・小宿・請負人両浜・上ノ国、右不残相触候、

十一月十日、越後寺泊り本間弥平太手代吉五郎義、一昨八日夜至着仕、昨夜梅太郎宅へ罷越候処、旧冬取組米式千俵并当方江引取之上申遣候千俵共、都合三千俵之内、

〔奥端書〕「天保五年ノ十五」

〔端書〕「天保五年ノ次十六」

当夏中三脇山米を以千式百俵御船幸神丸江積入新潟湊方積出、残米千八百俵之儀寺泊り出津及延引、此方ニ而外米を以夫々御手配出来候間、右残米御断ニ相成当惑いたし、追々米下落致候間、右千八百俵弥平太手限りニ而売捌候処、格別直違損分有之難渋仕候間御引合被下度旨、同所御代官江差出書面之写へ御代官川洗何右衛門方添状、弥平太方之書状共梅太郎宛ニテ差越、鈴木紀三郎殿江入御覽候、

一、来十四日 靈照院様御四十九日付、御当朝拜礼被仰付候間罷出候様、御用達・名主・問屋・小宿・両浜請負人江昨日相触候、盲人秀ノ都江者名主九八方相達、

十一月十三日、御四十九日御退夜付、御役人中諸士迄麻上下熨斗目、御徒士方御通辞迄麻上下二而御寺へ相詰、御蒸もの一同へ被下之候、

十一月十四日、御四十九日御当朝付、御役人諸士迄熨斗目麻上下二而、御徒士、御通辞、御用達四人、名主五人、問屋頭取、問屋、小宿、両浜請負人、江指御用達老人、名主老人、問屋、小宿、両浜老人ツ、箱館町年寄老人、

御用達老人、問屋、小宿、両浜請負人老人ツ、笹屋卯兵衛、上ノ国年寄老人、御城下付東西在々名主・年寄老人ツ、罷越、御寺へ相詰候上ニテ右一同へ御餅五ツ宛被下之、

十一月十六日、旅人宿甚太郎書付を以先達而芝居興行御免許被仰付難有奉存候、依之興行仕罷在候処、先日鳴もの御停止被仰出恐入、是迄相休居候処、今日者御停止明ニも相成候間、御差支之義も無御座候ハ、来ル十八日方残日数興行仕度趣伺書差上候処、御停止明とハ乍申茶屋渡世杯とハ違候事故、右芝居興行之義者当年中見合候様被仰出候旨、紀三郎殿御達ニ付、甚太郎、証人三次郎・弥助、名主九八差添呼出ス申渡候、

一、御停止明ニ付、茶屋渡世之儀鳴物平日之通ニ而不苦趣被仰出候旨御達ニ付、名主九八を以茶屋行司へ相達、

一、御用達・請負人一同へ被仰付候当夏納り金高千三百兩程可有之候、右ニ而御下ケ金有之候而も五百兩余不足候間、其俣居置、明年三月御手宛御渡之節ニ金式千兩御用立テ可申哉、何れ一同申談、明後日迄ニ御答可申上旨、紀三郎殿方御達ニ付、一同談之上可申候趣引取、

一、御用達・請負人一同方昨秋中方御米代金之内三千兩程御借上ケ相成居候処、当節御米ニ而御下ケ被成度御晰有之候得共、可相成者右金高代之米土台致ス式分金ニテ明年方御買米之儀御用達・請負人一同へ被仰付候間、市中備米ニ被成度、鈴木紀三郎殿方御用之間ニ而御談申上候処、至極宜仕法之旨被仰聞候間、追々考弁致宜候半々取極申度候故、内談致見候様被仰聞候、尤、近日之内凡之処取調子書面ニいたし為見候様御断ニ御座候、

十一月十九日、法幢寺書付を以

靈照院様 御導師相勤候ニ付、此已後檀中之焼香仕候茂如何ニ奉存候間、

隱居仕度旨御伺書差出候付、紀三郎殿へ差上候

一、來廿五日、靈照院様御百ヶ日御取越二付御當朝拜礼被仰付候間、町年寄、御用達、御目見町人、名主罷出候様、紀三郎殿御達、梁川関東屋新左衛門、盲人秀ノ都、

一、去十七日、紀三郎殿方御用達・請負人一同へ被仰付候御談有之、当年御買上ケ米代御下ケ方之義御用達納米代金七百廿四兩二分式朱卜錢三百三文、請負人納米代金千四百四十兩式朱卜錢廿五文、都合金千八百六十四兩三分卜三百廿八文、明年御都合宜節迄其俣延置申度趣、御用達・請負人一同聞談仕候旨申出候間、紀三郎殿申上候、

十一月廿日、当年市中家数人別惣目録并人別帳・寺請状共、鈴木紀三郎殿江差上候、尤、名主不殘罷出候、惣目録左之通

- 一、家数四百十七軒 男七百廿人 田中九八
- 一、家数四百九十老人 内訳 女七百七十老人
- 一、家数五百四十九軒 男千三十四人 宮川半右衛門
- 一、家数貳千貳人 内訳 女九百六十八人 中林九兵衛
- 一、家数四百拾軒 男八百廿九人 村上権右衛門
- 一、家数四百八十四軒 男七百五十老人 炭竈分
- 一、家数千五百四十老人 内訳 女七百九十人 加藤専右衛門
- 一、家数九軒 男廿五人
- 一、家数四十人 女十五人
- 一、家数四百四十三軒 男八百廿九人
- 一、家数千六百十二人 内訳 女七百八十三人

惣家数貳千三百拾貳軒

人数合 八千貳百六十老人

内訳 男四千八百八十八人

女四千七十三人

下ケ札 惣家数合貳千貳百九十八軒

人数合 八千貳百九十二人

去

内訳 男四千貳百廿四人

女四千六十八人

差引 家数

人数

右者当年市中家数人別相改相違無御座候、已上、

天保五年

前名主連印

十一月廿日、市中喰物類渡世の者、昨年以来都而高料付、此節者追々諸品平体之直段二相成候間、喰物類元形之直段売買為致様、紀三郎殿方度々被仰付、依之直段引ケ方調書名主方差出、昨日御覽入候処、御披露之上、右調書之通被仰付候、尤、鰻頭之義者麦・小豆、殊ニ黒砂糖高直ニ而中考仕候へ者是迄之三文まんちう三文余ニ揚り候事故、是者老文相増、当分之内四文ニいたし、形者元之三文鰻頭ニ為致不苦趣被仰付、委細名主江申達候、

一、御用達・請負人一同方去秋中及当夏中迄御借金致ス候而新潟表方御米積下し候処、御金御都合被宜候間、右惣金高丈ケ此節御米ニテ其節買入直段而御渡被成度付、一同御呼出ス、鈴木紀三郎殿方御利解被仰聞候処、相下り一同申談之上、御答可申上旨ニ而引取候、

一、南部様・津輕様御家中用向ニ而罷越候節者上下ニ不抱老人ニ付錢三百文

宛之積りニ而賄いたし御下ケニ金相成候間、此旨已来共相心得候様、近

藤吉左衛門殿方御達被成候間、工藤忠兵衛・河内屋増右衛門江申付置候、

十一月廿三日、岩田屋金藏當時居地面之内、何ニ寄北東之角御台場地ニ可被

仰付旨、兼々御沙汰御座候ニ付、願上候も奉恐入候得共、沖ノ口限り御台

場之御地所若御不用ニ相成候ハ、金藏土蔵相建、沖ノ口御役所御不用之御

品御預り申上、尚又非常之節者御道具類御預り申上候様仕度候間、御差支

も無御座候半々、右御台場地永拝借被仰付度、尤、御冥加として金五十兩

奉上納度趣願書奥印いたし差上候、

十一月廿四日、御百ヶ日御取越御退夜ニ付、御役人一同諸士熨斗目麻上下、

御徒士方御通詞迄麻上下ニ而御寺へ相詰候、御赤飯一同へ被下之、

十一月廿五日、御当朝ニ付、御役人一同諸士迄前同断、御徒士方通詞迄并

町年寄・御用達・名主・問屋・小宿・両浜請負人・秀の一共一同御寺へ相

詰、御赤飯被下之、御用達方請負人一同迄御香典之義者 御四十九日同様

二いたし差上候、

一、秀の一配当之義者以来共 御曆代様之分金百足ツ、被下候、同人方御香

典差上候義者以来共線香七わツ、御寺へ差上可申様被仰出候間、此旨九八

江相達置候、

一、御足輕人数九百五十六人、

十二月朔日、来七日御規式之義者於江戸表

殿様来十二日迄御忌中ニ付、同十三日ニ御規式并御礼被仰出候間、向々江

此旨可相触様被仰出候付、明日頃一同へ右之趣相触可申事、

一、シヤマニ等樹院様方被進候御品御状共専左衛門迄被願越、同人方差出候

間、周治殿江差上候処、御披露相濟申候、

御牌前江

五十挺入 御香料  
蠟燭 金貳百足

壺箱

以上、御目錄添

殿様江為御機嫌親

白砂糖 三斤入 壺箱

御目錄添

一、貞勤女中之義、御百ヶ日後、御暇被下置候ニ付、当所方上り候者者何

時御下ケニ相成候而も宜敷候へとも、江差・箱館方上り候者ハ男子と違、

何れへ下ケ置と申儀難相成候間、両所方親共欺、又者親類之もの迎に罷越

候と欺、当方ニ親るい知り合有之、其方へ願越候か、何れ其筋江被仰達候

様、先頃両所御奉行中へ御談被遣候へとも、于今御返事無之候間、両所名

主方当方名主江願越無之哉、何とも不申越候ハ、右之趣名主方名主へ申

遣、早々返書ニ申越候様可為致、今日於御用部家近藤吉左衛門殿方被仰付

候間、名主一同へ相尋申候処、何義も不申越趣付、早速両所名主へ書状差

出候様、当番宮川半右衛門へ相達、

一、越後寺泊本間屋惇藏御取組米之義ニ付以書取御申渡、左之通、

昨年奥州・出羽両州違作ニ付当所入米不足故、夫食買入出役越後地

迄差立候後、其方共願面を以為 国恩金拾兩ニ付拾七俵以上之直段

廻米引請候間、出役越後寺泊り迄為致同伴候、然処、万端齟齬いた

し、漸々手段を以別段米拾式俵直段ニ買請候之由、申立直段与不容

易相違いたし高料ニ候得共、遠路罷越候事故出役之もの取斗を以先

式千俵取究メ金千兩相渡ス致帰国候、残千俵モ買入方申遣候へとも

三、四月両月迄之廻米約定之所津出方延引相成候二付、右千八百俵別用之趣申遣候、且又、新潟表ニ罷居候出役之手続を以前段の金千両代米千式百俵廻米いたし、其後共出津方無之、七月ニ至り新潟出役引払迄廻米手段も無之候へ者旁以願面相違いたし、其上跡出役之もの新潟表于今不引払罷有候へとも一応之問合も不致、自己之取斗を以廻米売払、格別損分相立候訳柄不明之申立ニ相聞得候、新潟表跡出役もの江申談候半々、千俵前後之米者何れ共出津廻米出来可申處、其儀もなく殊に最前三人連印之願書ニ候處、此度証人名前相除有之候付、不及沙汰願書下ケ遣ス、

右之通、鈴木紀三郎殿方申渡候、立会吟味役蠣崎重郎右衛門殿、町年寄桜庭梅太郎・張江又八、名主宮川半右衛門、御座敷ニおゐて被仰渡候、

一、御用達・請負人一同、今日御用之儀者、先日も御談有之候御定用之廉へ相納候御米代

金七百廿四兩二分式朱ト錢三百廿文 御用達

金千百四十兩二朱ト錢廿五文 請負人

都合千八百六拾四兩三分ト三百廿八文

右者明年迄居置候趣、先頃御請 相濟、御満足ニ思召候得共、当暮之処ケ成御都合宜敷候間、来ル大晦日迄御收納金納りを以御下ケ金被成候趣、紀三郎殿方被仰渡、一同難有御請申上候

一、御定例之御規式、町年寄者於小道具之間御餅・御酒・御料理被下置候、御用達以下者当御役所おゐて御座敷ニ同様被下置候、餅者老人付七ツ宛、御酒御料理共御台所方請取候

一、貞女中不殘明十四日御暇ニ相成御下ケ被成候間、当所之分者親々江引渡

ス、江指・箱館の分者宿々江相渡置候様、紀三郎殿御達御座候、御とみ殿付老女老人、小女老人差上候様、是又被仰付、名主半右衛門へ達ス、  
一、靈照院様 御本葬之節御用達江被 仰付御蒸もの焚出し書上へ高、左之通り、

米ノ四石老斗五升五合

代五拾九貫七百廿八文

小豆ノ五斗

一 代拾壹貫貳百五拾文

十二月十九日、市中在々孤独難渋もの書上可申旨、先日被仰出調書上御奉行

衆へ差上候處、被下米下ケ札いたし候様被仰付候間、何程ニ積り可申哉、

相伺候處、十五歳以上七十歳迄之男老人江米五升ツ、七十一歳以上十四歳以下ノ男老人三升ツ、女之義者老若とも老人三升ツ、孤独もの老人老斗五升、

右之積りを以下ケ札いたし候様、御用之間方被仰出、近藤吉左衛門殿方張江又八江御達、則名主并在方へ達ス、

一、宮ノ歌村持西在大茂内村秋味川運上之義、金式兩老分ツ、是迄上納仕来候得共、当年者至而不漁ニて漸々鮭五十本ならて取揚不申、難渋仕候間、半金老兩二朱当年限り相納申度趣願書差上候處、願之趣難被仰付候得共、当年不漁ニ候半々、当暮之処者半金老兩二朱相納、残半金之義者明年明後年までニ相納候様被仰出候旨、御番吉左衛門殿方在方へ御達有之候、

十二月廿日、市中難渋之者御救米調書左ニ、

家数百九十七軒 人数五百七十老人

内



十五歳以上七十歳迄

百三十三人

男老人二付五升ツ、

此石六石六斗五升

七十一歳以上十四歳以下迄

七拾五人

男老人二付三升ツ、

此石貳石貳斗五升

老若女三百十七人 老人付三升ツ、

此石九石五斗壹升

四十六人 孤独之もの 老人付壹斗五升ツ、

此石六石九斗

惣ノ廿五石三斗壹升

此六十三俵ト壹斗壹升

但、四斗入ニして

一、御城下付東西村々前同断、

家数八十壹軒 人数貳百三十老人

内

十五歳以上七十歳

六十人

男老人付五升ツ、

此石三石

七十一歳以下十四歳之男女者

百五十八人

老若二不抱三升ツ、

此石四石七斗

独身もの男女とも老人付

拾三人

壹斗五升ツ、

惣ノ九石六斗九升

此廿四俵ト九升

但、四斗入直ス

右調書近藤吉左衛門殿江差上候、

十二月廿一日、名主役被仰付候節、誰跡名主小使台所仕配兼と於御座敷御奉行衆方被仰渡候、町年寄三人、外番名主立合被仰渡候、但、野坂吉六被仰付候節写也、

十二月廿二日、御用達・請負人江御米代千八百兩余御渡相成候二付、運上金并諸役取立相納候処、金五百六兩程不足付、内御役所方御下ケ相成候様仕度、右調書御番新井田周治殿江差上候、

一、当年長崎俵物買入代金御仕送り金、未夕参着無之、市中端々其外在々々の難渋仕、当季凌方無之候付、貳千五百兩拝借仕、長崎役場用達、夫々小前之もの江御渡ニ相成、市中融通為致度願書差上候、尤、来未年二月中迄拝借仕、其節迄御仕送り金参着無之候節者御用達・請負人方操合可奉返納趣願上候、御用達惣代伊達林右衛門代庄兵衛・岩田金藏、請負人惣代沢田屋久兵衛・和田屋庄吉、町年寄連印いたし、御番新井田周治殿江差出ス、

一、東西蝦夷地請負人方差出候御輕もの御賄代御用諸品夷人江被下品書上、

四口 金直ス

式百九十八文

十二月廿七日、五人組印形之義者年内中御用茂多、尚外々御用之儀茂有之候間、明春松過キニ仕度旨申上候処、御聞濟相成候間、市中一統江此旨名主方達置候様、加藤専右衛門江相達ス、

十二月廿八日、松前甚十郎殿病身二付、松前内藏殿方願之通御用人并退身被仰付候旨、其筋々江相触申候、

一、御積金掛竹屋彦左衛門、万屋弥兵衛代専左衛門呼出ス、老人江金五百疋宛御目録被下候、

十二月廿九日、唐津内町円兵衛、葉湯風呂博知石町居宅おゐて兩三年渡世仕度、老ケ年金老兩式分ツ、御冥加金上納仕度趣願書差出候間、博知石町中へ問合可申旨申付置候處、差支之義無之趣、尋之上、名主専右衛門申立候二付、尚又、風呂屋仲間一同差支無之哉の旨、名主半右衛門を以相尋候處、一同差支無之趣、尤、本風呂と違葉湯風呂の義二候間宜旨申立候段、名主半右衛門申上候間、風呂屋仲間方一同連印請取為取置申候、右之趣願書、御番鈴木紀三郎殿江差上候、

【天保六年】

〔端書〕「天保六乙未年方始り」

天保六乙未年日記之内

抜書左之通

一、上ノ国御代参之儀者、

殿様 御服中二付無之趣御達二付、同所町年寄鈴木富右衛門江達、

一、御服中二付、御神樂之儀、御城内者大手御門前、町御役所・沖ノ口御

役所同様門前二而御獅子被仰付候、御供物之義者追而被下置候趣被仰出候、

一、来ル六日八幡社おゐて御年男御参詣之上御規定是迄有之候得共、御服中

二付御見合被仰出候、尚又、来ル七日社人一同御礼之節御神札差上候義見

合、追而差上可申旨被仰出候、右二付御扇子斗り献上、

一、諸士一同之儀茂御獅子之儀者門前門獅子之積り被仰出候間、七日社頭江申談置候様、近藤吉左衛門殿方御達有之候、

正月六日、専念寺方去暮中旬頃、金子百三十兩余、其外四品紛失致候訴書差出候、

正月八日、マシケ越年御足輕兩人方私共へ向ケ御用状ニて、海岸之杉早切江

金子くゝり付有之ヲ夷人ひろい取運上家へ訴出候付委細申参り候、且又、

異国船出逢不申書面共封込参り、但、金七兩老分三朱木綿打かい入老箱ニ

テ吟味役衆方預り、

正月十三日、当御役所表御門前おゐて門獅子相濟候二付、御届申上候、

一、去々巳年近国凶作二付入米無之、市中在々共難渋仕候處、格別之御沙汰御救米御払米被仰付、畢竟御憐愍を以一同相凌難有可奉存候、依之往々右様凶年有之候而者一同心配仕候義二付、今度御百性一軒一日老文半、年中五百四拾文日掛銭差出、年々於町御役所御世話被下置候間、一同承知之義候半々被仰渡、御規定書并名前之処五人組頭々印形いたし可差上旨、今日鈴木紀三郎殿被仰渡候、右二付、一同引取談事之上、印形いたし候積り申上為引取申候、

一、松前三郎兵衛様御長家ニ而是迄御仲間飯焚いたし候得共、今度市中方年

頃なる女老人右御飯焚ニ差上候様、紀三郎殿方御達二付、名主九八江達ス、

十六日、唐津内町円兵衛、旧冬願上候葉湯風呂之儀願之通り被仰付候旨、近

藤吉左衛門殿方御達、尤、請書可申付旨被仰出候間、其旨共名主野坂吉六

へ相達、老ケ年御冥加金老兩二分ツ、上納為致可申候、

正月十八日、日掛銭積米規定之儀、先日被仰渡候後如何相成候哉、紀三郎殿

御尋有之候間、此節専ら相談仕罷在候段申上候処、成丈取急キ相極メ候様可為致旨被仰付候間、同役も申談名主一同へ申聞置候、

一、茶屋宗太郎、旧冬商売体御差留被仰付有之候処、慎中去十三日裏口方出入いたし、内々客取いたし候趣風説相聞得候間、弥右様之義有之候而者甚不相濟候間、内々取調可然趣、紀三郎殿御発言ニ而御奉行衆方被仰聞候間、同役談事之上、茶屋行司を以相札候様、名主九八江申聞置候、

正月十九日、十二月十四日暮六ツ時江戸出立、同廿八日三厩へ着、昨十八日押切船ニテ下在脇本江着之上、今日細田長治郎、日角兵治郎至着、

殿様 御家督御願之通、旧臘十四日、

御名代 九鬼丹後守様江被仰付候ニ付、明廿日麻上下服紗小袖着用恐悦可申上様、右之通被仰付候間、寺院并社家者麻上下着用、町年寄始御目見町人同様麻上下ニテ罷出候様、近藤吉左衛門殿御達付、惣寺院并社家其外向々江相達、

正月廿日、昨日御便りニ付為 恐悦御役人中諸士并御通辞迄一同服紗小袖麻上下ニ而御用之間罷出候、寺社一同・御用達・名主・問屋・小宿・両浜請負人一同之義者麻上下ニ而當御役所ニて御奉行所へ恐悦申上候、

正月廿一日、旅人筆錢之義者御本国ヨリ昨年之分不殘沖ノ口ニ而取立来候得共、当未年方已来老人ニ付百式文ツ、之内半分通沖ノ口江相納、殘半分通り者當御役所へ為被相納候様、鈴木紀三郎殿方御達有之候、尤、頭取旅人宿へ者思召之趣可申聞旨被仰付候、

但、近藤吉左衛門殿江も御談有之候上ニ而御取究有之候、

殿様 御実名奉称 良広様与、尚、反朗ノ字御居判候ノ字御用御座候旨、御番鈴木紀三郎殿方御達ニ付、右之文字差合之もの有之候半々名前者勿論

実名とも取替可申様、寺社其外市在ニも相触候、

一、名主加藤専右衛門江御書取を以御賞被下置、御紋付麻上下老具拝領被仰付候、左之通、

加藤専右衛門

其方支配町内之儀者百性・小前之者共ニ至迄往古方被 仰出之旨を相守、万事实体ニ而町内穩ニ有之趣相聞得、畢竟親形専右衛門勤役中方申付方行届候故之事と奇特ニ被思召候、依之為御賞御紋付御上下老具被下之候、猶又、以後共是迄之通入念支配可致候、

一、御省路中ニ付、當御役所台所仲間三人是迄御雇仲間候得共、今日方在仲間取替候様被仰付候旨、内下代方達有之候、

一、御印帳ニ而請取品有之候節、仲間ニ御帳持參為致在来之処、此度吟味役所方御用使有之、張江又八罷出候処、以来書役之内方可被遣旨、御番西川宇右衛門殿方被仰候間、其旨拙者とも限り難取斗候間、吟味役所迄申上置候、

二月三日、一昨日江戸ヨリ御飛脚兩人罷下り候処、

殿様 御家督御礼之儀、御名代 南部左衛門尉様ニ而旧臘廿三日無御滞被為濟候付、右為恐悦今日御役人中并諸士熨斗目麻上下、夫方御徒士方御通辞迄麻上下ニテ、一同御用之間江恐悦奉申上候、

但、右恐悦与して御役人中者一人方老種一荷ツ、外者一席方老荷一種ツ、御徒士迄御樽肴献上仕候、

前恐悦ニ付、御役所ニ而御番新井田周治殿、寺社不殘、御用達、名主、問屋、両浜請負人一同麻上下ニ而此段奉願申上候、但、小宿之もの者病身ニ付、老人も罷出不申候、

一、竹屋長七、旧冬塩越江登り之節、秋田久保田町奉行中行当方御奉行衆方之御用状巻封相渡候処、右返書此間同人帰国ニ付差出、御奉行衆へ差上、猶又、同人江御目録二人分金貳百疋被下候趣ニテ御奉行衆へ差上候処、右者長七江被下置候段被仰付、則同人江相渡

鞆切服紗地巻ツ  
粕尾二尻

宛

佐竹右京太夫様御内

町奉行

清水新六郎

小田内助右衛門

同町役

湊為三郎

捕方小頭

同捕方中

宿 若狭屋金藏

二月十三日、庄内酒田五十嵐七郎右衛門方為御香典花蠟燭(廿五丁入)巻箱同所御役人杉本善右衛門方御蠟燭料南鐐一片、右者種市善太夫預り来差出候間、御番近藤吉左衛門殿へ差上候、尤、外二書状至来、

鞆切服紗地巻  
金貳百疋

金壹兩

金百疋

二月十八日、当年クスリ并スツ、御場所年限季明付、両御場所共に金拾兩宛増金仕度趣頼書相認メ差上、御内々御奉行所へ相伺候処、季明毎に増金いたし候節始終者御運上金斗り相嵩、請負人共難渋及可申、殊二者御用弁不相成様罷出候間、増金及申間敷候、尚又、スツ、場所之義も年季代り付、是迄御運上金百兩之処金拾兩有之候ニ付、右両所共増金ニ及申間敷旨被仰聞候間、元高之御運上金ニテ願書為差上候、

鞆切服紗巻ツ

粕尾二尻

宛

津輕越中守様御内

町奉行

北原惣藏

本多東作

三厩詰役人

太田鉄五郎

弘前町目付

木村勝右衛門

工藤市五郎

青森見聞役

山内文治郎

中村善助

一、津輕平館御本陣岡村五郎兵衛、吉岡村方陸通相越候趣、宿太次兵衛方届書差上候、

鞆切服紗地巻ツ宛

一、昨年中破牢之囚人共為召捕御人数秋田領・津輕領御差立被成候処、御人数御扱相成候付、此度、

御両家役人中并宿々江御進物御目録被下候調子書左之通、  
囚人捕方之節御手当等被下候付、御当方及御挨拶可申方々名前

金貳百疋ツ、

弘前土手町名主代

金百疋

近江屋庄六

同所宿

金百疋

松宮屋久兵衛

鱒ヶ沢町名主

塩屋久左衛門

金百疋ツ、

菊屋善助

青森目明ス

金百疋

長蔵

八幡村百姓

金百疋

久吉

八幡村

金百疋

仁兵衛

是ハ除金方出ス、

右之通相扱、入 御覽候処、秋田・津輕江入遺箱ニツ御印取置可申旨、鈴木紀三郎殿方被仰付、士中者巻熨斗添、其外ハ張熨斗斗り、其旨書役中へ談置候、

一、昨年破牢之もの共磯舟盗取、向地へ罷越、乗尻捨置候三艘共其俣被差置候処、此度三厩之庄平罷越序ニ右船被片付方内窺申上、帰着次第何れ共被片付可申様、三厩詰役人中方被申付候趣、昨日庄平伺出候間、奥平勝馬殿申上置候処、今日右船之義者御取捨相成候旨被仰付候、右ニ付、三艘之内二艘者御印有之候由、彫取後便ニ庄平持參致候様被仰付候間、其方限り取片付、御印持參致候様申付候、

一、羽州御積米例年御差下シ之処、当年限り越前之国方積出之旨被仰出候趣

江戸方申来候間、御雇舟江積入差廻ス候得共、御雇舟江積入之残米ハ当所船持之もの共相心得、上方方下り之砌、軽足之船々江積入候様、御用達并外船持へ近藤吉左衛門殿方被仰付、尤、鹿能善五郎殿出役被仰付候間、委細同人方江有無之談可致旨被仰付候、

二月廿九日、当年鯁神楽之儀、

殿様御服中付、追而御服明之上御初穂御備被遊趣御達有之、右付、例年市中方鯁神楽差上候義者遠慮なく修行可致旨御達有之、社頭白鳥集人代采女江達ス、名主当番野坂吉六へも申達候、

一、工藤貞右衛門、三国御積米出役之下役被仰付候段届出候、

三月四日、御役所人足之義者日々大勢申付候義下々難渋も可致、先人足日々御遣高相調差出可申旨、鈴木紀三郎殿方被仰出候、御用多之節者格別、平日相減候様致方、大勢日々人足申付候とて御門前掃除方行届不申付、一同談事、人足相減候様被仰出候間、其旨田中九八へ談置候、

金千五百兩御用達納

一、金貳千五百兩 内訳

金千兩 請負人納

右者旧冬長崎俵物代老番御仕送り金延着付、拜備之上、長崎出役中江用達置候処、今度御宛行御渡御入用付上納被仰付候得共、御仕送り金于今着不仕候間、前書之通、此度御用達・請負人方立替、張江又ハ差添、昨日内御役所へ相納、証文御下ケニ相成候、依之紀三郎殿江も申上置候、

一、専念寺院代法測、伴僧法曜、大恵、右三人御呼出ス之上、梅松盗賊いたし一件付、法曜之義者朝暮之勤行寺役共御差留之上、兩人共追而御沙汰有之迄院代江御預ケ之趣、奥平勝馬殿方被仰渡、御請書被仰付候、

一、拝借金貳千五百兩（三拾兩老分ツ）、御用達・請負人一同方証文差上候、  
 一、先年異国江被取候西館町福松義、一ヶ年金貳兩ツ、被下置候処、当二月  
 廿日病死付、名主并親類加印ニ而書面を以届出候付、奥書いたし差上候、  
 三月七日、御積金手代勇七代増藏他出致候付御免之旨、掛り彦左衛門江達、  
 尚又、跡手代之義者神明町金子屋平吉方宗治郎当分之内手代拙者共限りニ  
 而申付置候、追々申立、表向被仰付候旨申渡、掛り彦左衛門差添、村山伝  
 兵衛方昨日宗次郎へ、

一、泊川町四郎兵衛、枝ヶ崎町丑五郎兩人、此度新規鍋釜製造仕候付御免被  
 仰付被下置度、尚又、い立たゝら場之義者トラメキ上野おゐて御空地拝借  
 被仰付被下置度旨願書差出候間、奥印いたし、鈴木紀三郎殿へ差上候、

三月十四日、阿部屋利兵衛方御買上米被仰付度、直段書へ御附米添、左之通  
 り、三国権治郎船積鰯沢御蔵米千四百俵口（四斗入）五月延直段六匁、四  
 斗入にして五匁、現金直段五匁五分、四斗入にして四匁五分八り余、  
 一、近江屋忠右衛門方前同断、加州御蔵米千百俵越中名働彦左衛門船、同米  
 九百俵（同国放生津）善右衛門船、

都合貳千俵（五斗入）五月延 四斗八升二付五匁七分

同断五匁四分 四斗入二直ス四匁七分五り

〆現金 同断四匁五分

一、於当御役所御祝儀之外酒者一切不相成旨前々被仰出有之、心得居可申候  
 得共、此以後之儀者別而堅く改而被仰出候間、心得違無之様可致候、尤、  
 此後不心得もの有之候節者急度申立候間、此旨一同へ申聞候、且又、沖ノ  
 口御役所并御番所向同様先日被仰渡も有之候付、今日町年寄、名主、在

方掛り、書役中并町方一同へ新井田周治殿方嚴重被仰出候間、此段印置候、  
 一、昨年中人足申付候人数相調可申様、先日鈴木紀三郎殿方御達付、右調書  
 今日御番近藤吉左衛門殿江差上候、高八千八百六十七人、

一、本間屋浮藏方御取組米之儀付毛頭願ケ間敷不仕よふ可致、万一遠境之事  
 故弥平太方如ヶ様之義申来候共私共限り取斗、願ケ間敷不申上様可仕奉存  
 候、依之此段御開濟被下置度旨、先番差出、則村山伝兵衛方差上候願書今  
 日願之通り御開届相成候旨、近藤吉左衛門殿方御達、其旨証人米屋孫兵衛  
 丈治郎代清吉へ申聞候、尤、委細ハ願書留記し置、

一、御積金掛り彦左衛門老人二候間、万屋専左衛門、山崎屋新兵衛兩人之内  
 被仰付度旨、先達而書上候処、万屋専左衛門義、竹屋彦左衛門同様融通御  
 積金掛り被仰付候旨、新井田周治殿方被仰渡候、専左衛門難有御請申上候、  
 其段竹屋彦左衛門へも達、

一、クスリ御場所跡年季願上候処、御運上金百兩増金被仰付不苦候哉、相尋  
 候様被仰出候旨、周治殿方於御用部家昨日御達有之候二付、則孫兵衛へ相  
 尋候処、何茂子細無之候間、跡年季願之通被仰付度旨、前御同人江申上置  
 候、

三月廿九日、クスリ御場所之儀、一ヶ年金百兩ツ、明年方跡七ヶ年季願之通  
 被仰付、尤、秋味石数御取極之儀、追而御沙汰可有之候御達二付、此旨孫  
 兵衛へ申渡候、

一、クトウ跡年季願上候処、其後金老兩も増金不相成や相糺候様被仰聞候間、  
 松兵衛代呼出ス相尋見候処、金老兩相増差上度と申出候、

四月朔日、マシヶ夷人金七兩一分三朱拾取差出候付、兼而被仰出候被下品、  
 則左之通、

青酒壹斗、煙草五わ、麴壹斗、粟米五俵、  
上ノ古手壹枚

マシケ夷人

ハルマ

支配人

銀二枚

喜右衛門

小頭番人

金百疋

直右衛門

一、クトウ跡年季願之節、金壹兩増金、口上ニ而申上置候得共、不及其儀、

一ヶ年米五俵ツ、積米可致旨被仰出候間、其段共申付候、

四月十日、大松前・小松前川岸之儀、通に相成候間、仮小橋手限りニ而相掛

ケ申度趣、御用達一同・請負人一同・問屋頭取連印、書面差出候間、奥印

いたし、新井田周治殿へ差上候、

一、日々当御役所ニ而入用人足之儀者拾人ツ、市中ヨリ差出来候得共、多く

有之候間、減方先日方被仰出候間、名主一同共申談候間、今日方以来定式

人足之儀者五人ツ、いたし候間、此旨可申上候事、

一、大松前橋下モへ両川岸通町並相成候付、東西通貫ニ相成候得共、非常之

節等一同船手迄も弁利宜御座候二付、仮同様之小橋私共手限ニ而相掛申度

旨、御用達惣代西川准兵衛・岩田金藏、問屋惣代工藤庄兵衛・工藤忠兵衛、

請負人惣代連名之願書差出候間、奥印いたし、前同様差上候、

一、熊野屋常八書付を以先代方江指松山御請負仕候処、其後御手山に被仰出、

當時無商売ニ而相続も難行届奉存候間、何卒江指附御山之内北村目名御山

井田沢御山両所之内ニ而檢伐木寸甫雜木入交り、壹ヶ年石數三千五百石目

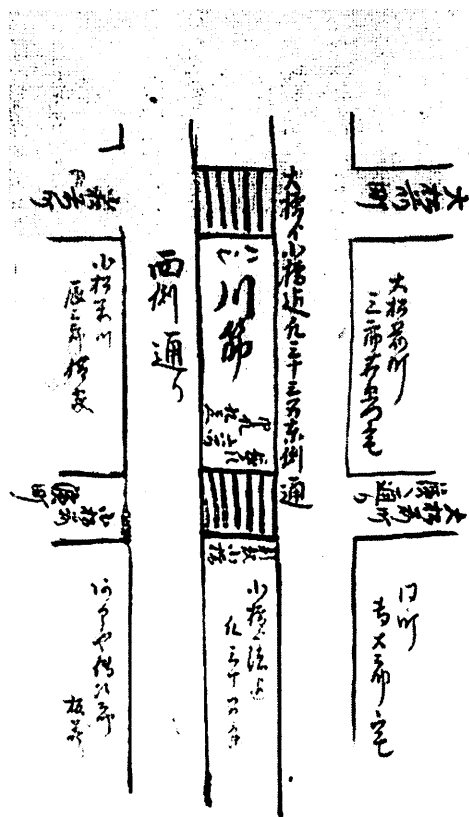
ツ、当未年方酉年迄三ヶ年御手山御名目を以伐透御請負被仰付度、尤、石

數之内半高者品成代金成御差図次第上納仕度、残り半高者諸入用ニ御下ケ

被下度、猶又、別段豊部内・楸川兩御山之内伐透御請負被仰付度、尤、壹  
ヶ年千五百石目ツ、伐出ス、御運上金者千石二付金三拾五兩の割合を以上  
納仕度候間、以 御憐愍願之通被仰付被下置度旨、願書常八并証人住吉屋  
清治、宿広嶋屋布右衛門連印を以仕法書相添差出候間、奥印いたし、近藤  
吉左衛門殿差上候、

一、大松前浜町方小松前浜町江通貫之小路之処へ小橋相掛申度旨、兼々願書  
差上候処、右図書差出候様昨日被仰付候、左之通

〔左図有〕



右圖繪図面一枚、近藤吉左衛門殿差上候、尤、阿部屋利兵衛方差出候、

四月十八日、大松前川筋大橋方南手へ小橋相掛申度趣、兼而願書差上候処、

御聞濟相成候、尤、老人亦者子供等も昼夜通り候間成丈ケ念入丈夫拵候様

被仰出候旨、吉左衛門殿御達二付連印之もの御用達、問屋、請負人呼出ス

申達、猶、名主中へも達置候、

四月廿四日、寅向町上野おゐて五郎八伴弥太郎儀孝心付、書面差上置候得共、尚又身上取調、新井田周治殿へ差上候、則、左之通、五郎八、羽州塩越出生之者二而六十ヶ年以前川原町御百性入仕候、伴弥太郎塩越出生之もの二而四十四ヶ年以前御百性入仕候、孫ノ弥助当所川原町二而出生、妻やす江良町村長五郎娘御座候、右之家内六ヶ年以前寅年とらめき上野町へ引越仕候、

一、とらめき上野町治郎吉方先番之節以書付願上候大沢村温泉方汲取、上野町おゐて薬湯場取建申度旨願書差出置候處、願之通被仰付候旨、新井田周治殿方御達有之候付、名主中林九兵衛、願人治郎吉へ申付候、尤、追テ請書被仰付候積り、

五月二日、寅向上野町弥助差添、町代治郎吉御用付罷出候處、左之通被仰渡候、

其方養父弥太郎并八十余歳相成亡祖父五郎八存命中、老人共之申付を不相背、大切ニ致孝養候趣相聞得、奇特之事二候、依之青緋三頁文被下之、

未五月

右之通、御番新井田周治殿方書付を以被仰渡候、

一、熊野屋常八儀、今般江指松山伐透下御請負願之通り被仰付候ニ付献上、御小書院（鏗節老連、御手綱地紫縮細老疋代金千疋、御樽老荷）、右之通無滞相済、

五月九日、公儀江上納相成候御米代金三千兩、七月三日頃迄相納候付御操合も不宜、内金千兩者御有合候得共金貳千兩不足付、伊達・藤野・栖原屋へ

申聞、御運上金内納二江戸二而為相納候様被仰出候、尤、六月八日方風待二而御飛脚被遣候積、右三人方江戸表二而御屋敷相納候儀者六月中二者無間違上納いたし候様被仰付候間、申談候所、承知付、此段申上候、

金六百兩伊達 金八百兩藤野 金六百兩栖原屋  
右之通御請相済候間、此段御答申上候、

五月十九日、

近藤吉左衛門

代工藤茂五郎

今度江差表非常為御備十ヶ年積米之儀被仰出候處、厚く取斗御趣意之通相整候条、一段之儀思召候、依之為御褒美御鞍一背被下之候、

五月廿二日、阿吽寺方願上候惣社堂之嶋弁財天堂、此度限り信心之もの申合修履普請仕度旨、願之通被仰付候趣、周治殿方御達付、役僧呼出ス申達候、

五月廿九日、御奉行衆御泊り夜具入之長持老棹并油紙包いたし注文書種市善太夫新湯居合付申遣候、

六月朔日、今日例年之通御礼無滞相済候、尤、問屋頭取斗り罷出、其外者病身断二而罷出不申候共不宜候得共、此節柄一同申合、作病致候様ニ相聞得、甚恐入候事二付、一同嚴重可申付、尚、以来全快之上者書面を以申上候上、出勤可致、決而引込申、他出難相成義者心得居可申候へとも篤与呼出申付候様被仰付候間、一同呼出ス、名代々申聞候、頭取工藤忠兵衛差添罷出、

一同奉畏候段申上候間、明朝新井田周治殿へ申上候積り、

六月七日、光善寺仁王門修履之儀、凡入用何程相掛候哉相尋候處、凡金廿七、八兩相掛り可申段、職人共申出候由同寺役僧申出候間、其段蠣崎四郎左衛門殿申上候、

同八日、前書御寄附料奉願上候處、御時節柄之事故、金五兩被下候旨被仰出



候付、前同断御達故、役僧呼出し、此旨申聞遣候、但、内御役所方光善寺直々御渡す相成候、

六月十日、龍光院様三十三回忌之御法事明十一日付、御香典御寺へ差上候廉、大蠟七丁町年寄張江又八、御香料金式百疋御用達（伊達、栖原、藤野、西川、宮川、岩田、岡田）、大蠟五丁名主五人、

翌十一日、御用達・名主於法幢寺拜礼相濟、禅堂二而御緋被下置候、六月十二日、風呂屋六軒方年々御冥加金拾五兩上納仕度候間株式ニ被仰付度、尚又、薬湯風呂年限相濟候上ニ而御止メ相成候節者又々出情上納仕度願書差出候間、奥印いたし、新井田周治殿江差上候、

一、髮結十三軒方年々金拾三兩上納仕候間株式ニ被仰付度、前同断、

六月十四日、大坂ノ幸政丸船頭吉藏、去年年中肥前米積下り売払候節為褒美と夷錦水引老筋、銀十五枚被下候為御礼、此度大坂酒二挺献上仕度旨、宿阿部屋太次兵衛を以願出候間、御窺申上置候、尚、大坂ノ吉藏献上物之儀伺候處、不苦旨被仰出候、酒之義八年々御入用丈夫々御用意有之候間、外品ニ而差上候方可然御内意御座候間、拙者共限り宿太次兵衛へ申談遣し候、

一、湯屋六軒方此間願書差上候而已来御冥加金拾五兩年々奉上納度、猶、近頃被仰付薬湯風呂年限明ニ相成候節者御冥加も此上出情仕度趣相認メ有之、此儀者諸人之助ニも相成候故、薬湯願之通被仰付有之候へ者唯今御差留申儀も難相成候得共、平湯屋之差支ニ不相成様追々取斗可申、平湯屋六軒之義者是迄長々家業相続いたし、旧恩を存、御冥加茂出情いたし、金式拾兩位之願ニ為致可然旨、新井田周治殿方被仰付候間、湯家六軒之もの呼出ス利解申聞遣し候、

一、大坂之幸政丸吉藏方酒ノ替りニ白縮緬老疋、熨斗目録添献上、六月十八日、シヤマニ詰柴田三郎殿方去十四日申ノ中刻出、今朝六半時相達、シヤマニ沖合異国船老艘通候段申来候趣被仰聞、外ニ別条無御座、一、御用達被仰付候へ者先例之通献上、左之通、

鏗節一連 白羽二重料金五兩

六月十八日、湯屋六軒之もの御冥加金拾五兩之処、出増方先日申聞遣候付、談の上、廿兩上納仕度、尤、近年被仰付薬湯之義者年限済次第相休候様被仰付度旨願書差出候間、蠣崎四郎左衛門殿差上申候、

一、湯屋六軒方先日願上候儀、已来仲間六軒ニ限り株式被仰付被下置度、尤、御冥加金之義者金廿兩老ケ年奉上納、家業永続仕度、尚亦、薬湯風呂之儀年限相濟候半々相休候様被仰付被下置度趣、願之通御聞届相成候段、四郎左衛門殿御達有之候、名主中林九兵衛江申達、

湯屋名前、唐津内町九兵衛、横町百藏、湯殿沢町市右衛門、枝ヶ崎町団吉、神明町喜兵衛、東上町覚兵衛、

以上六軒

一、髮結十三軒方先日願書差上候仲間已来十三軒限り株式ニ被仰付被下置度、尤、御冥加金老ケ年金拾三兩少、年々奉上納度旨、是亦願之通被仰付候段、御達有之候間、名主九兵衛江申達候、名前左之通り、

横町吉兵衛、袋町平吉代伝藏、蔵町六三郎、唐津内町伝吉、

泊川町太郎兵衛、小松前町平吉、唐津内町音吉、大松前町重左衛門、

馬形町定右衛門、同三五郎、蔵町万右衛門、唐津内町喜兵衛、

袋町清五郎、々十三軒

七月四日、弁財天嶋社之儀者信心之もの有之候間、手限りニ而修葺之儀、先

達而阿吽寺を願出、御開届相成候付、右掛り御用達之内岩田金藏、問屋之内河内屋増右衛門、請負人之内福嶋屋新右衛門、私共限り申付候、尤、先日新井田周治殿江申上置候、御承知有之候事、

七月七日、経堂寺を願之書面先番差上候同寺御免許被仰付候冬至講而已之事故無檀寺二而凌方難渋仕候間、当年七月之御玉米市中相応之もの申請度旨願上候処、当年五ヶ年右願之通被仰付候旨、御番蠣崎四郎左衛門殿方桜庭梅太郎へ御達、則其旨経堂寺へ相達、

一、ウス善光寺普請相願、凡入用金四百両程相掛り候内、金百両ハ御上ヨリ御寄附、残金三百両者御当所・江差・箱館三ヶ所江割合為差出候様被仰出候間、金高割合如ヶ程ツ、ニて可然哉、昨日御番四郎左衛門殿方張江又八江被仰聞候、依之今朝御用達不残、請負人兩人惣代として相招及示談候処、御当所金百五十拾両、跡半金之内江差金八拾両、箱館金七拾兩ニ而可然旨申出候間、其段四郎左衛門殿へ申上候、

一、例年之通来十四日方十七日迄盆踊町端々おみて為踊申度段届書、当番加藤専右衛門方差出候二付、新井田周治殿江差出候処、当年者  
 靈照院様御一周忌御法会被為在候付不相成候儀候得共、先書面預り置可申旨被仰聞候、

七月十三日、竹屋彦左衛門、万屋専左衛門明日御用之儀有之候間、例刻呼出す可申旨、御用部家方申来候間、明日五半時罷出候様兩人江相達ス、

竹屋彦左衛門  
 万屋専左衛門

一、金五百疋宛  
 右者御積金掛り付、定例之通被下置候趣、新井田周治殿被仰渡、尤、専左衛門不快付、代兼彦左衛門罷出候、

一、ウス善光寺普請付寄附金、当所之分百五十金割合出来次第為見候様被仰付候間、伝兵衛へ通達いたし候、

一、当三月十六日、夏目左近将監殿妻を殺害いたし逃去井上与兵衛人相書御触書御渡二付、向々江相達、

一、向地二而御用達去冬中買入則売上候北蝦夷地廻り小皮類、内御役所先達而相納候代付、左之通、

獺皮五枚代五貫八百七十文 貂五枚代壹貫貳百四十九文

狐皮十七枚代七貫六百廿五文 タサイ皮廿八枚代十二貫六百文

外二

三百文運賃 貳廿七貫六百四十四文

此金四兩一分一朱ト四十四文

両かい六貫四百文

獺皮拾九枚代貳貫八百文 狐皮廿枚代九貫

○壹貳式百文ツ、 ○四百五十文ツ、

七月十八日、当年七社祭礼、昨年付在来之通、昨日大寄合藤野喜兵衛宅二おゐて一同及相談候処、神輿行列并山船家台無芸ニ而差出申度、尤、当年者閏月も御座候へ者余程日数も有之候間、追々入米も沢山有之、尚又、作合も宜敷趣等承知いたし候半々両家台芸も付申度候間、其儀者追々相談仕可申上候得共、右之相談ニ一同聞着致候旨名主申立付承知致候旨一同へ申述、喜兵衛宅方七半時過に引取候、追而伺書差上候積り、

一、長州下ノ関間屋油屋仁左衛門、上名前有光三郎治、去々年諸国凶作之砌、伊達・栖原手船米運丸仁左衛門義悉難渋いたし、此度罷下り、全右一件ニ相抱り候義無之候得共、唯今家潰ニ及候時節相成、何共歎敷奉存候間、伊

達・栖原方金百兩ナリ五十兩ツ、成とも借用致度旨、度々相願候得共、難出来候間、今度御歎願差上、両家江御利解被下候様相願度旨、先日桜庭梅太郎宅へ罷越相歎候間、同勤へ内談之上、右歎書下書内々取寄披見之上、伊達・栖原両家へ相尋候処、米一件ニ付金百六拾兩余不足全く米運丸船頭平右衛門格別之勘弁を以廿三ヶ年之年賦ニいたし遣候義ニ而、其上仁左衛門江金子用達候義者難出来旨、委細者両家方書面を以申出、依之仁左衛門方内々預り置候願下書、一昨十八日梅太郎宅ニて致返脚、右両家申出候旨仁左衛門へ申述置候、尤、逸々御内々御奉行衆へ御伺之上、前段之通り取斗候事、

一、下ノ関問屋油屋仁左衛門願之義有之、今朝蠣崎四郎左衛門殿御役宅罷出、御目通仕度相願候得共、旅人江面会難相成旨願筋有之候ハ、町年寄宅へ可罷出、先旅宿へ罷帰り扣居候様申聞遣候間、何等之願筋有之候哉、宿扣印無之書面之様ニ相聞得候間、町年寄宅へ同人呼出ス、右書面預り為見候ハ、内々沙汰可致候間可然取斗候様、四郎左衛門殿方被仰聞候間、同役談之上、今日梅太郎宅へ右仁左衛門呼寄、書面三通預り置、暮及候而四郎左衛門殿御宅へ罷出、書面るい差上候、尤、願之趣者此間中当役ニテ内扱候伊達・栖原方借用金仕度旨歎願ニ有之候、

七月廿九日、靈照院様御一周忌も相済候付、是迄社人江御渡無之御初穂御獅子神樂餅神樂其外とも廉々内御役所江書上請取候様被仰出、社頭白鳥集人并神明宮社家代佐々木大和へも申達、猶、此方へも書上候様相達、  
一、御小納戸金三千兩御貸付、右御益金三百兩添上納、尤、御用達・請負人之内ニ而拝借致居候、

閏七月朔日、張江又八、町年寄町下代本勤并阿部屋利兵衛同様被仰付候、

一、ウス善光寺普請ニ付寄附金割合之書面、御用達月行司ヨリ差出候間、四郎左衛門殿へ差上候、左之通、

金六十式兩御用達六人 金七拾五兩請負人十二人、  
金拾三兩惣市中寄附之分 金百五拾兩

閏七月六日、佐々木権太夫以書附、正一位稻荷社大破ニ付、是迄三尺社御座候得共、神位記・口宣案等相納かたく、依之六尺社ニ仕、本社再建御見分之上被仰付度旨、白鳥集人奥印いたし、願書差上候間、新井田周治殿へ差上候、

一、神明社人代佐々木大和御書付を以被 仰付候、左之通、

神明社人

代

佐々木大和

白鳥故伊与存命中、社地為賑の場取建申度趣内願致候者、乍申武門ニ候而肝要之弓術ニ候処、御扶持人共ニも無之、近頃ニ至り候而者土民百姓之慰ニ取捨候而已ならず、其上不埒之筋も有之哉ニ相聞得候ニ付、急度可被仰出之処、此度之義者格別之御沙汰を以御糺之義者御流ス被成下、已来共右矢場取潰被仰付、

未閏七月

右之通、御番新井田周治殿方大和へ被 仰渡候、

一、大坂刀屋甚右衛門手船幸政丸沖船頭吉蔵、兼而願書差上候昨年肥前米相払御よしみを以主人元へ申訳相成候様御憐愍之御沙汰被下度趣願面有之候、右者去年中米払底之時節とハ申ながら格別下直ニ相払候と申ニも無之、尚、右ニ付於国元ニ色々迷惑筋有之趣ニ者候得共、此方ニ而存候義無之、殊昨

年米払候節聊たりとも御称として品物并御目録等も被下置有之候へ者、此度願之旨取上三不相成候間、右之趣申聞、願書ハ下ケ遣候様、四郎左衛門殿方被仰付、依之吉蔵宿阿部屋太次兵衛、問屋頭取兩人差添呼出し、右申聞、願書相下ケ候、

米四千八百俵 積下り高

閏月十五日、村山伝兵衛江被仰渡候呑々堂料理屋与市住居継足差懸座敷取解可申趣、今日専念寺院代鳳淵罷出、早速取解可申趣、与市へも申聞、今朝取掛り罷在候段申出候付、則伝兵衛方十郎右衛門殿へ申上候、

一、料理屋 湯殿沢町兵助、中川原町吉右衛門、同町与市、同町源治郎、

中川原町梅吉、同町文蔵、蔵町栄蔵、中町八十八、都合八人

右之もの共方定人足老人為差出、町御役所台所にて定人足之積り、右付、市中方日々定人足之分ハ是迄よりハ兩三人も相欠可申候趣、新井田周治殿へ桜庭梅太郎申上候処、御聞濟付、右料理や之もの江名主へ委細可致相談積二候、

閏月十七日、芝居立会、名主・町方罷越候節仕来ニテ酒肴建元甚太郎方差出候得共、已来之義者右品々相止メ膳部いたし、外品ハ不差出候旨、御吟味役衆方頭取へ被仰付候段、名主九八、町方頭取方承り申立候付、甚太郎心得違無之様嚴敷申付置候様被仰出候、

閏七月廿二日、白木綿四反、大机老脚（長六尺、高サ老尺、巾老尺二寸）、小机二脚（長二尺五寸、高サ老尺、巾一尺二寸）、右者此度惣社堂嶋弁財天修覆下遷座入用品、先規之通御下ケ被仰付度書面を以申上候処、此節御儉約中之事故半減方談可遣旨御内意有之候間、昨日阿吽寺江申談候処、御厨子三ツ御座候間、白木綿并机等書上之通御下ケ被下置度旨申上候処、其

旨嶋崎四郎左衛門殿へ申上候、

一、七社祭礼付、社人多少人数之義御尋付、佐々木大和江申談候処、同人方申出候二者、白鳥集人不幸付、佐々木権太夫親子相除候而も御当所并在社人共二拾式、三人も有之候間相勤り可申候段申出候間、此趣嶋崎四郎左衛門殿へ申上候処、御聞濟相成、尤、佐々木大和方申出候二者、在社人江白鳥采女方書状差出可申義候へとも当年頃事故

〔奥端書〕「天保六未一終」

〔端書〕「天保六未ノ二」

町下代中方も在社人江書状差出呉候様ニと願合有之、此段とも嶋崎四郎左衛門殿へ申上候処、不苦趣被仰候、

一、七社祭礼付、山船両家台取繕方間ニ合不申候間、三町方踊家台老、大松前辺方相撲家台老差出、御神興行列渡御有之候様ニ可仕と、請負人一同并其外町代中へも名主中方申聞候趣相聞得候間、此段奉向上候、

一、阿吽寺書附を以、今般信心之もの有之、光明真言石塔老墓、山王堂境内相建申度、別紙之通り略ス、

前書願之通御聞濟相成候へとも、成丈ケ境内堂限り相建、通筋相建不申候様、周治殿方御達、

一、泊川町吉兵衛義、葬式諸道具取拵商へ仕度、尤、一ヶ年聊二者御座候へとも、金式分ツ、御礼金上納仕度、尚又、追々商へ行届候節ハ御礼金増金仕度奉存候間、右類商売之もの無之候様仕度趣願書差上候間、奥印いたし、八月朔日、阿吽寺弁財天下遷宮今日仕度趣、願之通御聞濟相成候間、阿吽寺呼出ス相達、今夜惣社堂嶋之弁財天并十五童子共下遷座、阿吽寺江移寺行列有之候、

八月八日、秀ノ一呼出ス、何れ之檢校之師匠取致候而官職なと取候哉之旨相尋候趣、新井田周治殿方御達ニ付、名主田中九八江申聞候

一、泊川町吉兵衛葬式道具一手商売致度願書先日差上候処、難仰付趣、新井田周治殿方右願書御下ケ相成、名主中林九兵衛江則下ケ遣し、尤、当年中ハ不相成義可有之候へとも、明春ニも至り候而何とか願書認メ方も可有之哉、是ハ含之ため申聞置候趣も御達御座候

一、蠣崎治郎殿屋鋪下夕湯殿沢町川通り米屋孫兵衛方ニ而引受普請之処、大石拔落、石下夕相成死亡人有之候場所、其外ニも石之われ等相見得候趣、大切之事ニ候間、其近所人を寄せ不申様ニ米屋孫兵衛并其最寄町内江も触相出ス可申候、其上札相立可申旨も被仰聞候

八月九日、益頭三浦檢校方之触書付、当所盲人座頭秀ノ一方右触面之趣意等相認メ、同人義以前官ハ取候免状も相添願書可差上旨、新井田周治殿方被仰付候

一、上ノ国在トマツフ喜太郎、江差磐坂ノ甚十郎娘かや相對死之義付、乙部村江越山之もの帰參、御慈悲願之頼書天保二卯年正月廿九日尅、同年十二月三日尅、未ノ七月廿三日尅、右之通差上候得共、御沙汰難相成趣、新井田周治殿方願書御下ケ相成候、願人久末仁太郎其外連印此願書追書同村へ可相廻事

一、当春栖原屋六郎兵衛病死之節、西川准兵衛代印を以、跡支配人之儀追而紀州本店方申來候迄御用向手代九兵衛へ被仰付被下置度趣願書差上候、御聞濟ニ相成候後、長々相成候へとも何之沙汰も無之、余り閑等候様ニも相聞得候而已浜屋与三右衛門杯与八大切之御場所請負仕ながら自分勝手ニ而在所ニ罷在、夫故御請負所御引上ケ被成候振合も有之、栖原杯と何ニ寄右

様大事成る儀出來候而者誠に容易被成儀候間、其筋へ篤と申聞、跡支配早速申上可然旨、周治殿・四郎左衛門殿方被仰聞、則昨日一同へ被仰付、則西川准兵衛江申聞遣候処、栖原屋江申談之上、于今本店方差図も無之候へとも、何れ近々便り可有之候間、夫まで御猶予被下置度旨、御用達も談之上願候段、准兵衛申出候間、御奉行所へ同役揃之上罷出申上候処、左様ニ延日いたし居候而者大事成義出來可申哉心配之事候間、九兵衛ニ取究差支無之候ハ、町年寄・御用達ニ而引請、九兵衛ニ支配為致候様本店方申來候趣いたし申立可然旨、御奉行所方御内々付、猶又、西川准兵衛等へも申聞、伊達林右衛門・藤野喜兵衛等へも申談遣候

八月十一日、御用達江昨日申談候栖原屋之義、彼是延引ニ相成候内大事成儀出來候而者心配之義奉存候間、同家九兵衛始重立候利兵衛杯も申談候処、何れ九兵衛支配御取極被下候而不苦趣申居候間私共も同様願候、乍去于今紀州本店方不申參候間書状ニ而申來候とハ難申上趣共、伊達・西川・藤野三人申出候間、同役一同罷出、御奉行所申上候処、左候へ者九兵衛支配ニいたし可然候へとも、本店方書状ニ而申來候趣取斗申上可然旨、再三御内意御奉行所方被仰付候間、御用達委細申聞候、引取談之上申出候積り、八月十二日、栖原屋九兵衛書付を以、紀州北村角兵衛方昨日至着、左之通、父徳兵衛、角兵衛弟半藏、手代弥七、同長七、下男藤之介、右之通半紙江認メ差出候間、四郎左衛門殿江差上候

八月十五日、今日祭礼当日付、御道具持并小旗持案内之悪口等出思候間、左様無之様可申付候、殊二者内蔵様之御棧敷江三郎兵衛様も御出候間、御役掛鋪者御奉行方御親子も被為在候もの甚々聞苦敷、不埒之事候間、已來共能々其筋へ申聞、在奴者別而警固之もの江可申付段、新井田周治殿方被仰

聞候間、名主中へ相達、今十五日夜村山重左衛門泊番、

八月十六日、昨日七社祭礼首尾能渡御、夜四半時還御、夜九ツ時祭礼奉行引取之趣届出候、

一、栖原屋支配人之儀、早速可申上旨御催促、蠣崎四郎左衛門殿方被仰付候間、西川准兵衛へ相達ス、

一、栖原屋九兵衛、是迄仮支配名前人候処、以後者栖原屋庄兵衛を以相続人二相立申度段、伊達・西川・藤野右三人罷出申聞候、尤、内衷種々内談手を尽候段も申聞候、

一、江戸上納金八百兩 内 式百兩十月十日納 伊達林右衛門

但、伊達淺之助方上納ノ積り、 六百兩十二月十五日迄納

一、金千七百兩 内 三百兩十月十日納 藤野喜兵衛

但、四日市明石屋治右衛門 千四百兩十二月十五日迄納

但、小網町伊勢屋長兵衛 方方

一、金七百兩 内 百兩十月十日納 山田屋文右衛門

但、日本橋万町近江屋吉兵衛方上納之積り、 六百兩十二月十五日迄納

一、金貳百三拾兩 内 百兩十月十日納 米屋孫兵衛

但、栖原屋庄兵衛方上納之積り、 百三十兩十二月十五日迄納

一、金貳百兩 内 百兩十月十日納 関東屋喜四郎

中村屋新三郎

右者江戸為御替、御上様方被仰付候二付、十月十日限り江戸靈岸嶋丸屋重藏方上納之御請書出、奥書定例之通り、

一、座頭秀の一、御当所并江差・箱館在々迄盲人同人支配人仕度願書被仰付候へ者、江戸三曲頭檢校江可申達趣之願書、名主九八加印二而出、町年寄定例右願書江秀の一座頭官取候免許式通添テ、

新井田周治殿へ上ケル、

八月十八日、両浜店と唱候もの今日呼出ス、左之通、

西川准兵衛、岡田半兵衛、宮川増藏、福嶋屋新右衛門、山崎屋新兵衛、浜屋勘兵衛、右六人於御座敷周治殿方被仰渡候御書取、

申渡

古来方両浜与唱候近江店之もの共之内、蝦夷地場所請負無之もの者上方筋江荷所等為差登候節二分之口銭差出、近くハ浜屋勘兵衛儀右之振合有之、宮川増藏儀も請負場所無之、已前勘兵衛同様口せん免除与申儀無之候、然処、近江店之もの共二場所請負申付候へ者手船・雇舟之大小二不抱、年々初テ相下り候船者初船与唱へ口銭免除之仕来を始、種々之廉有之趣相聞得候、一体請負場所無之浜屋勘兵衛同様之もの者店商而已いたし居候へとも、前分之通口銭免除者無之、場所請負候近江店之もの共ハ夫丈夫手広く家業致居候而も品々免除之廉有之候而者先者順連正しからず、右者古来之仕癖ニ可有之候へとも、今般御代替り付、諸事御改革被仰出、既ニ江指表沖ノ口主法之儀前々方之仕来之由ニ而暫く之 御料中ニも御構不被成候へとも、先達而御役人共同所へ罷越、御改革之御趣意篤と申諭候処、聊無違乱請書差出、箱館表も右同様ニ而万事無滞相濟候、右二付、請負場所所有之候近江店之もの共、

前々仕来ニ不相泥、都而外請負人同様口銭免除与申儀者不相成候間、  
 沖ノ口役所へ口銭相納候時々問屋共受用分も無遅滞差出ス、前分之通  
 り、御代替り付、御改革被成候御趣意を貫き年久敷当領おゐて家業  
 繁栄いたし候国恩を報し候心得方專一二候、若古来方之規定杯と抱り  
 難渋筋申立候半々別段申付方有之候間、其旨可存候、

未ノ八月

右之通被仰渡、御請書差上候様被仰出候、

- 一、栖原屋之儀、跡支配庄兵衛方へ被仰付度旨、先番願書差上候処、今日同  
 役共へ御奉行所方御内々之儀も有之、大切之儀ニ有之候間、桜庭梅太郎宅  
 へ北村徳兵衛、同半蔵、弥七等相招、同役揃之上、跡支配九兵衛ニ致ス候  
 半々心配有之間敷旨申談候処、何れ引取今一応談合仕度申聞、致帰宅候、
- 一、今夕七ツ時過、新井田周治殿方御達之儀有之間罷出候様、御剪紙付、則  
 御宅へ梅太郎罷出候処、此間願書差上候栖原屋之儀、跡支配人庄兵衛仕度  
 旨、御上向二者御差支無之間勝手ニいたし候様被仰出候趣御達御座候、  
 依之同役江通達いたし候上、栖原屋へ申達、栖原屋方徳兵衛・半蔵兩人罷  
 出、今日御内意御利解付、引取相談仕候得共、何分内通逸々申上兼候訳柄  
 有之、甚恐入候儀二者御座候へとも、兼而差上置願書之通、庄兵衛を以支  
 配仕候様、何分御憐情之御沙汰奉願旨申出候間、承り置候、今朝御当番新  
 井田周治殿御宅へ右之段申上二罷出候へとも御休付、明朝申上候積り、  
 八月十九日、阿吽寺書付を以、来廿五日弁財天御遷宮仕、猶又、同日方二夜  
 三日御国家繁栄之御祈禱修行仕候段、御届書差上候、
- 一、阿吽寺書付を以、来廿五日弁財天遷宮付、入用之品々別紙之通御渡被下  
 置度旨、品書添差上候、

一、栖原屋之儀、昨夜徳兵衛・半蔵申出候趣、今朝御奉行所御揃之処へ同役  
 相揃罷出、委細ニ申上候、

一、昨日御達之栖原屋之儀、跡支配人庄兵衛ニ仕度趣、御上向御差支無之間  
 勝手いたし候様被仰出候通、同家手代定右衛門呼出申達候、

八月廿一日、阿吽寺方嶋之弁財天遷宮之儀、廿五日者見合候而可然旨、昨日

新井田周治殿方被仰聞候間、同寺へ申談候所、廿七日方廿九日迄二夜三日  
 之積書面認め替参候付、右書面者今日蠣崎四郎左衛門殿差上候、

八月廿三日、前書願之通被仰付候付、右遷宮入用品々御下ケ被下置度旨書付  
 を以願上候処、入用品々惣高へ金老兩御下ケ相成候趣、四郎左衛門殿方御  
 達、則代慈眼寺罷出候間、相達、

一、阿吽寺書付を以、来廿八日弁財天御遷座之節、御神輿并御供方別紙行列  
 之通同寺方操出し、馬坂方横町、袋町、大松前町、小松前町、惣社堂町江  
 通り、夫方嶋へ御遷座仕候旨、御届書差上候、

一、同寺書付を以、享和三亥年弁財天御遷座之節御例も御座候間、今度嶋江  
 三間二四間之仮家、惣社堂浜江式間二三間之仮家式ケ所御拵被成下度趣、  
 願書差上候、

一、知り内村取締出役富永官治方今度同所而年々植付候雜穀高二応積穀致ス  
 度、尚又、秋味之節是迄村中方味家江差出ス候人数相減、吾人雇給五貫文  
 減高拾人二而老ケ年五拾貫文ツ、積置、追年相高候上正米買入積立申度、  
 村方へも熟談仕候間、御差支も無御座候半々被仰付度旨伺書、官治方ニテ  
 年回相当願合有之候間、今朝右伺書新井田周治殿江梅太郎方差上置候、

一、今般被仰出候御備明松・草鞋調書上、御城下老冊、同付在々老冊、東西  
 蝦夷地老冊、都合三冊、周治殿差上候、員數臣細書別紙扣有之、

高左之通

御城下 明松ノ千五百本 但、老入二而三百本持、名主五人二而如此、

草鞋ノ千五百足 但、前同断、

代拾五貫文

此金貳両三朱卜百廿五文

西蝦夷地明松ノ四万貳百本

同蝦夷地草鞋ノ四万貳百足

代四百貳貫文 但、老足付拾文ツ、

東蝦夷地明松ノ壹万八千九百本

同 草鞋ノ壹万八千九百足

代百八十九貫文

東西蝦夷地

明松ノ五万九千百本

東西蝦夷地

草鞋ノ五万九千百足

代五百九十壹貫文

此金八十六両三分二朱卜貳百五十文

西在 明松ノ千八百五拾本

同 草鞋ノ千八百五拾足

代拾八貫五百文

東在 明松ノ四千九百五拾本

同 草鞋ノ四千九百五拾足

代四十九ノ五百文

東西村々

明松ノ六千八百本

草鞋ノ六千八百足

代六十八貫文

此金拾両

一、今般被仰出候御備積米老ヶ年三千俵宛十ヶ年之内年々買入代金之内、東西場所々差荷料、上乘金、式分積金丈ヶ引去、殘金御收納ニ不抱市中小前江不相掛出来候様仕法可申上旨被仰付、当役并名主一同示談之上、内調出来候間、下書御番周治殿へ入御覽御賢慮伺上置候、尚又、追年積米詰替等之節重ニ御用達・請負人江世話為致候様可相成候付、此度出金方仕法之廉々江者差加へ不申候旨申上置候、然処、御奉行所ニ而可然候間請書出来早々差上候様被仰付候、尤、御意之事故荒増取調候間、尚一同申合心付候廉者追々申上候様仕度段申上候、

一、場所々式分積金、差荷料、上乘金共当年分御入用方有之候間上納為致候様、御番周治殿方被仰付候間、御用達行司藤野喜兵衛・官川増藏、請負人行司米屋孫兵衛・和田屋庄吉呼出又申達、仲間へ為致通達候、

一、阿吽寺書付を以、此度弁財天御遷宮付、嶋へ御遷座相濟申候上ニて来廿九日先規之通御代拜被下置度、尤、御座修法相濟候上ニ而御案内可申上旨書面、周治殿へ差上候、

八月廿八日、阿吽寺方弁財天九半時繰出し御遷宮行列、馬坂方下り、横町、袋町、大松前町、夫方小松前町、惣社堂町、弁財嶋江御遷座無滞相濟申候、尤、神輿御供麻上下二而町代・請負人・名主野坂吉六惣代として罷出申候、  
一、御代参之儀ハ御用人工藤八郎右衛門殿明日嶋江御出之積り被仰出候、



一、阿吽寺方仮家二ヶ所願出候処、則願之通被仰付、嶋二而仮家三間二四間  
老ヶ所、惣社堂浜江老ヶ所式間二三間、昨日御聞濟二而御作事方入用品々  
御差出有之、人足五拾人差出ス、今日昼過迄ニ出来御遷座相成候、

八月廿九日、今日弁天島おゐて満座大繁<sup>マヒ</sup>、若博統<sup>ワカ</sup>之儀、風雨強く浪高二而通  
路二も難相成候付御日延御代參共被仰付度旨、阿吽寺方願書差出候処、御  
代參之儀御延引被仰出候、

一、市中名主一手付草鞋五百足、明松五百本ツ、五手調書、其外共東西蝦夷  
地御備明松・草鞋調書并在々之分共、新井田周治殿へ差上、尤、惣高者先  
番之節相記置候間略ス、

九月六日、此節箱館辺方当方へ米買入ニ罷越候もの有之旨承り、此後方ハ下  
り米も無之時節ニ候間他へ差出不申様仕度、私共一同方御番新井田周治殿  
へ相伺候処、御用之間おゐて御月番へ御申立相成候処、御聞届付、駄付之  
分ハ名主、問屋頭取、小宿世話役申談、其余者米売候もの江者名主方申聞  
候積り、在々之義ハ在方掛り江申談、船積廻ス方も有之候而者如何ニ候間、  
其儀者沖ノ口奉行被仰付度申上候処、御承知被遊候趣被仰出候、

一、惣市中井川々江こみ捨候義不相成旨嚴敷被仰付候、尤、此後者右見当り  
次第町方相廻候間召捕候旨、御奉行所方御吟味役所御談有之候由ニ而蠣崎  
重郎右衛門殿嚴敷被仰聞候間、名主一同へ右之旨申談遣候、其外市中町通  
りも掃除方共甚不宜候間、早速取片付候様可致旨嚴敷名主一同へ申聞候、  
九月十日、丁持共栖原屋下夕浜手おゐて小家地面拜借願、問屋頭取并宮川半  
右衛門加印を以願書差上候、

一、当時米払底之趣相聞得候付、江差・箱館在々江も積廻之義不相成旨御触  
御出ス被成候処、問屋共右御触之前ニ箱館之もの江米売渡代金請取船積仕

候分有之候付、此分御差止ニ而者難決願出、伺之上、積廻御免被仰付候、  
左ニ、

- 一、米三百俵 近江屋忠右衛門 一、五百俵 工藤忠兵衛
- 一、六十俵 川内屋増右衛門 八十六俵

右者沖ノ口方御用状相添、箱館着之上、右返書当沖ノ口江差上候積り、若  
相違之儀有之候へ者米売人并船手共如何様ニも御答可被仰付与此手続工藤  
庄兵衛申出、

一、先達而御積米三千俵宛年々御備ニ相成仕法申上候処、至極宜組立ニ者候  
得共、右之内蝦夷地廻り鯉取并入込旅人右両廉より取立之儀者差支筋も有  
之哉、猶亦、御積米十ヶ年相濟候後、七ヶ年程も市中備積金致可然旨、御  
番方御内御沙汰之旨、蠣崎四郎左衛門殿方町年寄・名主一同江御談御座候、  
引取談之上取調申度趣申上置候、

九月十三日、松前三郎兵衛様、今朝御風順付、御奉行所新井田周治殿、町年  
寄村山重左衛門、名主田中九八・中林九兵衛麻上下ニ而浜表迄罷出候、尤、  
三ノ丸方小松前通 **干** 之小路方問屋会所之下夕江御下り、夫方御乗船ニ  
相成候、

九月十五日、知り内村荒神社御遷座付、御初穂五十疋、諸入用品々代積りニ  
而金老兩老分ニ朱御下ケ之旨、四郎左衛門殿方被仰聞候間、佐々木大和へ  
達、同社御代參之儀ハ、谷梯九十九被仰付候間、是又前同人江達ス、

一、御払馬直段付、上老疋付金式兩ト三百文、中老疋付老兩二分ト三百文、  
下老疋付老兩ト三百文、

九月十八日、御勘定所方當時市中米相庭書上可申段被仰付、尤、問屋、小宿、  
御用達、請負人江申付、右相庭書取之差上候、加賀米七匁八分、越後米同

断、但、老俵売八八刃ニ売松申候、岩田金藏・工藤庄兵衛・工藤忠兵衛・浜田屋政右衛門・山田屋文右衛門代文治、右連印、

一、村岡玄眼義、出奢<sup>(タ)</sup>届出候付、親類土屋抽右衛門御呼出ス之上被仰渡候趣左二、

村岡玄眼儀、出奢<sup>(タ)</sup>届出候付、故雄戴江被下置候御印紙御取上ケ、其上玄眼家之義者永く御暇被仰出候、御奉行新井田周治殿被仰渡候、御吟味役新井田嘉藤太殿并蠣崎重郎左衛門殿、下代桜庭梅太郎・村山重左衛門立会、

九月十九日、市中米相場、御用達・問屋・小宿・請負人共申合書付可差上趣、内御役所御勘定方因藤佐次兵衛殿、一昨十七日名主吉六江御申聞有之候処、申上方延日相成候付、町下代御呼出きひしく被仰聞候、已来内御役所方御用有之候ハ、早速御用弁可申上候様、此段当番名主中林九兵衛江申聞、名主中へ申達候、

九月廿日、白鳥采女書付を以、父形部義眼病付去三月中退身願之通被仰付、是亦治療仕候処、此節全快仕候間、何卒以御憐愍再勤被仰付被下置度願書差出候間、御番新井田周治殿へ差上候、猶又、兼而采女并親類共方差上候願書之義者乍恐願下ケ被仰付被下置度旨口達ニ而願出候間、其段も申上置候、

一、町年寄張江又八、其外御用達・名主、先々相勤候者方当時之者迄、被仰付候節・御免願いたし候節年月相調候様、周治殿方被仰付候、

九月廿六日、秋田八森村松源院弟子祖莫・大棟、右之僧来申ノ三月迄<sup>留</sup>逼留、引受龍雲院方書面上ル、

九月廿七日、栖原屋庄兵衛下浜手丁持共居小家地面東西七間三尺、南北三間

拝借仕度旨願書、問屋頭取兩人、名主宮川半右衛門加印差上候、

一、町年寄・御用達・名主、是迄先々親代方御奉公勤来候明細書差上候、

一、荒神社御遷宮御被御神供御神酒、右者荒神社当九月廿二日御遷座付、

御代参、谷梯九十九殿御勤被成候、右之品々内御役所へ相納候趣、神主大野権之進申出候、

九月廿九日、来申年方向巳年十ヶ年御備積米三万俵相済候後、十ヶ年目午年方向戌年迄五ヶ年市中備積金共兼々御内意有之候付、一統談之上、仕法組立書三冊出来候付、町年寄・御用達・名主・請負人ハ惣代福嶋屋新右衛門・加賀屋多右衛門・竹屋彦左衛門、右一同罷出、今朝新井田周治殿江差上候処、一同骨折之段御挨拶有之候、

一、阿吽寺代替付、同寺ニ有之宝物御調御見分書付を以願上、願之通被仰付、今日御奉行所御吟味役衆立会、御目付新井田百右衛門殿、町年寄一同、書役頭取迄継肩衣、其外書役・町方共阿吽寺江罷越、宝物者於座敷御調、夫方本堂ニおゐて御本尊不動明王、其外諸仏開帳有之、無滞相済候、

十月朔日、市中不殘店役と申もの、名主一同ニ而取調、委細相認メ早速ニ為差出候様、蠣崎四郎左衛門殿方御達付、名主専右衛門へ申談置候、

十月四日、問屋共方沖ノ口御役所江伺書差上候、両浜ヨリ受用口錢之儀付、両浜方も右脇書仕差上置候、依之沖ノ口御役所方御問合之儀も御座候哉、

御合ニ右書上仕候三通奉御覽入候趣願書添、両浜方奉差出候間、蠣崎四郎左衛門殿へ差上候、

一、店役取立方調書付、名主五人方帳面五冊ニ而出ル差上候、尤、両浜組麹屋豆腐などハ定例之取立之外小前商人之分者其時宜見斗、名主限りニ而増減割いたし取立仕来候趣申上候、

一、市中店役是迄名主限りニ而増減等致来候得共、已来者町年寄ニ而能々相糺候上ニ而御印紙江其商人之名面相記ス其筋へ相渡、役銭取立之上者帳面相添、名主方町年寄迄差出相納可申旨、今般改テ御用之間方御達之趣、  
 蠣崎四郎左衛門殿方御達付、名主一同江相達候、

十月七日、藤野喜兵衛手船常昌丸、越前敦賀江漂着之節於当所ニ取扱候御役方名前昨日御尋ニ付相尋候処、御船道役平井伊兵衛・毛利吉右衛門、付添才件久左衛門・小太夫・治兵衛、外ニ小者老人之趣、喜兵衛ヨリ書上候、

十月十日、殿様 御参府御上下共御上り場之儀、是迄之所 御止メ相成、以来者切通ス方小松前浜沖ノ口下夕江御揚被遊候旨、御役人中一同見分相濟候間、為心得達置旨、新井田周治殿方御達有之候、

一、中書院方中ノ間、御先手組御徒士迄明申年ヨリ金子持出ス積米仕候旨願上候処、御聞濟相成候間、市中積米与一集ニいたし同様取扱世話致遣候様、此間中被仰聞候間、昨日御用達一同、請負人惣代三人呼出ス申談候所、一同致承知御請相濟候間、私共相揃今日御請仕候旨、御答申上候、

一、今般御内意有之、来申年方向拾ヶ年御積米并十壹ヶ年目方五ヶ年御積金仕度仕法組立いたし、先達而拙者共并御用達・名主・請負人連名ニテ伺書差上置候処、伺之通り御積米御積金共被仰付候旨、蠣崎四郎左衛門殿方御達有之、依之御用達・請負人・名主申聞候、

一、寺社町家共已来仏神江相備候義ニ而も聊之小松成とも真松者決而不相成候、依之今日寺社へ御触書出ス、市中へも同断、

十月十四日、名主方請取御印之儀、今般書役頭取町御役所取締り被仰付候付、已来諸品請取之義付御印取候義、御吟味役江相伺候、取締方御示談之上被仰付候積り、尚又、名主用心蠟田中九八を以取締方へ相談之上、已来別段

二出ス置、当番井子供役之者へ申聞候而も相渡り候趣ニ候、

十月廿日、鈴木紀三郎殿以書付、家作付昨年中木品借受いたし家作出来いたし候間、別紙之通アフタ場所おゐて伐出ス申度旨、願之通り被仰付候付、例之通可取斗旨、御番新井田周治殿方御達、雜木平物五拾丁、内二間半もの三十挺、二間もの廿丁、右者請負人方沖ノ口へ御免判相願候へ者沖ノ口方免判相廻り候へ者当御役所おゐて押切致、夫方請負人江内御役所方御下ケ相成候積り、明朝右之趣申上候、

十月廿二日、御備米御備金御請印相濟候廉、材木屋拾二軒、附舟共五軒、鯉取之もの一同、場所支配人、番人、稼方共濟、是ニ而御請印皆濟仕候、

一、御備米御備金付、年々金子為差出候廉并拾五ヶ年中御用達・請負人ニ而詰替候廉、一昨日ト昨日ト兩日被仰渡、御請印相濟候請書十二通老袋ニいたし、蠣崎四郎左衛門殿江差上候、尤、蝦夷地支配人并番人、稼方之もの未タ登合不申候分、追々次第印形為致候積り申上置候、在方掛り伊藤忠右衛門義も近在出役付、追而印形之積り、江良町村伝二郎、喜右衛門、名主吉兵衛右三人も追而印形之積り、

〔奥端書〕「天保六末年ノ三」

〔端書〕「天保六未ノ四」

十月廿三日、今晚四ツ時法幢寺出火有之、寺中不残焼失致候、釣り鐘堂并稻荷堂者相残り候、夜八ツ時過鎮火いたし候、法幢寺出火御届書、左三、

乍恐以書付御届奉申上候

昨夜戌ノ下刻惣且中位牌堂方出火ニ而諸堂不残焼失仕、急火故、

御尊牌并本尊・御寺納物等迄焼失仕、誠ニ奉恐入候、依之玄堯儀相憤罷在申候、此段書付を以奉申上候、以上、

十月廿四日

寺社御奉行所

龍雲院印

右書面今朝龍雲院直々罷出差上候処、書替相成書面之通御届書差出候間、

四郎左衛門殿へ差上候処、御披露相成候、

一、龍雲院御呼出又候処、当病付代江良町村泉藏院罷出候処、昨夜法幢寺出

火有之、

御尊牌并本尊・御寺納物等迄焼失致候付、法幢寺住持玄堯義御沙汰中慎被

仰付候趣、四郎左衛門殿へ被仰渡候、

十月廿五日、今度非常為御備十ヶ年積米、尚又引統五ヶ年積金之儀被仰出候所、其方共厚申談相整候条、出情之至り一段之儀 思召、依之其方一代中ノ間席江御繰上ケ被仰付候、□

村山伝兵衛

桜庭梅太郎

張江又八

村山重左衛門

今度非常御備として十ヶ年積米、尚又引統五ヶ年積金之儀被仰出候処、其方共厚申談相整候条、出情之至一段之儀被 思召候、依之其方一代新組御徒士江御繰上ケ被仰付候、

加藤専右衛門

宮川半右衛門

田中九八

中林九兵衛

野坂吉六

法幢寺代

龍雲院印

此度非常為御備十ヶ年積米、尚又引統五ヶ年積金之儀被仰出候処、其方共厚申談相整候条、出情之至一段之儀与思召候、依之御紋付御上下并白銀五枚被下之、

右御書取之儀者老人別二一紙ツ、於 上御台子之間 御月番下国齋宮殿二而被仰渡候、尤、松前内藏殿并御役人老席方老人ツ、相詰、繼上下二而被仰渡候、且、伝兵衛方名主迄麻上下登城いたし候事、

一、御用達・請負人一同麻上下二而罷出候処、十五ヶ年積米之儀一同申合、年々詰替米仕候付、為御褒紙 御書取を以当御役所二而蠣崎四郎左衛門殿へ被仰渡候、尤、新井田嘉藤太殿御立会被成候、

一、市中重立もの、問屋・小宿一同、材木屋・附舟之もの一同、市中鯉取惣代之もの、場所々支配人・番人・稼方、茶屋一同へ御書取を以被仰渡候、前同断、但、町年寄四人、名主一同、町代罷出候、

一、法幢寺焼失付、御尊牌所炭御足輕二而片付候間、町御奉行蠣崎四郎左衛門殿、町吟味役工藤茂五郎殿、御目付、御作事方、町年寄梅太郎・重左衛門、名主兩人并人足十人、御見分相濟申候、

一、御用之間おゐて昨日町年寄一同御積米同金掛り下国齋宮殿へ被仰渡候、一、御用達・名主・請負人一同之儀、当御役所二而昨日前同様掛り四郎左衛門殿へ被仰渡候、

一、中村屋新三郎・関東屋喜四郎方金子借用仕度旨工面方願出候間、昨年江差表方借用致候分、此度返金為致、改而金千両借用致、兩人江用候付、江差吉村彦兵衛・村上弥三兵衛兩人願合之書状差立案文、左之通、

別紙啓上仕候、然者各々様方去秋借入金之儀、得方御返金申上候筈之処、エトロフ登り船遅着二付、中村屋新三郎・関東屋喜四郎之願依

同家新左衛門江利金を為持、先頃御申訳其御地へ差立候節、同人方相願候付、厚御取斗を以五百金明年迄御取替可被下旨、帰郷之節御状二被仰下忝承知仕候、右二付、半金丈ケ者是悲々皆済仕度敵敷申候処、同人共も深く心痛手配仕候へとも、当夏中御場所へ相下ケ候手船之内両艘登之節風筋悪敷南部地落舟いたし、夫方直様上方筋颯登候故、当所おゐて金談手違相成候上、津軽地おゐて米手配旁々金配殊之外当惑仕居候、乍去前段金子之義者格別之御慈愛を以借用出来、御蔭を以取繕罷在候事故、如何体致候而も御返済申上候上二而又々御願申度趣二而、此度漸々五百金調達仕、一旦者御返済申上候得共、是も明年迄借用相成候様、新三郎・喜四郎方拙者共へ達々願出候間、是迄存外之延月二相成候上、度々申上候も誠赤面仕候得共、新規請負人御引立被成下候様奉願上候、甚押付ケ間敷候へとも則同役共連印之証札、今般清次兵衛二為持御願に差立候間、委細同人方御聞取可被成下候、乍繰事此度之五百金御引取限り相成候而者誠ニ手詰之当惑ニ御座候間、前後手金再借仕候様可然御談合之上、御聞届可被成下候、先者右御願迄申上度、如斯御座候、恐々謹言、

十月廿六日

村山重左衛門

張江又八

桜庭梅太郎

村山伝兵衛

吉村彦兵衛様  
村上弥三兵衛様

尚々、昨年者証印万屋弥兵衛二御座候処、同人義病死付、此度間屋中嶋屋勘右衛門証印為致候、為御合此段申上候、以上、

一、東西村々重立候者并緋取之もの、炭焼之もの、竈頭とも、御備米御備金請書連印差上候条奇特ニ被思召、今日一同呼出入御賞詞御書取新井田周治殿方被仰渡候、

十月廿九日、法幢寺焼失付、住職玄堯慎ミ被仰付候、依而龍雲院を以代御回向御用向等龍雲院申立通被仰付候

十月廿九日、栖原屋庄兵衛家内手代九兵衛義、当春中々金千九百四十九兩引負之処、栖原屋庄兵衛主人紀州北村徳兵衛方願書付、同人江厚く利解申聞候処、右高金之内江金子千四百七拾兩可差出旨、工藤庄兵衛・吉田屋善右衛門を以申出候、殘金四百七拾兩之廉出高無之趣、右兩人申聞、何分勘弁預り内済ニ相成候様ニと願出候付、栖原屋へ再応申入候得共、勘弁難成旨、工藤忠兵衛・栖原屋弥七兩人罷出返答有之候、

十一月二日、栖原屋方申出候趣、工藤庄兵衛呼出、九兵衛方へ今一応申入、勘弁可致旨申遣候、

一、前一件、昨日工藤庄兵衛を以九兵衛へ申入候処、当金七百兩差出、式百拾兩者極月迄庄兵衛并吉田屋三郎右衛門引受返金之積り、坪田屋佐平治網代金五百六十九兩余者九兵衛方対談の上引請返金之積り、殘四百七拾兩余北帳場方正金并品借分勘弁二預り度趣候得共、栖原屋主人共承知無之、依之替済之義、昨日庄兵衛を以九兵衛へ申入候処、此上出金之手段無之候間、同人住居中町建家其外土蔵之心組いたし居木品繩苴之類二而も四百七拾兩之廉へ引取呉候様いたし度、其余者何分出金之手段無之旨、庄兵衛申出候、

一、法幢寺焼跡取片付として人足八拾人程江名主専右衛門・半右衛門、其外町代差添罷越候、町年寄見廻りとして村山重左衛門罷越候、

一、法幢寺焼跡掃除之儀、御用達江申談候処、承知致候間、名主人足差出、賄方者御用達引請、昨日迄二不残相済申候付、名主、御用達行司方申立候間、蠣崎四郎左衛門殿へ申上置候、

十一月五日、岩田金藏、沖ノ口御役所下夕元御台場永拜借被仰付、先日御割渡相成、右付、兼而申上置候御冥加金五拾兩今日御目録熨斗添差出候間、則蠣崎四郎左衛門殿へ差上、名主中林九兵衛差添献上相済

一、栖原屋庄兵衛店方手代九兵衛引負金之内、追々仲积人を以訳立いたし、残金四百七拾兩余之廉何分分出金相成兼難渋仕候旨、九兵衛願二付、中积人工藤庄兵衛を以段々主家江申訳いたし候へとも得心無之候付、先達而村山重左衛門内宅おゐて北村徳兵衛手代弥七并工藤忠兵衛呼出し利解申候候へとも、勘弁難相成旨翌日申立候付、同勤談之上、元口入人山田屋文右衛門方弁金を致候積り、当時文右衛門留主中故、支配人并重手代、尚又親るい博知石町福松三人江弁金之義利解申入置候処、文右衛門留主中大金弁納之儀当惑、親類一同談事之上、栖原屋へ色々勘弁之義も被下度願合候得共、承知無之候間、九兵衛方へ罷越、出金之談も仕候得共、前同様難渋無申斗候間宜敷相願趣相歎当惑仕候、依之何分銘々限り弁金之儀、留主中大金御座候へ者逆も内熟仕兼候趣、福松、小吉、半平同道二而今日相答出候間、聞届置候、明日申上候積り、十一月七日、法幢寺什物并寺納物焼失委敷書上可仕旨、龍雲院和尚呼出し申達遣候、  
一、唐津内町田兵衛葉風呂相立候付、薪置場無之、同人借家之前御空地九尺二五間斗り拝借地願書、右冥加として馬行三間程材木にて積立拵可申趣申上候、

十一月八日、蠣崎民部殿江戸表おゐて百石御加増被仰付候御書取并松前内蔵殿百石御加増被仰付候御書取有之候、

蠣崎民部

其方儀、一昨年以來松前表用向申付、殊当年ハ江指收納向改革付差下候処、万端居合、老年之上三ヶ年打統罷下り、無差支取扱勤功一段之儀候、依之格別之訳を以百石加増七百石高二申付候、尤、家席者は迄之通可相心得候、

松前内蔵

其方儀、先年方勝手掛り申付置候処、万端骨折取計、在所・江戸勝手向差支無之、且又、非常々為手当江指・箱館於兩所二年々式千俵ツ、十ヶ年借米積置候儀相企、兩在共趣意通相整、其上当年者箱館沖ノ口取締方改革之儀取扱候条勤功一段之事二候、依之格別之訳を以百石加増七百石高二申付候、尤、家席之儀者は迄之通可相心得候、

一、関東屋喜四郎・中村屋新三郎方之願合千兩再借之義、江指町年寄江願遣候処、聞済相成、返書相越、元証文も返る、  
一、御備米土蔵一ヶ所四間二十間此四十坪御当所建上ケ直段老坪金貳兩二朱、此代金八拾五兩、板蔵一ヶ所四間二八間此三十二坪前同断老坪金二兩三分二朱、此代金九十二兩、土蔵・板蔵二而代合金百七拾七兩、内八十八兩二歩半金此度相渡、差引残八十八兩二分之内、来申年三月迄金四十四兩壹分木品着次第渡之定、全く残金四十四兩壹歩ハ御蔵建上ケ出来替済相渡候定之証文老通切組、引受人津輕十三湊加賀屋長七、同所佐渡屋平十郎、請人当所阿部屋利兵衛、右三人連印二而差出候間、右金八拾八兩二分者御用達中へ立替、月番西川准兵衛・岡田半兵衛方今日長七へ為相渡候、委細取組

方証文ニ有之、外ニ絵図面ニ枚有之候、

一、銅錢・鉄錢吹方、先年御止メ之処、此度鉄錢吹増被仰出候間、差支無之様通用可致趣触面、

一、此度百文錢吹方被仰付候間、有来通用錢ニ取交、無差支通用いたし候様御触面、

一、古金銀之儀、当未年十月迄引替被仰出候処、未夕残も有之旨相聞得候間、来申十月迄不残引替候様御触面、

一、一昨八日之夜、山田屋文右衛門手代小吉・半平、親類山田屋福松、右三人村山重左衛門宅へ相招申候処、半平者御屋敷方へ罷出候由、福松義者病身相煩罷在、小吉老人罷越候間、栖原屋手代九兵衛引負金一件追々誤合相付金四百七拾兩之口先夜村山伝兵衛宅ニ而九兵衛へ濟方申付候処、何分出金難相成候間、七十兩之内有品相渡不足之処者金子足金いたし、残四百兩四ヶ年賦ニ相願度、証人者工藤庄兵衛儀者承知候間、山田屋文右衛門江利解申聞、証人為致呉候様、其節九兵衛願付証印之儀、山田屋代小吉へ申聞候処、同人引取、親るい福松始一同へ申談候へとも、文右衛門留主中大金之引請証印いたし兼候間、昨朝小吉・半平兩人罷出申聞候、依之証印二者不抱右年濟等之儀、今夕村山重左衛門宅へ栖原屋当時支配人庄兵衛并工藤忠兵衛兩人呼寄、得与利解申聞候、何れ帰宅之上、主人共へ為申聞候趣ニテ引取、

十一月十三日、法幢寺焼跡掃除方、先達而拙者ともへ被仰付、日々順番二出役いたし、為拾候地金御作事方へ相渡ス替掛惣高八拾貳貫目、名主中林九兵衛書上候間、相記し置候、

一、京都山崎屋伊三郎并宿広嶋屋布右衛門連印ニて、此度急火ニ而御仏具等

も焼失仕候ニ付、年来仏具渡世仕、年々御当所へ罷下り商売仕候間、御仏具等御用被仰付被下置度、尤、品之儀者入念相働申度奉存候間、御用被仰付被下置度旨願書奥印いたし、蠣崎四郎左衛門殿差上、則十五日願之通被仰付候、

一、栖原屋一件、四百七拾兩之儀ニ付、工藤庄兵衛罷出候、

一、法幢寺焼失之品書上一冊、差当り御法会等之節入用之品々調書壹冊、同寺代龍雲院方差出候間、御番小林三左衛門殿へ差上候、

一、龍雲院書付を以、拙僧儀、近来病身ニ相成、自分寺役も漸々相働候処、法幢寺焼失後、御回向御用向等被仰付相働候得共、此節持病猶々差起り候故、若御用向等御間欠ケニも相成候而者奉恐入候間、法幢寺代之儀者御免被仰付被下置度奉願上候趣願書差出候間、三左衛門殿へ内々入御覽候処、法幢寺之義も多分年内中二者何とか御沙汰可有之哉、其節兎も角も先此度ハ願書差扣可然旨、周治殿御内談之上被仰聞、其旨龍雲院申聞候処、御祥月并月並御時濟之節若持病差発り候半々外禪寺之内願合差上候而も不苦御儀も可有之哉、其節差掛り名代等差出、失敬ニ相成候而者恐入候趣申出候間、其段尚明朝相伺候積り、

一、去月廿三日、法幢寺出火焼失之節駆付相働候もの、同月廿八日書上置候へとも、猶又此度取調いたし書上、小林三左衛門左ニ差上、

神明町安五郎 藏町万右衛門 博知石町万治郎

端立町三治郎 唐津内町清助 仙北屋仁左衛門下男ノ仁助

川原町源助 神明町栄助 東中町栄吉

川原町乙松 唐津内沢町長八 唐津内町松二郎 家内新助

唐津内沢町市兵衛 トラメキ町七兵衛 同町三太郎

同上野町組十八人 旅人宿甚太郎組廿三人

旅人宿喜右衛門組九人 以上人数六十六人□

去去年二月六日夜古館町おゐて中川原町

□此処

下ケ札 吉右衛門所持之板蔵ヨリ出火、外二八軒類焼之

節駈付相働候者六十二人江金式百疋被下置候、

白米式斗

一、右者出火之夜焚出し為致候、

藤野喜兵衛

御用達

一、右者手人召連罷出相働候、

岩田金蔵

一、名主中林九兵衛、右者樟榎堂おゐて相働候、

一、御用達伊達林右衛門・藤野喜兵衛・西川准兵衛・岩田金蔵・岡田半兵衛・宮川増蔵、右者法幢寺焼跡取片付之節、諸品持出ス仮家相建、日々罷出入足賄仕候、

一、名主一同、町代一同、右者法幢寺焼跡取片付之節、日々人足付添罷出候、

右之通一紙いたし書上候、尤、鼠半切也、

十一月十九日、法幢寺本御普請付惣掛り、

御家老松前内蔵殿 御用人寺社町奉行兼新井田周治殿

御勘定奉行沖ノ口奉行兼藤田陸郎殿 江差奉行

近藤吉左衛門殿  
三輪八之丞殿

右者江指松山材木伐出ス方二付、

右之通被仰付候間、為心得相達候旨、

小林三左衛門殿方被 仰聞候、

一、法幢寺代龍雲院儀、持病有之候付御免被仰付候趣、小林三左衛門殿方御

達、尤、書面差出候付被仰付候、

一、法幢寺御普請付、桜庭梅太郎・村山重左衛門兩人御用ノ間ニおゐて御月番松前監物殿方掛り被仰付候、尤、平服ニて罷上り候、

一、前寺御普請付、藤野喜兵衛掛り被仰付候旨、小林三左衛門殿方被仰渡候處、御請相濟候間、御掛り御名前為知遣申候、

一、法幢寺焼失二付、本堂庫理御普請被仰付候、明年方御取掛り付、信心之ものハ物之多少ニ不抱寄附致候而も不苦旨、昨日御達二付、今日御用達問屋、小宿、両浜請負人、市中共不残相触申候、

十一月廿二日、去月廿三日夜法幢寺出火の節、名主・町代者人足引廻ス方骨折付御賞詞、小林三左衛門殿方御申渡有之候、尤、先番書上置候相働候人数六十六人江金式百疋御目録被下之候、

一、前寺焼跡自分物入ニ而取片付、猶又日々大勢人足賄方いたし行届候付、御用達一同へ御賞詞有之候、尚又、出火之節、岩田金蔵・中林九兵衛義者別而骨折致奇特之事ニ候趣被仰渡、一同難有旨申上候間、則小林三左衛門殿へ申上候、

十一月廿三日、藤野喜兵衛、御用之間おゐて此度法幢寺御普請掛り被仰付候

付町年寄格被仰付候旨、御用番方被仰渡候、当番張江又八差添、三役所始、詰所々江相届候、

十一月廿四日、同人義、昨日町年寄格被仰付候付、平日帯刀致候様、御内々御奉行所方被仰付も有之候へとも、同人願二者、平日売用等繁敷、乍恐内

実迷惑筋も御座候付、是迄之通り無刀ニ被仰付度旨今朝願上候處、正月元日御札 御城内江相詰候節者帯刀いたし、其外五節向等是迄之通一刀ニ而

相詰、平日ハ勝手次第二いたし不苦旨被仰付、尚又、喜兵衛義者法幢寺御



普請掛り被仰付候付町年寄格被仰付候事候得者、市中諸願書向等奥印二不及候、御普請御用之外ハ御役所詰二不及儀二候へ者、触書差出不及候、尤御礼之節者帯劔二而町年寄格二而御用達先ニ御礼申上候様可致旨、小林三左衛門殿方御達有之候間、藤野喜兵衛江相達置候、

一、薬湯塩屋戸兵衛書付を以、同人借宅前通り博知石町橋際御用地拝借仕度、為御冥加橋地西側行馬普請致度趣、願書先番差出置候処、右御用地之義ハ追而御用茂有之候間難被仰付旨、昨日小林三左衛門殿御達有之、中林九兵衛へ右之趣申聞、書面下ケ遣し候、

十一月廿五日、前机老脚松前内藏殿内お初殿、本尊釈迦如来像一体同おつた殿方

右者法幢寺江被致寄進候趣付、同寺代龍雲院代印ニテ書面出ル、

一、御用達六人方法幢寺御普請付寄附金六百兩差上度旨、〔藤野・伊達・西川・岡田・岩田・宮川〕願書差上ル、

一、法幢寺寄附物之義付願書差出候半々、町年寄一同、尤、藤野喜兵衛も連名可致、則奥書印形可致旨被仰渡候、

一、蠣崎四郎左衛門殿御病身全快ニ而御出勤被成候処、今度法幢寺御普請掛り被仰付候趣、小林三左衛門殿御達候、

一、松明・草鞋、蝦夷地并在々先日調書を以被仰出候通明年相備、已来年々詰替無相違備置可申旨、御請書請負人并在々共都合二冊、小林三左衛門殿江差上候、

一、市中御百姓宗門人別相改御帳并惣目録左二、

- 一、家数四百三十二軒 男七百五十九人 田中九八持
- 内訳
- 人数千五百五十四人 女七百九十五人

一、家数五百四十六軒 男千三十二人 内訳 宮川半右衛門持

一、家数四百九十九軒 女九百五十八人 内訳 男八百四十九人 中林九兵衛持

一、家数四百廿四軒 男八百四十九人 内訳 女七百五十三人 野坂吉六持

一、家数四百七十軒 男七百廿三人 内訳 女七百六十七人 炭竈分

一、家数拾老軒 人数四十五軒 炭竈分

一、家数四百五十三軒 男八百三十四人 加藤専右衛門持

一、家数千六百十二人 内訳 女七百七十八人

惣家数 合式千三百三十七軒 人数合八千式百九十三人

下ケ札 内訳 男四千式百廿四人 女四千六十九人

惣家数合式千三百三十二軒 人数合八千式百六十一人 去年午改高 内訳男四千八百八十八人 女四千七十三人 男三十六人過上 女四人不足

右者当年市中宗門人別相改相違無御座候、認め先例ニ付略、

一、金六百兩御用達六軒、金四百兩請負人十三軒、金百五拾兩間屋十二軒、右者法幢寺普請付寄附仕度旨願書三通、御奉行蠣崎四郎左衛門殿へ差上候、

十二月二日、金五十兩小宿一同方前同様、前書寄附金願之通被仰付候、尤、

御書取を以明申年方四ヶ年割ニ上納方被仰出候付、向々江拙者共方申渡候、  
十二月五日、昨夜六ツ半時方今朝迄地震数度有之、当番急キ相詰候、夜廻り

火之用心向格別入念相聞候様町内時廻り江可申付旨、宮川半右衛門へ達ス、  
十二月六日、今朝も地震両度有之、御備米御備金付、明年方御城下并同付東

西村々方蝦夷地緋取ニ相越候もの老入付早切敷四十五本ツ、之見込、老本  
付錢十五文ツ、為差出候義者、江差表ニ而も右様之廉有之候間、若亦二重

ニ相成差支有之間敷哉、先頃御沙汰付、御備米調之廉方相除キ書上候後、  
江差表へ問合候処、同所ニ而者全同付之分斗り見込ニ而、御城下方蝦夷地

行緋取ニ者何も差支無之旨、吉村彦兵衛・村上弥惣兵衛兩人方返書至來い  
たし、其段御奉行所へ申上候処、御用ノ間へ御窺の上、御備米之廉へ組入

差支無之旨被仰出候趣、蠣崎四郎左衛門殿御達有之候間、同役へも通達致、  
名主一同へ茂申聞候、

十二月十二日、白鳥形部書付を以、配下江良町村社人佐々木守治事、此度左  
京と改名仕候旨御届書昨日差上候処、是者社人改名之節是迄御届書ニ而出

し來候得共、此度方已來共願書いたし為差出候様、蠣崎四郎左衛門殿方被  
仰付候間、白鳥形部代興美江申達、右届書同人江相下ケ候、

一、万屋専左衛門御請負東地シツナイ・ウラカワ・シヤマニ、是迄金主証人  
栖原屋庄兵衛方ニ御座候処、此度双方熟談の上、同人義者相離、已來者藤

野喜兵衛・岡田半兵衛兩人ニ而金主証人仕候間、御聞濟被下置度趣、一昨  
日双方方願書差上候処、願之通被仰付候趣、

蠣崎四郎左衛門殿方御達有之候間、万屋専左衛門、栖原屋庄兵衛、藤野喜  
兵衛、岡田半兵衛、右場所宿河内屋増右衛門、右一同へ申達候、

一、御備米御蔵、先日十三ノ港能登や長七へ切組申遣候節、御用達方來春迄

借入金百兩之内八十八兩二分長七へ相渡、殘金拾壹兩二分、此度御蔵石垣  
積方石運方共、窺濟の上、石工甚吉江申付候ニ付、右代之内、前分殘金拾

壹兩二分、今日西川准兵衛方甚吉へ相渡候積り、  
松前内藏殿  
蠣崎將監殿

右者松前三郎兵衛殿歸府付、蝦夷地御固并御取締向被仰付候、  
十二月十六日、上ノ国兩社鳥居新規御建立ニ付、入用品々并御代參等之書面

差上候、  
御名内 牧野備前守内  
鈴木紀三郎様 上田十兵衛  
下国貞太郎様 小出善助

右者新潟町奉行所出之御状、御船叶丸御米積入於当所ニ浮困ニ相成、水主  
仁八と申もの態飛脚ニ差下し、一昨夜至着付相達候間、名主九人を以御用

部家御届申上候、  
一、種市善太夫方新潟ニ而御米積入之俣浮困相成、明春二月初旬出帆ニ而罷  
下り申度、態人差下し候、尤、秋末ニ罷成候而も出船仕度心配いたし候而

罷下り申度心掛候へとも、節後レ付無拠困舟仕候趣、委細書状ニ而私共へ  
申越候処、十四日ニ至着いたし候間、昨日桜庭梅太郎方御番蠣崎四郎左衛

門殿へ御用部家ニ而申上置候、  
一、龍雲院方來正月五日法幢寺ニ而御規式之義如何相成可申哉伺具候様役僧

ニ而申参り候間、御番小林三左衛門殿申立候処、伺之上被仰聞候ニ者、御

寺焼失付無余義候間、龍雲院ニ而御寺同様御規式被為在候間、御寺住持者  
慎罷在候間、龍雲院住職ニ而仕来通被成候間、其含ニ而追而其筋へ相伺、  
無差支様取斗へ可申、尤、法源寺・壽養寺両寺者年々御寺へ罷越、御取扱  
も有之候間、是又御盃も被下候故、其節者右両寺へ同様ニ龍雲院方使差遣  
し可申候、尤、御寺ニ無之候間参り兼候様申居候半々、其俣ニ而可然哉、  
何れ兼而龍雲院ニ而其筋へ相伺候而程能取扱候様可致旨、小林三左衛門殿  
方被仰聞候間、役僧呼出ス候而右之趣委敷申談遣候、

十二月十七日、万屋専左衛門書付を以、御用御菓子之儀、是迄御用被仰付難  
有奉存候、依之願上候茂奉恐入候得共、私弟佐次郎と申者先年江戸表江為  
差登菓子製方稽古為致親類江養子差遣置、此節蔵町住居仕、菓子渡世仕罷  
在候間、御差支之御儀無御座候半々、同人江御用看板共相讓申度奉存候間、  
何卒願之通被仰付候様願書差出候間、奥印仕差上候、

一、蔵町佐次郎方以書付、前同断私方へ御用被仰付被下置候様書面差出候間、  
同様奥書いたし差上候、

十二月十八日、先日善光寺寄附金八十両江指表方相廻り候分、小林三左衛門  
殿ヨリ御預り申置候分、今日内御役所へ相納候付、右八拾両小林三左衛門  
殿御渡申上候、

一、蝦夷地善光寺普請付、当所重立候もの寄附仕候高金百五十両之内、此度  
廿兩御用達月行司西川准兵衛・岡田半兵衛両人方為相納、右廿兩小林三左  
衛門殿へ差上候、右之訳者此節金百兩善光寺ニテ入用之由、然処江江差方  
金八拾兩相廻り候分、内御役所へ相納、箱館御収納金卜操かい候由、不足  
廿兩付右之廿兩相納候様、小林三左衛門殿御達付、御用達申付取斗候、  
一、栖原屋店勤中二手代九兵衛引負之金子、先達方追々栖原主人共徳兵衛手

代弥七方願出候二者、九兵衛方方出金相成候様書面差出、段々取扱、漸々  
今日金子并諸証文九兵衛方方栖原店へ相渡、内済証文為差出事済ニ相成候、  
尤、委細者別紙栖原店方差出内済証文に有之候、

十二月廿日、栖原屋九兵衛引負一件不残済口付、北村徳兵衛煩ニ付代弥七印  
形ニ而内済証文出、御奉行所へ入御覽ニ置候、

一、御備米付前浜并在々共餅取之ものと老人四十五本と見込、老本付錢拾五  
貫<sup>ツ</sup>文ツ、可差出之分、五月場所登候上ニ而差出度趣申出候へとも、夏  
登り之節者差置と不分事故、当時下り節取立可申段、新井田周治殿方伺ノ  
上御聞濟相成、名主中林九兵衛江申達、

一、上ノ国毘沙門并八幡宮共両社江鳥居御普請被仰付替出来付、御代参之儀  
奉伺候処、正月御代参之節ニ而者如何可有之哉之旨、社人小滝伊織江相尋  
候処、正月御代参之節ニ而も可然<sup>ツ</sup>様、御答ニ罷出候、

一、上ノ国毘沙門并八幡宮鳥居開見御神樂付、左ニ御神酒三升、御洗米壹俵、  
其外品々別紙ニ、右供物之分金子壹兩壹歩ニ朱御仕切ニ被仰付候、外ニ御  
初穂金式朱被仰付候、御勘定所方相渡ス、

- 一、大枝松四本、外小松四十本 法幢寺
- 一、同四本 阿吽寺
- 一、同式本 光善寺
- 一、大枝松四本、外二小松十四本 八幡
- 一、同四本 神明宮

右之通年々相渡候趣、名主田中九八方申出、御用番へ申上候、

十二月廿二日、木村山城、社地之東畑地之内江同人家作仕度旨願書差上ル、  
一、法幢寺江是迄門松式向へ名主を以遺置候得共、来正月之儀者御墓所御盃

家前江者御年長家方松飾りいたし候間、例年法幢寺へ遣候式向へ者遣し不及、龍雲院之儀者法幢寺之代ニ御用向被仰付相勤居候付、此度門松老向へ名主を以龍雲院へ差遣し候様、新井田周治殿御達ニ付、当番名主中林九兵衛江申達候、

一、エトロフ・クナシリ両所ニ而十二月七日之御祝義有之候得共、外場所ニ無之事故、明年ヨリ御止メ被仰出候間、藤野喜兵衛・関東屋兩人江相達候、十二月廿七日、明年方御積米付、町代共一同格別骨折候間、一ヶ年ニ老度宛も御目見被仰付候様ニ仕度趣半切へ認め、町年寄四人印形無之当テ名なしニ而今日御奉行所へ伺書差上申候写左ニ、

乍恐書付を以奉伺候

一、市中町代共之儀、年来町内取締方行届、無滞相勤難有仕合奉存候、且、明年方別段御積米ニ付取立ニ相成候廉も多有之、手数も相掛り候付、格別之骨折ニも可有之与奉存候、依之奉願上候茂恐多奉存候得共、一ヶ年ニ一度成とも御目見被仰付被下置度奉願上候、右願之通被仰付被下置候半々、以来共格別之出情相勤、万端行届可申与奉存候間、御差支も無御座候半々、乍恐宜敷御沙汰被下置度、此段奉伺候、以上、

十二月廿六日

村山伝兵衛

桜庭梅太郎

張江又八

村山重左衛門

一、当正月被仰付候市中一同方日掛銭之義、追々取立、名主・町代共ニ而預り置候分不残御返ス被仰渡候、尤、別段十ヶ年ニ三万俵御備米被遊候付、日掛銭之義者御免御返し被仰付候間、委細者追而之事、

一、九兵衛方栖原屋庄兵衛江今日限り工藤庄兵衛・吉田屋善右衛門引請之分、栖原屋御役所におゐて呼出し、貳百拾兩相渡、奥印証文相返し申候、

一、市中・町代共一同此度十ヶ年御積米御積金被為遊候付、一同不容易骨折一段之事に被思召、右付、来申年方表御礼御目見老ヶ年ニ老度年始御礼斗り被仰付候間、名主へ相達、尚又、町代不残呼出し、右之趣申付候、  
一、来申年御米代江戸表へ為御登三千貳百兩有之候間、当所おゐて六月上旬ニ御下ケ被成候間、七月朔日方五日迄ニ江戸御家敷江上納いたし候様、為替之義請負人共江被仰付候間、来陽申付候積り、

一、市中一同方法幢寺普請付寄附仕度旨、昨日名主連印之書面差出置候処、当年八度々割合等差出候義有之候間、寄附金高願之内半金寄附為致可然、来春方材木五千石目御取寄之節者日雇を以取運為致候へとも、石数之材木故、殊ニ寄人足差出候義も可有之候間、相心得居、右寄附金半減ニ申付候様、蠣崎四郎左衛門殿御達、其旨名主一同江相達ス、  
一、金貳百拾五兩三歩一朱

右者法幢寺御普請付、市中一同方寄附仕度旨、持々名主五人連印之願書差出候間、奥印いたし、蠣崎四郎左衛門殿差上候、

〔奥端書〕「天保六未ノ五終五。」

〔天保七年〕

〔端書〕「天保七丙申年始り。六」

天保七丙申年日記之内  
抜書左之通

正月三日、当年始而御礼、市中町代共御扇子老箱ツ、献上、老人ツ、御年男御附添 御披露有之、名前左之通、

町代 惣社堂町三四郎、唐津内沢町宗治郎、東町庄左衛門、湯殿沢町政吉、生府町孫兵衛、泊川町利左衛門、トラメキ町長兵衛、上野町治郎吉、

中町吉兵衛、横町治郎兵衛、西館町清吉、大松前町嘉兵衛、川原町儀八、

伝治沢町甚兵衛、端立町仁右衛門、 以上十六人、

右之通無滞御礼相濟、其後村々名主代ニ出候年寄共御年長家江罷出、御年

伺申上候、

一、唐津内町丁代又蔵・枝崎町丁代藤八兩人義者今日罷出不申候旨、新井田

周治殿江書上置候、外御礼之義者是迄之通不写略、

一、市中町代御礼順之儀者町代相勤年数を以取極申候、

一、法幢寺御普請付、市中寄附仕度趣、旧冬書面差上置候、然処半減ニ被

仰付、上納方申年方亥年迄四ヶ年ニ被仰付候、

一、箱館附在々方西蝦夷地江鮮漁ニ相越船々方御城下同様早切老本付錢十五

文ツ、市中御備米付可差出様ニ申付候間、如何有之哉、此段蠣崎四郎左衛

門殿相伺候処、箱館奉行江御談の上、御沙汰可被成趣被仰候、

一、御奉行始御役所一同精勤御調付、已来勤仕帳ニ而引籠願合等相記可申旨、

取締方江被仰渡有之趣、張江又八江申談候旨申聞候、此段名主中林九兵衛

へ達ス、

一、正月三日、町代始テ御礼付、左ニ記置、

御年男 工藤八郎右衛門殿

御奉行 新井田周治殿

町年寄 桜庭梅太郎

一、箱館付在々方西蝦夷地鮮取ニ罷越候もの当所ニおゐて御判頂戴仕相越候間、早切老本付十五文ツ、御積米之廉江当所振合を以取立候而不苦趣可有之哉伺上置候処、此義者箱館表ニ而相納候へ者二重ニも可相成哉、差免し候而可然旨、今朝蠣崎四郎左衛門殿方御違有之候間、宮川半右衛門へ申達置候、

正月十四日、去去年御運上金替納、壹番・貳番・三番迄例年之通御褒美とし

て左ニ被下置候、

壹番替納 福鳴屋新右衛門

貳番 沢田屋久兵衛

三番 竹屋彦左衛門

右者御奉行所御座鋪おゐて三人之者御敷居之内江入、当番町年寄立会被下

置候、金子者兼而内御役所方請取銀包切のし水引ニ而結、

万屋専左衛門

正月十六日、金五百疋宛

竹屋彦左衛門

右者御積金掛り付、御目録被下置候、

一、旧冬被仰出候日掛錢御免之儀被仰渡之節、町々方惣代として可罷出者名

前書、名主方差出候間、蠣崎四郎左衛門殿江入御覽候処、右日掛錢之義延

々ニも相成候間、早速取斗候様、昨日茂御用之間方御沙汰有之候付、明十

七日申渡相濟候半々明後十八日方割返ス取斗可申旨被仰付候間、宮川半右

衛門江達、

村山伝兵衛

一、金貳朱 錢貳百五十文

名主田中九八

右者去年中替勤付御褒美被下置候、

一、日掛錢之儀付被仰渡之義有之、町々方五人三人ツ、惣代として都合七拾

二人江町代差添罷出候処、当年方十ヶ年御備米、五ヶ年御備金之義被仰出有之候付、右日掛銭者已來御免被仰出候旨、蠣崎四郎左衛門殿方被仰渡候、尤、昨年中市中方差出候日掛銭之義者割返ス被下候旨被仰付候、右被仰渡相濟候後、町年寄・名主共御奉行衆御詰所へ御礼申上候処、割返之節二者町年寄・名主立会銘々呼出ス、一ト廉も間違無之様取斗へ可申旨被仰付候、正月廿六日、ヒクニ二件之囚人、唐津内町弥兵衛雇船頭長之七、此外水引合之もの五人共御呼出し於白洲津輕家役人三上兵司其外江御渡、昨廿五日桜庭梅太郎、津輕家役人江届罷出候、但、正月廿二日着、弘前家中郡方調役三上兵司上下三人、横目役栗原慶助、御足輕成田久兵衛・藤川留吉・小野子之助、御同心田中金治郎・松本銀藏・安藤多治郎・坂本平太郎、右之通、上下拾老人、宿工藤忠兵衛方止宿致居候、外二御扱方四人船中二罷在候名前、三厩ノ円次郎、与三郎、伊三郎、源藏、

一、昨廿三日、津輕家中三上兵司其外止宿工藤忠兵衛宅江村山伝兵衛継片衣二而罷出候、津輕役人江見舞申聞候、

町奉行下役  
村山伝兵衛

一、タカシマ場所跡年季奉願候付、為御冥加金百両此度奉上納度趣共、西川順兵衛方願書差上候、

一、子モロ領シコタン嶋へ為心見鱒漁業之手配番家等取建漁具も差廻、追々漁事も有之候へ者多少冥加金差上度趣之願書、藤野喜兵衛方出ル、

一、日掛銭割返帳五冊御用番へ上ル、名主五人分、右日掛銭帳江添書左二、金百廿三両三分三朱ト壹貫七百八十五文 内訳、

金百廿三両三分三朱ト錢三百四十五文 加藤専右衛門持

金三拾貳両三分ト錢五十文 宮川半右衛門持  
 金廿貳両三分ト錢五百五十文 田中九八持  
 金廿四両三分ト錢七百廿文 中林九兵衛持  
 金拾九両三分二朱ト錢百廿文 野坂吉六様

右者去未年正月中被仰出候日掛銭、市中之ものヨリ相納候、今般御割返被下置、私共立会之上、逸々相渡候処、一統難有奉請取候、則御請印仕候、別帳十九添、此段奉申上候、以上、

申ノ正月廿六日

村山伝兵衛  
 桜庭梅太郎  
 張江又八  
 村山重左衛門

右之書付帳面五冊添上ル、

一、大工頭七郎兵衛・彦之丞連印書付を以、今般法幢寺御普請付、他所大工案内之者御取寄可被遊哉之旨奉承知候、依之奉願上候茂恐多奉存候得共、是迄寺社建立之節他所大工取寄、当所大工取交り普請仕候儀も御座候得共、全当所大工斗り二而普請仕候寺社も所々ニ御座候間、世話棟梁之もの江茂申談候処、此度之御普請当所大工共江被仰付被下置度奉願上候、然上者大工共晴レニも相成候間、精々入念聊手抜無之早我取候様可仕旨大工共一同奉願上候趣願書老通り、外二工数作料書老通江御普請掛り町年寄三名ニテ作料江老割増被下度旨書添、蠣崎四郎左衛門殿江差上候、

一、津輕御家来中此度工藤忠兵衛方ニ滞留中賄方等之入用出役方相払候間、書上候様被申付候付、如何仕可然哉之旨、忠兵衛伺出候間、御奉行所へ申上候処、三上兵司上下三人、栗原慶助、足輕四人、同心三人、右拾老人者是迄之通此方二而被下置候間、出役江其旨申立書出スニ不及候、尤、昨日

此方方引渡候長之七船水主五人、外ニ出役召連四人之ものは迄船中江差置候得共、昨日方忠兵衛方へ差置候由、右九人分者賄等出役江書出し不苦旨被仰付候間、其段忠兵衛へ申達候、

一、東西場所々々ケ所付幕串百本ツ、相備置候様被仰出、昨日蠣崎四郎左衛門殿方村山重左衛門へ御達御座候間、今朝御用達・請負人一同呼出し申達候、尤、本幕串ニ無之候而も宜候間、野たるき様之もの七尺程ニいたし、上江幕を引掛候処を釘ニ而も打付、下タハ土江差込候様ニけづり会所々江備置候様申達候、右御請書者追而出来次第印形為致候積り、

一、津輕家中三上兵司・栗原慶助、風順次第出帆付、桜庭梅太郎繼肩衣着用旅宿迄暇乞ニ罷出候、

正月廿八日、今日御礼後於 上御台子之間御收納出情付、御褒美被下置候旨、御月番蠣崎將監殿方被仰渡候、左之通、

御肩衣一ツ宛 村山伝兵衛・桜庭梅太郎・張江又八・村山重左衛門  
金式百疋ツ、名主加藤専右衛門・宮川半右衛門・田中九八・

中林九兵衛・野坂吉六

但、町年寄者御敷居之内迄罷出候、名主ハ御敷居之外迄罷出候、肩衣者染浅之肩衣着用致候、序ニ 内御役所へ御礼申上候、

一、津輕家中三上兵司方へ先日村山伝兵衛着届罷越候節、津輕之長之七船乗組水主五人、是迄旅人宿江御預ケ中之旅籠其外入用品代相払申度候間、書付いたし呉候様申聞候付、御奉行所御吟味役所江申上候処、右賄等者此方ニ而被下候間、其段津輕家江挨拶ニ及候様被仰付候間、今日村山伝兵衛暇乞ながら罷越、前段之挨拶ニ及候積り、

二月二日、クナシリ・リイシリ・レフンシリ三ヶ所当年限季明付、明酉年方

向卯年迄引統七ヶ年御請負仕度、尤、クナシリ者元御運上金ニテ、外式ヶ所之義者近年相応之漁事仕候間、此度限り金百兩為御冥加奉上納度趣願書差出候間、奥印いたし、新井田周治殿江差上候、尤、藤野喜兵衛方願出候、一、フルウ御場所引統請負被仰付度旨願書、尤、此度限り金五拾兩為御冥加差上度旨共願書差上候、

一、旧冬市中御備米仕法申上候節為御称名主五人江被下置候御紋付麻上下御注文ニ相成候処、出来付御下ケ相成候間、内御役所へ請取二名主先ニ遣し可申様、蠣崎四郎左衛門殿方御達、

一、高嶋場所之義、明酉年方卯年迄七ヶ年請負被仰付候付、為御冥加金百兩此度限り上納仕度旨願之通、同様西川准兵衛江被仰付候、秋味之儀者五百石以上積取候節百石付金廿兩ツ、切困ニ相成候節、右廿兩之四ツ割三ツ分上納可仕候、右請書新井田周治殿被仰渡候、

一、マシケ并浜マシケ兩御場所、是迄之御運上金を以引統請負被仰付度旨、伊達林右衛門願上候、尤、為御冥加金式百兩献上仕候趣共願書差上候、

二月六日、リイシリ・レフンシリ・クナシリ年限季明付、跡年季願之通り被仰付、尤、御冥加金百兩之義者法幢寺御普請掛り被仰付格別之義ニ候間、右献上不及、其儀共工藤喜兵衛へ相達、

一、市中之もの鮒漁業御判願之儀、是者問屋取次ニ而沖ノ口へ直願候へとも、当年方沖ノ口江名主方之願書相認メ問屋へ相廻ス、夫方沖ノ口へ相願候積り、右者市中備米付鮒百東方三束ツ、取立候義者誰々鮒取候哉名主ニ而不存候而者不相成候間、御判願名主へ申出、夫方沖ノ口願候様仕度相伺候処、伺之通御聞濟被仰付候、蠣崎四郎左衛門殿方御達、

一、異船イヘネ船并怪敷船見懸候ハ、早速注進可申上趣、東地請負切替之節請書

へケ條書有之候得共、西地之方請書ニ是迄無之候、然処、此度高嶋場所西川准兵衛請負切替付、請書江右異国船等之義已來共書入可申候、尚又、松明・草鞋・幕串之義も一々ケ條書込可申旨、蠣崎四郎左衛門殿方御達、

一、薪切出し鯀取之もの猥り切取り、別而立山畑ケ垣根并小家等伐り取儀不相成、平山ノ芝薪斗り伐可申旨、是も名主一同江相達、吟味役所江伺濟、

一、橋船江仮みよし付鯀取船橋舟之分仮みよし無之候へ者取上ケ可申候段、問屋頭取共へ相達、

一、家藏切組他所へ相願候分材木屋ニ而も取扱ニ仕度旨、兼而材木屋仲間方願出候付相伺候処、御開濟相成候付、名主一同へ相達、尤、船上り問屋方沖ノ口御改相濟候半々其後者是迄材木扱之通問屋ニ而口錢二分材木屋ニ而扱候者之方ニ而口錢二分請取へく事、

二月九日、東西在々鯀三分方取立之義伺之上、在々之分在方掛りニ而取立可申候、取立方之振合者御城下同様ニ可致候、右之趣、蠣崎四郎左衛門殿方御達、在方掛り石黒善吉へ相達、

〔翻刻箇所の原文記載〕

本方候より右名面より御達  
 一、鯀見廻り之儀ニ相達  
 大松前町 枝ヶ崎町 丁代嘉兵衛・治郎兵衛  
 泊川町 寅向町 丁代利左衛門・吉兵衛・庄左衛門  
 唐津内町 丁代又藏・政吉  
 博知石町・生府町・惣社堂町 丁代宗兵衛・宗治郎・仁右衛門・三四郎  
 右名面之ものを以、浜表見廻取立可致候事、  
 一、津輕家中三上兵司・栗原慶助、其外附添之もの昨朝出帆、囚人之儀者先達而御引渡之後は迄牢内拝借入置候処、昨朝引渡同船ニ而出帆致候、町年寄之内、村山伝兵衛継肩衣着用旅宿迄罷越候、  
 一、フルウ場所願之通跡年季被仰付候、尤、場所方江差表江中渡いたし候様無急度相聞得候間、万一已來右様之儀有之候而者仮令年限中ニ而も御場所御引上ケ被仰付候趣、蠣崎四郎左衛門殿方被仰渡候、福嶋屋新右衛門、宿大津屋武左衛門罷出候、  
 一、マシケ并浜マシケ両場所跡年季并御冥加金貳百兩とも願之通伊達林右衛門江被仰付候、  
 一、法幢寺御再建付、御当所之大工斗りニ而御普請引受替出来仕度旨、棟梁七郎兵衛・彦之丞連名ニ而兼而願書差上候処、一昨日御開濟相成候間、昨夕藤野喜兵衛宅ニテ棟梁兩人、外二世話役之者呼寄、梅太郎・重左衛門・喜兵衛列座ニ而申聞候、尤、追而請書印形為致候積り、  
 二月十一日、今日書付を以相窺候ケ條、則左ニ、  
 一、鯀取御判願之儀者已來名主へ願出候様可致候、其後問屋方沖ノ口御役所へ可願出事、  
 一、兼而被仰出候通、橋舟ニ而鯀取候半々仮みよし付可申候、若仮みよ



し無之橋舟者網船共取上ケ可申候、猶又、鯉取御判所持無之候者八同  
様網船取上ケ可申事、

一、市中備米付鯉百束二三束ツ、取上ケニ相成候付、右取調二名主并町  
代相廻候間、其時之直段を以代金ニ而町御役所江持參相納可申事、

一、材木屋之もの人数御定被下置候付、類商売之もの堅く不相成并挽物  
等之儀も材木屋扱之事ニ可有之候、切組家蔵とも同様之事ニ候、

一、附船人数御取極被仰付候付、類商売堅く不相成候事、

申二月

右之通市中江御触出ス被成下度旨、先番重左衛門江名主申出候段申継有  
之候間、新井田周治殿江申上候処、御聞届相成候、尤、船手之儀も有之候  
間、沖ノ口下代江為心得之申遣候様被仰付候、

二月十二日、旅人宿甚太郎義、御取調之儀有之御尋被遊候処、申立方粗語い  
たし候付揚家被仰付候間、旅人扱方之義者旅人宿喜右衛門へ被仰付候間、  
其旨申達候様、工藤茂五郎殿御達付、旅人宿喜右衛門申聞候、猶又、為心  
之榮太郎へも申聞候、

二月十三日、当九日夜九ツ時頃、乙部村初鯉少々郡来候付、旧例の通、上ノ  
国方差添忠四郎鯉五十疋入四箱江差方御印鑑ニテ昨夕方方當着いたし候間、  
御小書院江五十疋入老箱、外ニ御家老中・御用人中・町御奉行衆・江差奉  
行衆・町御吟味役衆老軒ツ、町方を以相廻候、尤、是迄無之儀者候へとも、  
御勘定所御例頭御目付吟味役沖ノ口藤田駒木根一席へ人数丈ケツ、町方ニ  
為持、初鯉故新井田周治殿方被仰付相廻候、尤、逸々名主之方ニ扣有之候  
事、

二月十四日、昨夜中、白神村横澗と申所ニテ少々初鯉郡来候付、今朝注進有

之候、

二月十六日、御手元金は迄三拾兩ニ付御益金老歩ツ、上納仕来候得共、内御  
役所御積金者金廿五兩ニ付老歩ツ、上納為致相混紛敷候間、以来者御手元  
金之義者金廿五兩老分ニ上納為致候様、御勘定奉行岡本時蔵殿方椽庭梅太  
郎へ御達有之候、

一、年々蝦夷地東西勤番中通行之節人馬賃錢相払致通行仕来候得共、当年方  
勤番中江右駄賃御渡相成不申候間、其場所ニおゐて不相払通行いたし候条  
被仰出候間、請負人共江申達、兼而場所支配人江為心得之申遣置候様可申  
付旨、昨日蠣崎四郎左衛門殿御達有之、尚又、右駄賃の義者追而賄其外売  
上物代等書上候節同様駄賃も書上御払可請之旨共御達有之候間、請負人一  
同手代呼出ス申付ル、尤、駄賃帳者勤番中持參為相記候義者可心得旨共相  
達、

二月十九日、江差在休木戸・五勝手村迄当十一日夜四ツ時鯉群集候趣相応に  
網掛り有之由、吉村彦兵衛・村上弥惣兵衛方至来、御役人様方へ御配り鯉  
十七箇添御印鑑付継来候、左ニ、御家老様六人江五十疋入老箱ツ、町御  
奉行御兩人同老箱ツ、江差御奉行御兩人右同断、町御吟味役四人江右同  
断、十四箇、町年寄五十疋入式箇、名主老箇、

二月廿一日、御幕申之儀、老ヶ場所百本ツ、相備置可申義兼而被仰付候得共、  
今般御沙汰直りニ相成、松明・草鞋相備候ヶ所割振可相廻趣被仰付候、尤、  
右之御備向別紙心得向之御書取有之、則、御用達・請負人江も相渡為相心  
得申候、老ヶ所者百本、二ヶ所之場所者五拾本ツ、三ヶ所者三拾三本程  
ツ、割振可申候、若五ヶ所七ヶ所ヶ所多之場所者老ヶ所ニ廿五本ツ、可相  
廻置候趣共申付候、

一、長崎俵物煎海鼠・白干鮑之儀、近来出方相減候付、拔荷蜜壳等無之出進候様、去未十二月廿二日於 江戸表御勝手御掛り 御老中様方御書付を以御達之趣、今日御用達・請負人・問屋始、博知石町、生府町、惣社堂町、伝治沢町、寅向町右町代并其外御当所付村々名主御呼出スの上、於 御座鋪新井田周治殿ヨリ委細被仰渡候、猶又、右付御請書御統渡之上、一同印形被仰付、右書面類長崎掛り村山伝兵衛方ニ留置候、

一、宮ノ歌村字ヲチコ沢与申所前浜今朝六ツ時頃緋薄群来之趣住進<sup>庄</sup>二候、白府村字ヲ、ミ崎与申所前浜方ヲチコ沢前浜迄厚群来之模様二候由申来候、尤、此間中々今以時化廻リニ付兩村共迷惑の通り取揚兼候趣御座候、

一、市中備米御藏四間十間之土藏老ヶ所、四間八間之板藏老ヶ所、当年二ヶ所相建候付、右土藏之屋根瓦秋田路二而瓦師有之出来候間、御注文被仰付度旨、横町紀の国屋半左衛門兼而願出候付、直段積り書上候所左三、

四間十間之土藏老ヶ所へ但、片屋根分、片間六丈四尺、梁間老丈五尺五分、

兩屋根ニテ凡五十三坪八分三厘、此処江ひら瓦・化粧かわら逸々別帳ニ上・中・下三段直積り、

上ノ百九拾四貫六百三十老文 此金廿八兩貳分老朱ト錢四百六文

中ノ百六拾三貫七拾六文 此金廿四兩老朱ト錢百三十五文

下ノ百三拾貫四百拾六文 此金拾九兩二朱ト錢三百六十六文

右積書を以御番新井田周治殿江相窺候処、蠣崎四郎左衛門殿与御談之上ニ而中直段之瓦可然旨被仰付候間、同役談之上、名主田中九八立会之上、紀伊国屋半左衛門呼出ス申渡候、追而請書差出候積り、尤、右者至着之直段、海上者向持ニ御座候、

一、右御備米之藏地最早雪消ニ相成候間、追々地扱仕度候付、御用透之節地

所御見分御取究被下置度趣申上置候、

二月廿四日、今夜中寅向町沖合少々緋群集候、

一、前浜并在々共緋漁御扶持家ニテ致緋取候分、御百姓同様沖ノ口方御判取之、其上市中御備米付百束付三束ツ、取立の分是も無相違可差出分、席々江被仰付其筋へ御達有之、名主共相心得漁見廻り、右三分方之緋役取建可申趣、新井田周治殿ヨリ御達付、名主一同江相達候、

二月廿六日、昨日方今朝迄之内、福嶋村方白神迄相応之緋群来申候、

一、ヒクニ一件付、請負人沢田屋久兵衛儀者改慎被仰渡候、

一、前同断之義付、唐津内町弥兵衛義家屋敷御引上ケ、当人義者松前構被仰付候、尤、家屋敷之義者改而母江被下置候段被仰付候、

一、馬形町角兵衛儀、弥兵衛親るいニ而取斗方不宜候間、風呂株家屋敷御引上ケ松前御構被仰渡候、尤、右風呂家株家屋敷之儀者改而妻子江被下置候旨仰渡候、

一、ヒクニニ而取調子候古組御足輕松江五郎右衛門不行届之儀付、新組御足輕へ御操下ケ被仰付候、悴五郎八儀も古組ニテ相勤居候得共、是又同様御操下ケ被仰付候、右之趣、御目附御立会、御用番蠣崎四郎左衛門殿ヨリ被仰渡候、尤、御一同出席、町年寄・名主儀茂罷出申候、

二月廿七日、昨夜中荒谷村辺緋群来申候、

一、藤野喜兵衛御呼出し、蠣崎四郎左衛門殿方御直ニ御申渡被仰付候趣、左之通り子モ口場所出産鮭塩引之儀義者献上并別段御用其外御配り等之御入用有之候ニ付、是迄同所方江戸表へ直廻老番方五番迄二船々塩鮭式百八十尺宛積入候内、八十尺者箱入いたし為差登来候処、右二而者員数不相揃江戸表おゐて献上御差支相成候間、前書式百八拾尺之内、献上并別段御用ニ

而差上候百四拾尺者箱入いたし、同断御扣百四拾尺者筵二而箇立、外二御配等之分六百尺、都合八百八拾尺宛以来直艫之船々江老艘毎二積入為差登可申旨、今般改而被仰出候間、此旨相達候、

三月二日、子モロ方江戸表江献上鮭為差登候分箱入候得共御扣百四拾尺者筵包仕候而為差登候趣、兼而申付候、然処、右筵包二而者塩も流れ毛色も損じ候間、船々之内積込候而者如何可有之哉之旨藤野喜兵衛方申出候、然処、右筵包之義者江戸表方御注文二候間、矢張御扣鮭者筵包可為差登様、藤野江可申付趣、新井田周治殿方御達付、則藤野喜兵衛手代時四郎罷出候付、申付候、

三月四日、土用入当所前浜群来鮭之儀、二月朔日ひかん入候処、其後鮭取共方御祈禱いたし神圖候得共、右日取二も群来模様無之而已今日土用入相成候間、此上者何卒御憐愍を以、御上様方七社江御祈禱被仰付被下置度旨、鮭取方向々名主へ願出候趣申立候間、新井田周治殿江申上候処、早速御披露被成下、御聞届相成候、依之社頭白鳥形部御呼出し之上、右之趣御吟味役新井田嘉藤太殿被仰渡候、御初穂之儀者内御役所へ御渡之積り、

一、鮭漁中外漁決して不相成旨兼而御触出し御座候処、此節生魚も相見得候間、若心得違二而外漁致候もの有之候而者不相成候間、猶又、敵敷申付候様被仰付候付、名主一同江申聞候、鮭大漁御祈禱之義者八幡宮江七社勧請之上、社家集り祈禱修行致積り、

一、小松前沖ノ口御役所下夕有之同町番太郎屋家之儀御用有之為取払候積り兼々被仰出御座候付、右近辺ニ湯殿沢町番太郎屋敷与申もの前々方水帳江も相認メ有之候間、湯殿沢越前屋政吉南角御用地江同町番太郎相移、小松前浜ニ而湯殿沢番太郎立退候跡江小松前番太郎差置候様仕度、名主宮川半

右衛門申出候間、新井田周治殿江御窺申上候処、差支も有之間敷候旨被仰付候付、書面を以申上候様半右衛門江達置候、

一、小松前町番家之義、是迄沖ノ口御役所前二有之候得共、同所之儀先度伊達林右衛門方拝借願も御聞濟相成居候間、右番家者小松前本間屋辰三郎脇通り浜江下り小路入口之処馬行側迄三間も有之手広候間、右之処番家引移可然哉之旨相伺候処、御差支二も相成間敷旨被仰聞候、是又書面二而申上候様、名主半右衛門江申聞候、

三月五日、前浜初鮭今暁八半時過方群来、明方方網入いたし候由、寅向沖方惣社堂沖迄一円、尤、薄群来、

一、荒谷村沖今暮七ツ時過方鮭群来候段注進有之候、

一、群来鮭御見分として御奉行所御吟味役衆、町年寄、名主、書役、町方共罷出候、右御序ニ御備米之御蔵所御見分御座候、尤、枝ヶ崎町畑屋七左衛門下夕浜辺御空地江四間二十間之土蔵老棟相建候積り、生府町浜側西ノ方町はつれ江四間八間之板蔵老棟相建候積り、御取極メ相成候、

一、山田屋文右衛門書付を以、ユウフツ御場所季明付、御冥加として金百両上納仕候間、跡年季被仰付度旨願書差上候、

三月六日、阿吽寺書付を以、天神之本社五尺四方に拝殿式間三間、右本尊天神之像并本社拝殿共零落いたし候付、御普請御願申度候得共、此度限り自分入用ニ而修覆仕度、尤、是迄者証屋根御座候得共、今度瓦屋根ニ仕度旨願書兼而差出ス有之、昨日御奉行所へ差上候、

一、阿吽寺書付を以、同寺持来り之半鐘復候間、番響不宜勤行之用へ二も相成兼、随而同寺大鐘先住快盛代、信広公御奥様為、御普提御建立之旨記縁ニ茂御座候得共、往古焼失仕候而其後大鐘無御座候、依之當時看主寛山

志願付、右大鐘再建仕度候間、願之通り被仰付度旨、兼而願書差上候処、  
 先年之儀御奉行所方御尋有之、阿吶寺方記縁等書抜入御覽候得共難相分り  
 儀二付、右願書御取用被成かたく旨御奉行所限り御下ケ相成候間、同寺役  
 僧江右之旨申聞、願書・記縁書抜老冊、外書面半切江相認メ候分老通不殘  
 相下ケ候、

三月七日、市中備米付、市中并在々共取立方金子之儀者年々以来共三月十五  
 日限り五月十五日限り而半金ツ、為相納候方可然旨、兼而名主一同申談候  
 処、右二而可有之趣付、今日御奉行御揃之上、此段御伺申上候所、夫二而  
 宜旨被仰聞候間、此段名主一同へも相達申候、

一、藤野喜兵衛手船常昌丸、昨秋敦賀江漂着致候節、取扱申候船道役平井伊  
 兵衛・毛利右衛門右兩人之義者御当所二而問屋頭取様之由、附添才件久左  
 衛門・小太夫・治兵衛二有之候旨、兼而御尋付、同人方此旨申立候間、  
 蠣崎四郎左衛門殿書面二而申上候、

一、市中御備米当年三千俵買入分、追々買上ケ之度毎何米何程入申義其時々  
 御用ノ間江申上候様、今朝蠣崎四郎左衛門殿方御達有之、同勤一同江達ス、  
 一、小松前町番太郎、同町本間屋辰三郎東川岸相建候事、

一、沖ノ口下夕二是迄住居致居湯殿沢町番太郎義、同町丁代政吉南隣角へ引  
 移候事、

一、同断小松前町番太郎家内住居者湯殿沢町番太郎引移候跡江住居候事、  
 右三ヶ條、先番宮川半右衛門方書面差上置候処、御聞濟相成候旨御達、

一、松前三郎兵衛様無程御渡り相成候節ハ御休所問屋会所御借上ケ之趣被仰  
 出候間、工藤忠兵衛手代呼出ス申付置候、尤、御通筋之義者福嶋屋新右衛  
 門小路方御馬出ス、夫方赤御門此節御普請付御櫓下夕坂御門方御入之積り、

其節御通筋除掃方之義、宮川半右衛門江申聞置候、

一、富永八十八・柴田兵右衛門兩人之儀、松前三郎兵衛様近日御渡り之節  
 引船掛り被仰付候趣届出、明日蠣崎四郎左衛門殿申上候積り、

一、名主・町代共一同方前浜初鯉群来候後、鯉并小魚るい沢山二見得候へと  
 も兼テ鯉漁業中外漁事不相成旨被仰出奉畏候、随而奉願上候茂奉恐入候得  
 共、近年米并諸品高直付小前之もの共難流仕候間、ほつけ釣り配繩御免被  
 仰付被下置度、外漁之義者是迄之通り堅相守可申、何卒願之通り被仰付被  
 下置候様願上候趣願書江奥印いたし、蠣崎四郎左衛門殿へ差上候、

一、ほつけ立釣り配繩之儀、市中端々漁師共相願候付、名主・町代方願書出  
 候間、御聞濟相成候段御用番方御達付、則名主一同江相達、鯉見掛り石黒  
 善吉へも相達、

一、小松前番太郎儀、居小家沖ノ口浜手二住居罷在候処、

御上り場相成候付見苦敷取扱被仰付候付、是迄湯殿沢町番太郎へかし置御  
 空地拝借之処へ引移候積り、依居小家早速取扱可申之処、鯉時分二而人も  
 無之候付、五月迄御差延之義奉願上候処、願之通御聞濟被仰付候、則宮川  
 半右衛門へ相達、

三月十七日、前浜鯉漁無之付、生府前浜辺仮家出来、蛭子大明神勸請いたし、  
 七社之社人相招御神樂仕、右模様ニ寄弥前浜漁事無之候ハ、西在江追鯉二  
 相廻り候ものも可有之、尚又、外漁事も御免願仕度、鯉取一同願出候段、  
 名主方申出候、尤、御初穂之義者御用達・請負人・問屋・小宿一同方差出  
 呉候積り、依之御奉行所へも御届申上候、

一、光善寺書付を以、本寺京都知恩院開山勢欽源智上人六百回忌大法会付、  
 今般書付を以申来、為報恩同寺始檀中方不限多少香料差送り申度、依之先

例二者無之、殊御時節柄願上候茂恐入奉存候得共、尊靈様方御回向御香

料為聊共御施物御寄附被仰付度旨願書差上置候処、先例無之事故難被仰付、願書御下ケ相成候段御達付、同寺役僧へ申達、願書相下ケ候、

三月十九日、枝ヶ崎町畑屋七左衛門、工藤忠兵衛下夕浜地所江追々土蔵三ヶ所相建申度、御用達・請負人一同申談之上、蠣崎四郎左衛門殿江相同候処、其積二而宜候得共、半二郎拜借地番太郎地二相成居候所者追々取払候様に不致候而者不宜候間、此旨相心得取斗候様被仰聞候、

一、法花寺境内之内、西ノ方町通り空地相成居候地所凡南北五間表口也、裏行南方二而東西四間半凡同北之方ニテ六間半程、無念流一同方自分限り持寄を以其地所へ稽古場相建申度付願出候旨、四郎左衛門殿方御断付、同寺へ申談候処、御用ニも御座候間、無賃ニ而御用達可申候、尤、品ニ寄追而替地申上候義も有之候半々、其砌者宜奉願上候段、寺并且中惣代三国屋治郎兵衛申出候間、蠣崎四郎左衛門殿へ申上置候、

一、市中備米十間二四間之土蔵之内、積下り船昨夜着舟、則木品之内、三間半斗へ巾六寸、角老尺二本、屋根板へ巾九寸、厚サ一寸三分、三百五十枚、登り木式間ノ八寸四十八本、桁二間ノ七寸廿本、右宿利兵衛、十三ノ福松乘二而参り候間、沖ノ口江御廻ス申立之上遣候、

三月廿二日、生府御備蔵建所儀絵図、今朝蠣崎四郎左衛門殿差上置候、一、昨日前書之通御聞濟相成、尤、板蔵之ニも候間、くれ屋根いたし、早速相建候様、蠣崎四郎左衛門殿御達、同勤中へ通達いたし置候、一、市中小前之もの一同為凌鯉始納中ニ御座候へとも、此節鯉、ほつけ之類沢山ニ相見得候間、さし綱并やす入御免被仰付度旨、町代・名主共方書面差出候間、奥印いたし、小林三左衛門殿へ差上候、尤、御用番蠣崎四郎左

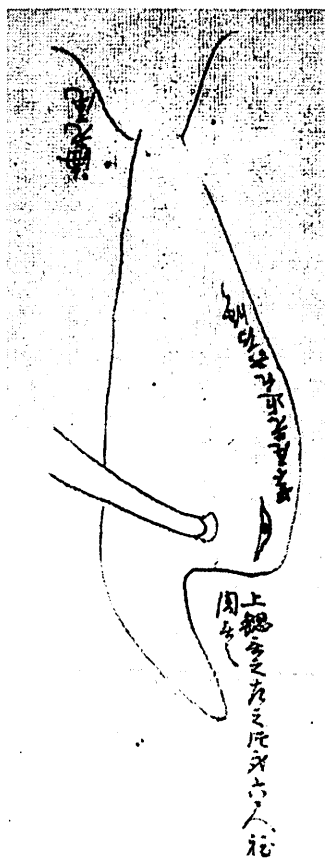
衛門殿今朝 御代香二而御用部家相詰居候間、御悲番三左衛門殿へ差上候、

一、白山明神の御神体修覆并遷宮供料共、此度限り佐藤加茂左右衛門殿被致寄附度趣、尤、御神事之節者 御代参被仰付被下置度趣共、木村山城方願書差上候、尚又、白山社は迄度々修覆等有之候而御代参并供料等被下置旧記之写老冊差上候、

一、今井八九郎并木村兼太郎、東地アツケシ嶋々、子モロ嶋々、クナシリ迄図取御用付御印鑑願出、則相渡ス、

三月廿五日、清部村小浜と申所へ六尋余り之鯨寄り候趣住進有之、在方掛り田中半右衛門出役内見分致候、同廿六日、見分桜庭梅太郎被仰付候、尤、見分相濟候半々鯨者同村へ被下候趣共被仰付候、

〔左図有〕



一、附舟世話方

古畑屋伝十郎  
能登屋長十郎

一、茶屋世話方

玉川屋惣太郎  
菱屋平左衛門

右伺之上、御聞濟相成候、尤、御用番小林三左衛門殿、蠣崎四郎左衛門殿御烈座二而、御奉行限り御聞濟被仰付候、則双方呼出ス、尤、月行司老人ツ、相添候、仲間取締堅相守りへく様、名主田中九八・中林九兵衛立会二而被仰渡候、

一、箱館在富川村名主多右衛門印鑑式枚、立石野御番所・根森御番所兩方へ可遣旨、箱館御奉行小林三左衛門殿より御渡付、在方掛り石黒善吉江相渡候、立石野行者別段同人江相願候、

一、場所々鱒場名代、海鼠引名代、雜魚名代、其外とも名代可有之哉、凡何百石位の船相立来候哉、小林三左衛門殿方御尋付、御用達并請負人一同江申付書上可仕儀申付候、尤、何百石船の立方、是ハ古来方其名代江船都合次第大小之船相立罷在候趣申上置候、

一、白山明神修葺并供料共願之通心願の者へ被仰付、尚又、御代參の義も願の通被仰付候、

一、桜庭梅太郎昨日清部村へ罷越見分致候鯨之儀、今日見分書差上左二、

見分書

西在清部村字小浜と申所へ寄鯨有之御訴申上候付、私見分被仰付相越見分仕候処、六尋余之鯨二而渚近く流居候を見当り、同村御百姓并御当所方追鯨参居候馬形東中町源藏、神明町万右衛門始鯨取雇之もの共船を乗出ス加勢いたし引寄候趣二御座候、依之右鯨同村江被下置候旨申達候処、一同難有仕合奉存候段申出候、則別紙御請書差上候間、鯨の魚絵図共相添、此段奉申上候、

申三月廿六日

桜庭梅太郎

右見分書江清部村方之訴書并御請書、鯨絵図とも相添、御番小林三左衛門

殿差上候、

一、御船叶丸、昨年越後新潟港二而造船出来新造相成、当月廿五日昼九ツ時出帆、昨廿七日暮七ツ時過に無事着いたし候間、則御番小林三左衛門殿申上候、積入物越後米千俵程、

但、元升四斗三升入候得共、時節後レ相成川浮困相成、当春迄繋居候間、格別欠米相立候様子之旨善太夫申出候、尤、天野米と申候よし、忒千俵買入、

右之通、今朝御船頭善太夫届出候間、申上置候、  
一、御船叶丸、今度 松前三郎兵衛様御迎二三厩江出帆被仰付候間、御船頭善太夫江申達候、尤、明廿九日方風待ニ申渡候、新造二而罷下り候故、間尺御改者三厩方帰帆之上被仰付候積り、

一、同船江注文いたし当御役所御收納金入置候御筆<sup>カシ</sup>一押、御金箱四ツ、御奉行所御泊替り之節御夜具入之長持耆押、越後新潟方此度積下り、

四月二日、鯨并鱒網、鮑突迄漁事仕度旨、町代一同・名主一同方御免被仰付度旨、尤、鯨取外漁師共一同之願付奥印いたし、蠣崎四郎左衛門殿江差上候、

一、炭薪改備米江役金組入候二付、在方二而鯨役も相改取立候間、同様二被仰付度段御沙汰被下置度旨申上候、

四月五日、法幢寺御普請付、市中方寄附仕度旨兼而御聞濟相成候分、四ヶ年割いたし、老ヶ年分来五月中旬方六月中旬迄不残為相納候様、蠣崎四郎左衛門殿方村山重左衛門江御達、其旨名主田中九八江申聞置候、

一、阿吽寺御寄附米之内、廿俵前拜借仕度旨書付を以先番二願上候処、此節米直段格別之高直ニも無之由、尚又、追々下り船有之入米も可有之候間、

手限ニ而工夫いたし可然旨、蝸 四郎左衛門殿ヨリ書面御下ケ付役僧呼出し相下ケ候、

一、小松前之番家、先日伺済相成、川岸本間屋辰三郎東角へ為引移候処、小路巾余り手狭ニ相成、非常之節者一同迷惑ニも相成可申、尚又、見付不宜候付、浜通蔵所斗りニ而冬分方春先迄者甚不用心候間、新橋通り小松前町浜西川准兵衛蔵所ノ西江又候為引移度旨、名主宮川半右衛門方龜絵図添書面差出候間、奥印いたし、蝸 四郎左衛門殿へ差上候、

一、法幢寺方焼木九本伐取、当時宗円寺江住居致居候へとも手狭付、継足普請ニ相用申度旨、願之通被仰付、其旨相達

一、市中御積米付炭薪方取立之分、石黒善吉江炭薪見廻付、伺之上、同人江申談遣候、尤、是迄取立御役通可仕候外ニ焚用与名付過分之薪等切出ス有之候分者追而御評儀之上、御沙汰可被下旨御達有之、

一、御用番小林三左衛門殿方御達、御船叶丸新造之年柄故当老ヶ年者御役所持ニ可被成、右付、三厩方帰帆次第秋味前夏船兩度も西地之内江廻ス方請負人可申談旨、尤、其場所柄ニ寄迷惑不致様相談可致候趣とも御申聞候、

四月十日、御積米蔵御普請付、椀百三十坪分箱館町年寄江願遣し、則連名之書状差出ス、いりこ之上乗高田弁蔵江相渡候、

一、大白山善光寺普請付、金四百兩之内金百兩者從 御上様方御寄附、殘金三百兩之内、金百五十兩者御城下持金八拾兩、江指持金七拾兩者箱館持都合三百兩寄附、去未年閏七月取究メ書上候内、旧冬江差の分金八拾兩に当所の内廿兩、都合金百兩相渡候処、尚又、当夏金百兩善光寺へ相渡、殘金百兩者普請替出来之上相渡候積り候間、当夏相渡候分百兩者当所方為差出候様仕度旨、小林三左衛門殿方御談御座候、尤、百兩出兼候半々可然割

合いたし為差出候様被仰付候間、同役へ通達いたし候、

一、当御役所堺岸江樹木植付可申旨、兼而御奉行所方被仰付御座候間、張江又八立山方老丈余り松相運、今日方植付候、仍御奉行所へ申上候、

四月十二日、当御役所御囲内江松ノ木植付、是ハ張江又八建山方相運申候事故、御代錢者戴不申候得共、右松十五本植付老本付扣之ため早切三本ツ、結付、都合早切四十五本并繩とも買上候分代錢御払ニ相成候様、御番崎四郎左衛門殿江申上候処、除金方御払候様被仰付候間、御吟味役工藤茂五郎殿江も申上置候、追而早切繩代とも書上候半々

〔端書〕「天保七申年七」

〔端書〕「天保七申年八」

除金方相払候事、

一、御船叶丸、当年西地之内江乘廻方請負人之内江申談候様、兼而先番之節被仰付御座候ニ付、今日藤野喜兵衛・伊達屋庄兵衛・栖原屋庄兵衛右三人相招申談候処、叶丸三厩方帰帆次第老番二者北蝦夷地、二番二者ソウヤ・リイシリ之内相廻申度取極候間、其段崎崎四郎左衛門殿江村山重左衛門罷出申上候、

一、炭屋八治郎江尾山太左衛門殿方金談懸合一件、尾山方願出に相成、村山重左衛門扱ニ而内談いたし、依之炭屋老母追々養子相究メ候節相続金百兩、昨日岡田半兵衛・宮川増蔵両家江預ケ証文連印ニ而一紙いたし取之、炭屋祖母江重左衛門方直々相渡ス、尤、入用之節者何時ニ而も年中老割之利足差加へ相渡積り証札ニ有之候、

一、炭屋一件、江州之民助欠落之以前取扱候帳面類左之通、〈長帳〉大福帳 老、〈同〉万覚帳老、〈同〉当座帳老、〈長帳〉書出帳老、〈切帳〉大宝

惠老、見録帳老、人馬駄賃帳老、外ニ仕切帳二、京都（高宮屋出・山崎屋出）、都合帳面九冊、

右之通中林九兵衛取調差出ス、九冊共繩からけいたし、御土蔵江入置候様、村山重左衛門方九兵衛へ申聞候、

一、大白山善光寺普請付、寄附金当所金百五十兩之内、旧冬金廿兩小林三左衛門殿相納、残百三十拾金之内、当年五月金六十五兩相納候様可仕旨、同役談之上、今朝小林三左衛門殿江申上候、尤、右之趣委細書付いたし、御用達□・請負人○行司、□西川准兵衛・岡田半兵衛、○万屋専左衛門・関東屋喜四郎、右四軒江談置、来五月六十五兩之分、御用達・請負人方差出候積り、

一、御船叶丸、三厩方焔帆次第、壹番者北蝦夷地、貳番者ソウヤ・リイシリ之内相廻候様昨日申上候処、御用之間江被仰上、何れも手船教之家柄故迷惑ニ可存候間、御船廻方之義者御免被仰付候旨御達有之、則藤野喜兵衛・伊達屋庄兵衛・栖原屋庄兵衛右三人呼寄申達候、

四月十五日、昨日蠣崎民部殿、松前三郎兵衛様共無滞御渡着、尤、上下着用桜庭梅太郎、名主半右衛門・九八、右三人者

松前三郎兵衛様へ御出迎罷出候、外民部様方へ一同罷出候、  
一、西蝦夷地海鼠引御免稼方人数、左之通、

但、御旧領方御料引継如此御座候、スツ、二人、ヲタスツ二人、イソヤ二人、フルウ二人、シヤコタン二人、ヒクニ二人、フルヒラ二人、アツタ二人、上下ヨイチ三人、イワナイ五人、ヲタルナイ五人、シヤリ五人、ル、モツヘイ・トマ、イニ而拾五人、ソウヤ・モンヘツニ而廿人、北蝦夷地拾五人、

百廿人

右之通御改銭免除、其余稼方差遣候節者役銭取立申候、以上、

申四月

右鼠半切紙江相認め、蠣崎四郎左衛門殿江差出候、

一、海鼠引人数百廿人分積米付老方三朱ツ、取立候分、右者旧来方御役迄差免有之候間、此分も差免遣し候様、三左衛門殿方御達付、追而銘々江下ケ遣し候事、

一、蠣崎民部殿御用付江戸表江出役被仰付、来月四日出立の旨、小林三左衛門殿御達、藤田陸郎殿同断、

一、御紋付黒絹袷御片衣四扇、右者旧冬御収納取立出精二付、村山伝兵衛、桜庭梅太郎、張江又八、村山重左衛門四人拜領被仰付候分、此度御下ケ相成候、

一、市中御備米の分、板蔵四間八間いたし当夏老棟切組申遣度、蠣崎四郎左衛門殿江申上候、御聞濟、尤、地所の義ハ何れ生府町之内相建申度候二付、追而図書を以申上候積り、依之右板蔵津軽十三ノ長七江切組申付候、来六月中、七月上旬迄に至着いたし候様申渡候、

四月廿六日、根森村沢おるて目谷観平召使居候下及部惣太義、当二月鯨漁業中狐打候二付、御城下并同村御構被仰渡候、

一、名主五人連名書付を以、法幢寺御普請付五人ニ而金千疋寄附仕度旨願書差出候間、奥書いたし、小林三左衛門殿へ差上候、尤、藤野喜兵衛も奥印いたし、

一、茂草村百姓辰五郎倅龜治郎、同村沖合ニ而臘臍躰拾ひ取候間差出候付、金三百疋御目録被下候趣被仰出候、右金子内御役所方請取可申様、小林三



左衛門殿御達、則請取、在方石黒善吉相渡ス、

五月四日、市中御備米付、生府老番板藏四間二八間二出来上り、昨日小林三

左衛門殿、御吟味役蠣崎重郎左衛門殿、町年寄村山伝兵衛・桜庭梅太郎、

名主加藤専右衛門・野坂吉六、御用達惣代月行司岩田金藏、請負人月行司

沢田屋久兵衛、右一統相越、御見分相濟候、尤、表通り庇之義者今一兩日

之内出来揚り之積り、

一、市中備米御藏地入用馬行之釘代、生府御藏戸前金物窓筋鉄代、金具屋治

右衛門方書上、高金老朱ト銭式百文、名主九人立会相渡候、

一、藤野喜兵衛儀、法幢寺御普請付町年寄格被仰付有之候付、町年寄之廉者

御札御改の節者御用の間江罷出、御札申上仕来候得共、此節江指方法幢寺

材木等も相廻居候へ者取込の儀も可有之二付、明五日御札御断付而者町御

役所限り罷出、御札申上候様被仰出候旨、小林三左衛門殿御達、則喜兵衛

へ相達、

一、蠣崎民部様、藤田陸郎殿、石塚官藏殿、鎌田武右衛門、今朝御出立御座

候、町年寄継上下、名主麻上下二而御見送り、

五月八日、近年江差姥神本社拝殿共不残類焼付、此度再建有之候間、御寄附

之儀社人方奉願上候処、金老枚被仰付候、尤、本社者老間四方二而大坂表

江切組世話人有之、此節不残出来罷下り候処、代金百五拾兩二仕上り申候

由、尤、内金五拾兩程大坂二而寄附之もの有之由承り候間、為念の認メ置

候、

五月十一日、越後柏崎藏米千俵、同百七拾俵、右二口阿部屋利兵衛宿船積来

候間御買上被下度旨願書、同役談之上、市中備米二買上度趣付、御用達行

司伊達屋庄兵衛・岩田金藏、請負人行司福嶋屋新右衛門・沢田屋久兵衛呼

上付米を以相談為致候処、米性も宜候間直段者市中ならハ七匁四分位二も

可有之哉、御買上米なれハ元船生府江相廻、猶又、御升の違も有之候間、

七匁五分迄御買上ケ相成可然旨申立候、依之利兵衛を以船頭江七匁四分二

掛合候処、七匁五分被成下度旨願出、小林三左衛門殿付米差上、利兵衛方

之書上も差上候処、御披露之上、伺之通七匁五分御買上ケ被仰付候、尤、

米船上ケ藏入之節、内御吟味役立会被仰出候趣御達御座候、依之利兵衛呼

上ケ御買上ケ之義申達候、今日元船生府へ相廻、明朝方浜上ケ之積り、御

升之るい内御役所方拝借いたし相用候積り、人足者市中二而者日々法幢寺

御普請材木相運居候二付、右御米揚も是迄之通大工共人足申付候積り、是

迄御米人足江者昼賄被下候付、此度も賄いたし候積り、御米藏積上ケハ丁

持六人程相雇居積り、浜手江出役相詰候、小家者問屋二而相掛ケ候積り、

御幕者内御役所方拝借いたし候積り、此度ハ市中備米始而御買上ケ之事故、

市中惣代二町代不残差出候積り、右何れも手配方当番名主中林九兵衛申達

候、

五月十二日、枝ヶ崎町工藤忠兵衛居宅之下浜辺市中御備米藏地ニ窺濟之上、

先達而地拵ニ為取掛罷在候処、其後右地所御用之儀有之候間、土藏者博知

石町山田屋福松居宅西手之広小路江相建候積りニ相成候得共、枝ヶ崎浜藏

地者地拵二掛り居候内、右御沙汰付、地普請者其俣日雇相掛ケ置候処、此

度右地拵皆出来ニ相成候趣、名主中林九兵衛届出候、其段小林三左衛門殿

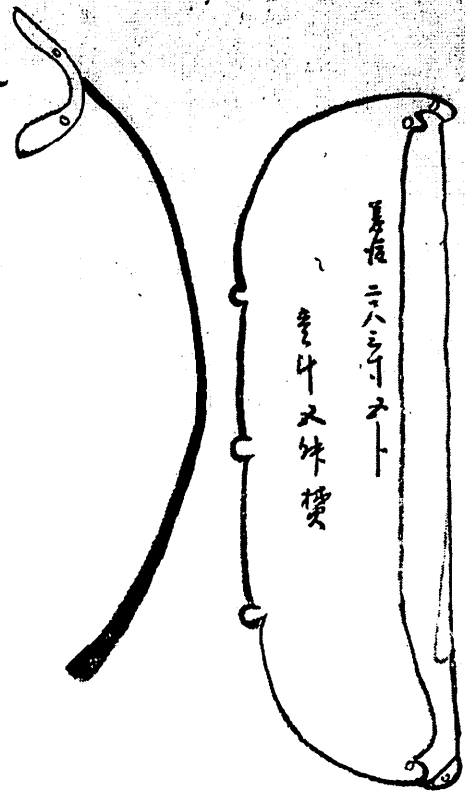
江申上候、

一、北蝦夷地御交易ニ御用ひ被遊候鍋大小廿五枚申付候様、小林三左衛門殿

方去五日被仰付、図書御渡付、名主九兵衛を以泊川町鍛冶四郎兵衛江鑄方

申渡候、図書左之通り、

〔左図有〕



老斗七升焚 但、同風二而 老斗七升焚 拾枚

但、皆四ツ耳

三ツ耳八枚

老斗<sup>ツ</sup>五升焚拾五枚、内 大釣り取置、小釣り定付、

四ツ耳七枚

右図書、四郎兵衛江為相渡候、猶亦、委細者内御役所方被仰付候積り付、

四郎兵衛差上候、

五月十三日、昨十二日市中御備米千百六拾九俵、生府老番蔵江積入俵数書上

左三、

覚

一、越後米九百九拾九俵 改升四斗壹升壹合五勺入

一、同 百七拾俵 改升四斗九合入、

千百六十九俵

右者市中備米老番蔵江積入仕候間、此段御届申上候、以上、

申五月十二日

但、半紙江相認め、小林三左衛門殿江差上候、

五月廿日、愛宿社殿零落付御普請願之通被仰付候二付、御見分として御奉行

小林三左衛門殿、御吟味役蠣崎重郎右衛門殿、町年寄村山伝兵衛・桜庭梅

太郎、名主中林九兵衛、書役兩人、町方頭取老人、町方御先キ兩人、御作

事方大場忠左衛門・佐藤豊七、下役杉村孫壯、大工頭老人、御目附今井善

兵衛殿、右一同罷越御見分いたし候、

一、白石片倉小十郎殿祈願所白鳥明神社人代下社家三戸益人罷下り、来七月

迄逗留届、佐々木大和方御届書差上候、

一、諸士并御徒士備米買入方左之通、

米六十三俵 中書院一同四十式軒 老軒付老俵半ツ、

米 中ノ間御先手組一同

金百三兩三分ト式貫五百三十文、此金高丈ケ俵数買入可申事、

尤、少々過金有之、老俵代無之候節者其分者相返ス可申事、

米 新組・古組御徒士、御通辞共一同

金廿三兩一同方寄り有之候へとも俵数ニ寄代金少々不足有之候

節者一同方此方へ相渡候積り、

町年寄  
御用達  
名主  
請負人

右之趣、彌崎四郎左衛門殿方買入方可致旨被仰付候、

一、叶丸之儀、岡田半兵衛江先達而御預ケ被仰付候間、同船為登道具并板蔵生府町ニ立置候俟御用之間方御沙汰付、内御役所御勘定所方右蔵とも御預ケ被仰付候間、品書者御奉行所御日記ニ委細認メ有之候間、別段預り書等同人方差出不申候而も宜旨、小林三左衛門殿方被仰聞候間、此段認メ置申候、

五月廿四日、社人佐々木大和書付を以、馬形宮拜殿普請中社内江小家掛ケ為用心之留主居之もの差置候間、此段御届申上候趣之書面、小林三左衛門殿江差上候、

一、守随方秤之義、手前ニ勝手次第錘縮共取替候義ハ勿論怪敷秤等 不相用申間敷、又西三十三ヶ国之秤者不相用様御触面出ス、定例の通、御用達、問屋、小宿、請負人江触書御差出ス相成候、

一、越後村上米四百俵京屋平八方七匁五分ニ売上度趣願出、御用達・名主・請負人江相談之處、先日方少々米相庭引下ケ候間、七匁三分迄可然旨申出候付、此段書付ニ而附米相添伺上候、尤、御家中積米之廉江御買入仕度旨申上候處、御評儀之上御買入方御達相成候、

五月廿六日、西館稻荷拜殿大破付、曲馬興行仕候而右助情を以普請仕度趣、尤、城下・江差・箱館ニ而晴天十日宛之願書、佐々木権太夫并氏子中の方則二通願書出ル、

一、善光寺寄附金之内、金六十五兩御用達・請負人行司呼上ケ申付遣候、尤、六月五日小林三左衛門殿箱館江御出立候間、其前二日頃迄取集可差出趣申付遣候、

一、馬形宮社地ニ料理屋様之小家相見得候付、急段引取方、佐々木大和呼上

ケ申達候、右小家住居之もの者中町弥惣八与申者之由、右者吟味役所へ伺の上被仰付候、

一、佐々木大和書付を以、馬形宮社地の内江普請番小家相懸度願書御下ケニ相成候、此後番小家相掛ケ申度候半々丸小家か亦者極手輕キ小家莖張などに可致趣共申達候、

一、西館佐々木権太夫并湯殿沢町宇兵衛同様曲馬興行、願の通り被仰付候、一、金千兩藤野喜兵衛、金六百兩伊達林右衛門、金五百兩栖原屋庄兵衛、金六百兩山田屋文右衛門、金二千七百兩

右者当七月五日江戸下谷御家敷江為御替被仰出候分、当六月朔日御下ケ金可有之哉、依而五月廿九日迄為替手形添状とも可差出様相達、一、町代一同方法壇寺御普請付、金千五百疋寄附仕度趣願書差出候間、奥印いたし、

一、御朱印地

武州多摩郡

中埜八幡宮

神主

中埜豊前介

明石主膳

家来老人

運平

右者去ル巳年武州陸奥ニケ国御免勅化被仰付候付、昨廿八日至着仕候付、昨夜之處ハ箱館宿伊兵衛へ申付候様、名主半右衛門相達、今朝彌 四郎左衛門殿へ右之趣申上置候、為着届今日田中九八旅宿迄差遣し候、

一、禅寺焼場の儀、此節御差留ニ相成、御用透二者御奉行所御見立被成候積

り御座候得共日々葬式有之、度々法幢寺を願出候付、右焼場地所御見立候迄当分之内法幢寺焼場二而禪寺四ヶ寺之分者為焼候而不苦候旨、蠣 四郎左衛門殿被仰下候間、法幢寺役僧旭音呼上ケ申達候、尚又、法幢寺焼場の道筋此節御普請付材木沢山有之、通路不相成候間、龍雲院寺内を焼場へ通路致ス候趣、為心得龍雲院役僧呼上ケ相達候、

六月朔日、町代一同法幢寺へ寄附金千五疋、願の通り被仰付候、尤、納方之義者当申年方亥年迄四ヶ年割合、尤、当年之分者此節方七月十五日迄内御役所へ相納候様、以御書取被仰付候間、名主百六江相達、

一、廿九日蔵入二相成候中書院方御通辞迄高米貳百九十石俵并丁持式人賃錢共委細相認メ候間、御番四郎左衛門殿差上候処、席々江為御見被成候旨承り候、尤、別段御用之間江書面御覽二入不申様ニ承知仕候、

六月二日、当正月廿一日着、二月九日出帆いたし候津輕家三上兵司上下三人、栗原慶助、足輕三人、同心四人、以上拾老人、小泊ノ長之七ヒクニ一件付請取方ニ差越候間、工藤忠兵衛方ニ而逗留中賄入用高ノ百三貫五百廿三文、一、仙台白石 白鳥明神社人山家豊前介方書状、佐々木大和持参いたし、則蠣崎四郎左衛門殿差上候、

一、中野八幡宮御朱印地社人中野豊前介外老人方切書ニテ町年寄名前ニテ今明日中二右之私宅江罷出御礼申度申参り候間、其俵蠣 四郎左衛門殿へ差出置候、右同様何れ御用ノ間江被仰上候旨、御咄御座候、

六月四日、白鳥形部書付を以、吉岡村に安置仕候八幡宮往古者 御上様方御建立ニ御座候処、先年御料之節御手入有之候後、此節及大破候間、御時節柄奉恐入候得共、多少不限御下ケ金被下置候半々其余者此度限り村中之寄附を以取繕申度趣願書、蠣崎四郎左衛門殿差上候、

一、仙台白石 八幡宮之御守札之儀、明朝差上候様、蠣 四郎左衛門殿御達有之候付、佐々木大和へ申達、

一、武州多満郡御朱印地中野八幡宮神主中野豊前之介、右社殿零落付於 江戸表御免勅化被仰付候テ此度当所為巡行罷下り、去月廿八日三厩方至着致候節、差掛り箱館宿越前屋伊兵衛方旅宿為致候へとも、同人方へも箱館方追々罷登滞留のものも有之付、右社人上下三人者昨日方江指大西屋文右衛門方へ引移候、着以来名主田中九八度々旅宿江見舞ニ遣し様子為承候、旅宿料之儀者 御上様ヨリ被下置候旨、蠣崎四郎左衛門殿方御達、三度ツ、賄之外酒肴も内々差出候事故、老人付金老朱ツ、賄料可遣旨、名主を以文右衛門へ申付候、右社人方名主九八を以今朝御神札木札老杖、紙札老杖差出候間、蠣 四郎左衛門殿差上候処、御披露相成候、

一、仙台白石白鳥明神之神主山家豊前之介方当方御奉行衆へ書状を以、罷下り候下社家三戸益人方今朝御神札老杖箱入二いたし差上候処、為御初穂金三百疋被下置候、猶又、市中在々勅化之義者去巳年中類焼の上、米価引続今以高直之時節候へ者勅化の義者見合可申、依之別段金五百疋被下置候趣、蠣崎四郎左衛門殿方佐々木大和江委細被仰付、右金包同人江御渡、夫方三戸益人江申談候積り、

一、江戸表方黒ぼく申石に似寄候小石数二十相尋候而可差出旨、御小書院方被仰付候、

一、吉岡村八幡宮及大破、此度限り村内ニ而普請之義者願之通被仰付候、尤、白銀二枚被下置候、

一、金千五百両、内訳金七百五十拾兩藤野喜兵衛、金七百五十兩西川准兵衛・岡田半兵衛、右者御入用之儀御座候付、書面之通り御借上ケ被仰出候、尤、

唯今急之儀ニも無之候間、兼而相心得罷在候様可申達旨、蠣崎四郎左衛門殿御達付、喜兵衛・准兵衛・半兵衛右三人江申達候、

一、御免勅化武州中笠八幡宮社人先達而罷越候処、時節柄市中在々巡行致候半々一同迷惑ニ可存、依之去々午年罷越候御免勅化甲州御嶽山之振合を以立替金いたし、巡行者致間敷被仰出候、尤、金高者成丈相減取極メ候様、

蠣 四郎左衛門殿方被仰出候、最初者村山伝兵衛・桜庭梅太郎継肩衣ニ而一通り着届ケとして社人旅宿へ相越、其後去ル九日、張江又八・村山重左衛門、前同様罷越候節立替金之儀先方方晰合有之候由、尤、其已前名主九

八を以立替金三十兩いたし度申向候へとも中々承知無之、六十金ニ取極メ吳候様申居候趣御座候得共、猶又、宮川半右衛門・田中九八を以金高相減

候様昨日先方へ談合為致候処、立替金六十兩方者減方不相成、勿論御嶽山之節者立替金八十五兩之由承り居候へとも、当年者前浜漁事も無之不景氣

之旨向地ニ而承知いたし相越候故、御嶽山方者相減六十金ニ而取究度与申事候、乍去夫ニ而者御都合不宜候半々巡行いたし候様被成下度趣、社人共

申聞候由、半右衛門・九八方今日申立候、依之同役申談事候処、六十金に取極候方可然付、明朝御奉行所へ相伺候積り、

一、市中備米、村上米（升四斗四升入）貳百俵、直段七匁七分、宿阿部や利兵衛、越後建村米（元升四四入）五百俵、直段七匁五分、宿京屋平八、右

米申上候処御聞届付、天氣次第生府老番蔵入之積り問屋申付候、猶、名主へも申達候、

六月十二日、中書院積米六十三俵代金三十五兩壹朱ト貳百拾壹文、外二丁持せん百八文、氏家六郎左衛門殿、蠣崎織人殿持參受取、

一、竹屋彦左衛門書付を以、生駒鋌三郎様家中齋藤上苗上下貳人用事有之、

去八日罷越、来ル廿日頃迄滞留中引請仕候趣、御届書差上候、

一、御免勅化立替金六十兩の義、昨日名主半右衛門・九八申出候趣俱々蠣四郎左衛門殿申上候処、御用之間江伺之上、右六十金ニ取極メ候様被仰出候間、右名主を以今日先方社人江挨拶の上取究候積り、

一、北蝦夷地之儀ニ付、伊達林右衛門出府中ニテ代庄兵衛病身付手代松五郎、栖原屋庄兵衛代甚吉、中町九兵衛右三人御呼出し之上被 仰出候御書取、

町奉行中江

北蝦夷地之儀者重キ御趣意有之、御用達伊達林右衛門・栖原故六郎兵衛江御預ケ被成候処、當時之庄兵衛儀者御用達之身分ニも無之候付而者最初方之御趣意違ひニ相成、其上右場所御用有之候付、今後御引上ケ被成、以来

御直差支ニ被 仰出候、尤、当年出産之荷物者庄兵衛へ相渡、来酉年正月元日方御直差支相成候間、其旨庄兵衛江可被申渡候、

申六月

伊達林右衛門

北蝦夷地之儀者重キ御趣意有之、其方并栖原故六郎兵衛江御預ケ被成候処、當時之庄兵衛儀者御用達之身分ニも無之、其上右半方御用有之、庄兵衛方御引上ケ被成、来酉正月元日方御直差配ニ被成候積り、尤、其方江者是迄之通半方被成御預ケ候間、諸事御直差配之差支ニ不相成様入念相勤候様被仰出候、

町奉行中江

中町百姓

九兵衛

今度北蝦夷地之内半方御直差配被成候付、右九兵衛御雇入被成差配方被仰付候、右付、苗字帯刀御免被成候間、其旨同人江可申渡候、

申六月

町奉行中江

今度北蝦夷地御直差配被成候付、追々会所御取立被成候間、其節者手代三、四人も雇入不申候而者差支可申候間、九兵衛存寄次第人物を撰ミ申立候様、九兵衛へ可被申渡事、

右之趣於御座鋪御番頼崎四郎左衛門殿被仰渡候、御吟味役工藤茂五郎殿御立会被成候、

一、九兵衛苗字相尋候処、小川九兵衛与申候趣申出候間、其段申上置候、

六月十四日、加賀様方米老万石緋るい、二而交易、正院村七右衛門と申もの、年々罷下り心得居候間、取組候様仕度、江戸表方申参り候付、御奉行所方御用達・請負人一同へ申聞、無腹職申談の上可申立旨被仰出候間、兩行司江此段申付写相渡候、

一、市中備米、京屋平八方買入左二、

○ 越後館村米四百拾六俵 改升四二卷五入 直段七匁五分

○ 越後村上米百九十卷俵 改升三九八八五入 直段七匁七分

○ 是ハ阿部屋利兵衛方買入

右之通二口、昨十四日生府彦番蔵入いたし候、尤、御役所方吟味役藤林重治殿・佐藤吉左衛門殿、町年寄四人、名主半右衛門・九八、町代嘉兵衛・仁右衛門出役無滞相濟、

六月十六日、茶屋一同方先日願書を以、当時至り茶屋同様渡世いたし隠売女差置候ものも有之哉二相聞ひ候間、御調被下度書面差出有之候得共、此度

者右書面願下ケ仕度、茶屋世話役申出候段名主九八申立候間、同役談事之上、右願書九八江下ケ遣候、

一、法幢寺去冬焼失之後宗円寺ニ罷在候処、法衣其外秘用品所持無之、当惑仕候付、注文仕候処、追々相下り候得共、代方弘方必至と難渋仕候間、御金百兩拜備被仰付被下置度、尤、来酉年方向午年迄十ヶ年割合、年々金拾兩ツ、上納仕度趣願書差上、御聞濟二相成、近藤吉左衛門殿、法幢寺役僧江御達有之候、

一、北蝦夷地半方伊達林右衛門江是迄之通御預ケ被仰付候付、請書為差出候様、近藤吉左衛門殿御達、

六月廿日、中塾八幡宮御免勸化之儀、御当所・江指・箱館并市中在々諸寺院、尚又社家共、三ヶ所二而都合六十兩二而立替仕切に相極候、則金六十兩取集之内、御用達中々当座借上ケ、名主宮川半右衛門・田中九八を以書附相添、中塾八幡宮〔社役人〕中野豊前之介相渡、右書付認メ方左二、

|         |
|---------|
| 半紙      |
| 御免      |
| 勸化      |
| 軒別取集神納帳 |
| 上書之写    |

奥州松前

松前隆之助

一、金拾七兩 福山市中 家数貳千貳百九十八軒

一、金四兩 福山付在々 家数千百廿五軒

一、金三兩 同町在 諸神社

一、金九兩 江差市中 家数千貳百四十五軒

- 一、金七兩 江差附在々 家数貳千三百軒
- 一、金貳兩 同町在 諸寺社
- 一、金九兩 箱館市中 家数千貳百六十軒
- 一、金七兩 同附在々 家数貳千七百七十軒
- 一、金貳兩 箱館町在 諸寺社

都合金六十兩 但、本紙者都合書無之候、  
天保七丙申年六月

取集惣代

松前町年寄四人印

名主五人印

一、勝軍地藏堂ニ変死有之候付敷板取替候義、阿吶寺手限りニ而仕度旨申出候、右御開濟被仰付候、仍清メ御祈禱修行付金百疋御初穂被下置候、則覺定江相渡、

一、法幢寺御普請木浜方配り人足昼賄焚出し御用達中相濟候付、請負人中ニ而廿四日方可致趣、行司沢田屋久兵衛ヨリ申談候、

一、こま廻興行、今日方相始候儀御聞届付、町方頭取高橋順平江相達、

一、武州多摩郡中塾八幡宮御免勅化為取集神主中野豊前之介、社役人明石主膳罷越候付、当所・江指・箱館惣市中之分金六十兩立替相成、金子相渡、

今日御用ノ間方御初穂金三百疋御渡、則水引包、右御用部家ニ而新井田周治殿方差廻、田中九八江相渡、

一、生府町化粧川西手ニおゐて此度市中備木板蔵相建候付、地面相調候處、前田欲治抱地ニ而当時栖原屋庄兵衛へ貸置候由、庄兵衛相用居候西手荒地ニ候間、手入いたし今明年板蔵相建、余者庄兵衛相用居候處も年季明相成候上、明後年相建候積り、依之今日村山重左衛門方申立候處、前田欲治方

右地所御引上ケ相成、追而代り地被下置候積り、其旨御用部家ニ而新井田周治殿方御剪紙被遺候、

代三百四十五貫文

一、秣拾五万抱 壹包付貳文三分ツ、

此金五十兩二分三朱ト三百廿五文

此半金廿五兩壹分一朱ト三百七十五文

右者当年秣代金、半金御下ケ金被下置度趣、馬差宗治郎、根部田与兵衛、川原町太作、名主連印之願書奥印いたし、新井田周治殿へ差上候、

一、法幢寺御普請材木江差廻り之分運ひ人足昼賄被下置候付、是迄御用達之内藤野喜兵衛除キ外六人ニ而三日宛十五日相賄候へとも、此後焚出し世話之義請負人江申付候處、明廿四日方日数十日限り御請申上候、月行司沢田屋久兵衛罷出申上候、尤、人足老人玄米五合宛之定、尤、昼斗り一賄ニ而、

一、出羽庄内湯殿山鉄門海（弟子）金海、右之行者宗用付、当所宿種倉屋七右衛門、加茂ノ善五郎船乗、当月廿一日到着仕、爰元滞留中引受仕、尤、拙寺隨身仕候間、此段御開濟被下置度旨、阿吶寺方書面差出候、

一、中書院中ノ間御先手組御徒士方御通辞まで積米之儀、市中備米蔵江預り代金請取候分丁持錢共通三冊江当御役所御印ニテ相認メ、席々江名主九兵衛を以差遣候様申付候、

一、小川九兵衛儀、御用達格被仰付候、尤、北蝦夷地平方之儀者請負同様ニ相心得、仕入代品共手限りニ而手配可仕、万一差支候節者御下ケ金も可有之、会所之義者追而地所見立可申候、尤、伊達林右衛門江諸事申談、且、明西年方金五百兩増金いたし上納、蔵地所者枝ヶ崎町浜空地の外追々見立可申上候、委細被仰渡候御書付者兩人江寄通ツ、御渡有之候、但、九兵衛義麻上下ニ而罷出候、林右衛門代庄兵衛尤羽織袴ニテ罷出候、

右之趣、新井田周治殿方被仰渡、伝兵衛・又八罷出候、

御用達惣代

六月廿八日、栖原屋庄兵衛手船通吉丸沖船頭平吉儀、追而御用之儀有之候間、

岩田金藏

蝦夷地并他所江茂不差出、船乗も不為致、当所へ差置可申旨被仰付候、猶

伊達林右衛門代

亦、ル、モツへ支配人福松儀、御用有之候間為呼登候様被仰出候、右両様

庄兵衛

御番新井田周治殿方御達御座候旨、昨夕方村山重左衛門方通達有之候間、

町御役所

今朝栖原屋庄兵衛呼寄相達候、

右之通半紙江相認メ差出候間、新井田周治殿江差上候、

一、加州米老万石与当所出産鯡類与交易年々取組申度能州正院七右衛門申立、

一、小川九兵衛義書付を以、今般不存寄御用達格被仰付冥加難有仕合奉存候、

加州御留主居方江戸御屋敷江御問合相成候二付、否哉の義被仰遣候間、右

依之奉願上候茂恐入奉存候得共、御席之砌、御目見御礼被仰付度趣願書

取組方如何二有之哉の旨、先日御用達・請負人江御尋御座候処、一統申談

奥書之上差上候、

之上、書面を以御答申上候、左二、

一、御免勅化武州中笠八幡宮木札先日差上候付、御初穂金三百疋被下置候処、

口上書

社人中笠豊前之介方請取書名主九八持参差出候間、今日差上候、

加州様御藏米御当所出産之鯡類与御交易之儀、能州正院ノ七右衛門与

一、栖原屋庄兵衛書付を以、西蝦夷地ル、モツへ・テシホ来酉年季明付以後

申者申立御座候由、江戸表方御書面御座候趣被仰聞奉承知候、随而右

成年方辰年迄是迄之御運上金高二而引統御請負被仰付度奉願上候、尤、跡

御米御取組被遊思召御座候而私共へ御尋ニ付奉申上候、右御米之義者

年季奉願上候付、為御冥加金貳百両上納仕度願書并御運上金別紙相認メ願

是迄年々諸廻船多少積下り候得者過分之儀ニも無御座候、一体加州御

書相添差出候付、奥印いたし差上候、

米之儀者升五斗余ニ御座候へ者平日遣ひ勝手不宜、其上土用中ふけ米

一、小川九兵衛御用達被仰付候付而之献上品先々御用達之振合を以輕節老連、

相成候米底も有之候、且又、蝦夷地仕入差下し候而も困米ニ仕候節ハ

白羽二重二疋代金五両也、右に準差上可然哉、新井田周治殿へ御伺申上置

同様減石相立迷惑奉存候、何れ定式御取組相成候御儀も御座候而者御

候、

当所産物売買も何となく手狭ニ相成候姿ニ御座候得共、御取組之義、

私共義者熟談仕兼候間、乍恐此段奉申上候、以上、

申六月

請負人惣代

沢田屋久兵衛

福嶋屋新右衛門



余市水産博物館研究報告別冊

平成25年3月31日 発行

編集・発行 余市水産博物館

〒046-0011 北海道余市郡余市町入舟町 21

TEL&FAX 0135-22-6187